

タラ・ダンカンと空白
少女

オタクさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷をいつの間にか抜け出してしまった。エレン・ふわふわ頭・オーレウス。そんな事を気にせず夢を叶える為、旅をしている。

そんなある日、出会った男性を助けたことで別世界《オートルモンド》に行くことになったのであった。

そして仲間達と出会い壮大な大冒険が始まるのであった。

駄文あり、不定期投稿、更新が遅い、エレンのオリキャラ化などがありますがそれでも良ければどうぞ

目次

プロローグ	1
若き魔術師たち	
第1話 別世界へ	15
第2話 トラヴィアの王宮	25
第3話 カリバン・ダル・サラーン	45
第4話 オートルモンド【別世界】について	69
第5話 王との対談	88
第6話 交流	105
第7話 初披露	119
第8話 最悪な始まり	131
第9話 煉獄へ	151
第10話 煉獄	171
第11話 一難去ってまた一難	191
第12話 ペガサス	203
第13話 病気	221
第14話 日常	250
第15話 誘拐されたタラ	263

プロローグ

険しい山の中、一人の少女と一匹の白猫が歩く。

草も生えない何も無い大地を歩き、岩だらけの急な坂を乗り越え頂上を目指す。危険な場所にも関わらず保護者など居らず、明らかに可笑しい様子なのだが、本人は猫を連れて堂々と歩く。

歳は12歳頃の少女。太陽の光に反射する程光輝く金髪は腰まで長く伸び、金色の瞳は楽しげに光っている。全身は赤色でコーディネートをされており、赤のエプロンドレスに赤いリユックサック、赤いりぼんで可愛く結んでいる。

頂上に辿り着いた少女は、希望に満ちた眼差しで景色を眺めていたのであった。

少女の名前はエレン・ふわふわ頭・オーレウス。見た目とは裏腹に1000年以上生きていた魔女だ。

何の為に長生きをしていた理由は今となつてはあやふやだった。そんなあやふや状態でも、一つだけ大きな夢を抱えて生きていた。その夢は魔法道具店を出す事。

昔は魔法店を出していたが、時代が変わるにつれて店を出せなくなり潰れてしまっ

た。

店が潰れた影響でお金が無くなり、途方もなくさ迷っていたエレンはある場所に迷い込む。その場所の名は幻想郷。

幻想郷。

妖怪や神などといった、不思議な存在と共に生きる隠れ里。幻と書いて如く、普通の人には絶対に辿り着く事が出来ない場所。

魔法使いの存在が大つびらに出来る幻想郷に店を出していたのだが、人があまり来ない博霊神社の中に有った為に長くは続かなかつた。

今は材料を集めながら旅をし、もう一回店を出すチャンスを伺っている。本来は幻想郷で店を出すつもりであつたし、幻想郷から出ていくつもりも無かつた。それなのにいつの間にか幻想郷の外に出てしまつていた。何故、幻想郷の外に出てしまつた理由はエレンにも解らなかつた。だけど、当の本人はそんな事を気にしていなかつた。

最初の方はエレンも気にしていたが、長生きの影響なのか物忘れが酷く、段々と忘れていき次第にま、いつか。と気にしなくなつていった。

それでもエレンは夢を叶える為に今日も歩き続ける。

あれから夕方頃には山を降りていた。

本来は子供の体力で山を一日で攻略する事は不可能である。けれども、魔法で浮かんで坂道や崖を楽々と越えていく。そのお陰か夜には麓の森まで進む事が出来た。しかし不運な事に、森に入った途端急に雨が降りだす。

雨の勢いは凄く、バケツを引っくり返すようなどしゃ降りとなり、しかも遠くからは雷の音が聞こえてくる。

エレンは急いで走り雨宿りを出来る場所を探す。

「もうー雨なんか降らなくて良いのに〜！」

エレンは眩き足元に気をつけながらも無我夢中に走る。

暫く走ると運良くログハウスが有った。安全の確認もせず、扉を開けようと勢い良くドアノブに手をかける。手がドアノブに軽く触れた瞬間…

「きゃっ！」

バチツと静電気が走る。

よくある手に電気が走るのではなく、なんと逆立った髪の毛から音が出たのであつ

た。

「ほんと…嫌になる……」

突然の雷雨よりも気分が落ち込むエレン。昔からこの謎の髪質が大嫌いだった。

エレンの名字ふわふわ頭・オーレウス。

オーレウスは代々と続く正式な名字であったが、ふわふわ頭はエレンの時につけられた新しい姓だ。ふわふわ頭の由来は魔法を使ったり、掛けられたりすると髪の毛が静電気により逆立ち、タンポポの綿毛の様に頭がふわふわしているからと、祖父が名付けたものだ。

家族にとっては笑い話でも、エレンからしてみればどんな事をしても治したい髪質だった。ぼさぼさ頭になる事が嫌すぎて普段から、便利で強力な魔法を極力使わないようにしていた。

(でも……私の髪の毛がパチパチする事は……この家には魔法が掛かっっていて、家中に魔法使いが居る可能性が高いと……さて……どうしよう……)

見付けた安全地を見ず見す見逃すのか、それとも、訳を言って入らせて貰うのか。エレンは雨に濡れながら考える。

(よし……決めた……)

意を決したエレンは口を大きく開く。

「誰か居ませんかー!?居たら返事をして下さいー!」

エレンは家に入らせて貰う事に決める。

家の中に居る人物が悪い人かもしれない可能性も考えていたが、このまま雨に濡れるのは嫌であり、風邪を引いてしまう方がかなり厄介だ。また何よりも逃げる事、攻撃を躲す事が自信が誰よりもあつた。襲われても大丈夫だろうと、そんな自信がエレンを高く括らせる。

エレンがじつと待っていると無言で扉が開かれる。

扉を開けてくれたの男性だった。濡れたような美しい黒髪、烏の羽のように黒い瞳。整った顔立ちは熱で真っ赤になり、時折酷い咳きを込み、スラツとした体格が更に体調を悪くみせる。

「…………… どうしてこんな所に子供が…………… まあ良いか…………… 入っておいで……………」

「お兄さん大丈夫?」

熱でふらふらしている男性は思わず本音を呟く。

心配したエレンが声を掛けても、男性からの返事は無く、ふらふらとしながらベットに向かう。

「私、風邪薬を作る」

助けてくれた恩を返すと決めたエレンは、ドアを急いで閉めて暖炉に向かい、自分の

リュックサックから風邪薬を作る為に必要な材料を取り出す。暖炉の近くには水や食料、鍋などの調理器具が置いてあった。

「道具借りるね」

エレンは男性の返事を待たずに勝手に始める。

小さな鍋に水を入れ、材料となる薬草を磨り潰したもの、乾燥させたものを手際よく沸騰した水の中に入れて煮込む。

鍋の中身の様子を見ていたエレンはいきなり、ピースをした両手を目元に当てる、可愛らしいが意味の無いポーズをし出す。

だけでも、ポーズには意味があつたようで、ポーズと同時に髪の毛がパチツと少し逆立ち、鍋からもポンと音が鳴る。鍋を覗き込めば、見事に緑色の怪しい液体が出来ていた。

薬が出来て満足げになったエレンは、にこやかな笑顔で鍋からコップに移し替えて男性に渡す。

「はい、どうぞで」

「ああ……… ありがとう……」

純粹な子供の笑顔に男性は断れず、表情を引きつきながらもエレンにお礼を言いコップを受け取る。

いつまでも眺めている訳にもいかず、男性は覚悟を決め薬を少し口に含む。

あまりの苦さに吐きそうになるが、気合いで何とか我慢をして飲み込む。なんと飲んだだけで咳が止まる。薬の効果を実感すると残りを一気に飲む。顔色がまだ少し悪いが、明らかに先程よりも体調が良くなっていた。

「ありがとう。君もやはり……魔術師【ソルスリエ】何だね」

「……………ソルスリエ……………？何それ？聞いた事ないよ？」

「……………君は魔術師【ソルスリエ】ではないのか……………？」

「ソル……何とかではないよ。お兄さんが魔法使いで、私は魔女。何を言っているの？」
「魔女!? 魔術師【ソルスリエ】ではなくてか？」

「ソル何とかなんて知らないよ。それに、さっきから何でそんなに驚いているの?」

男性の驚きようにエレンは戸惑う。

男性は戸惑ったエレンを見て平静を取り戻す。

「ソルスリエ……簡単に言えば魔術師の事だ。魔術師がソルスリエと呼ばれている理由は、いくつもの魔術を行えるからだ。まあ君みたいに魔法使いや魔女を混同する人は多いけど……だけどそれは、ノンソと呼ばれる一般人が勘違い。しかし……君は何で此処にいるんだ? 何で魔術師【ソルスリエ】の存在を知らないんだ?」

「旅をしているからだよ」

「旅をしている？両親は？」

「お父さんは病気で死んで、お母さんはずっと前にはぐれた」

記憶力の無いエレンでも当時の事を覚えており、泣きそうになった顔を見せないように俯く。

「そうか……辛い事を聞いてしまつて本当にごめんね。それと本当に助かった、ありがとう。自己紹介がまだだったね、私の名前はルドウガ・ドライオン。君の名前は？」

「……私の名前はエレン・ふわふわ頭・オーレウスです」

辛い気持ちから一転をして、ルドウガの爽やかな笑顔にエレンは見惚れてしまう。

「オーレウス!？」

ルドウガはエレンの悲しんでいる姿よりも、オーレウスの部分に過剰に反応をする。気になる理由が分からないエレンはキョトンと見詰める事しか出来なかった。

「いや……別に何でもない……。そう言えば何で旅をしている？」

ルドウガは慌てて取り繕い話を変えた。エレンは疑問に感じていたが、特に質問はせずに答えた。

「魔法道具のお店屋を出すためだよ」

「魔法道具店か……地球では出してはいけないのだけどなあ……どうしてこんな子が知らないのだろうか……。今は気にしていても仕方無いか……。お店屋を出すので

あれば、別世界【オートルモンド】で出すのはどうかな？」

ルドウガは手で顔を覆い隠しながら愚痴を溢す。だけど、ずっと暗い気持ちでは先が進まないの、何とか気持ちを立て直して話を進める。

「オート…何それ…？」

「別世界、通称【オートルモンド】。別世界【オートルモンド】とはどこでも魔術が見られ、そして魔術により文明が盛んな惑星だ」

「へえー、そんな惑星があるんだ」

最初はいつでも良かったのだが、徐々に理解が追い付き、ある事に気が付くと目を輝かせて聞く。

「じゃあさあ！そのオーなんちゃらなら！魔法道具のお店屋出せるの!？」

「ああ、出せるとも」

「本当に？やったあ！」

夢が叶えられると知ったエレンは、大喜びをしてソクラテスを抱き上げたり、跳び跳ねたりしてその場ではしゃいだ。その様子をルドウガは、まるで我が子を見守るかのように温かい眼差しで見ている。

素に戻ったエレンははしゃぐのを止めて質問をする。

「あ…でもどうやって、そのオーなんちゃらに行くの？」

「それは明日付いて行けば分かるさ」

「ル、ル、ルド：． お兄さんが連れてつてくれるの？」

「ああ、そうだよ」

ルドウガはエレンの物覚えの悪さに、少し変だと思っていたが質問はせずに心の中に止めておいてくれた。

「何で連れてつてくれるの？」

あまりの親切さにエレンは疑問を抱く。

そんなエレンに安心させるように、お茶目に右目をウィンクさせながら優しく語る。

「君は、私の病気を治してくれた恩人だからね。親切にする事は当然の事さ。だから気にする必要はないよ。後：．魔術師〔ソルスリエ〕は高等魔術評議会に登録する義務づけられているから絶対に連れて行かないといけないんだ」

「へえー、そうなの」

「ああ、そうだ。その力を悪用しないようにする為にカンリスルノさ。さあ、この話は今日はこちらまで、また明日にしよう」

ルドウガは話を無理やりでも終わらせる。この話は今日中に語りきるのは無理だからだ。

「さあ、明日はこの近くにある村に行くよ。だからご飯を食べて早く寝よう」

ルドウガはもう話しをする気はないらしい。体調が少し良くなったルドウガはお礼も予て料理を作り始める。

エレンは話しを聞けなくて不満だったが、それよりも魔法道具のお店を出せる為の一步を実感し、別世界「オートルモンド」に早く行きたいという気持ちの方が強くなっていた。

エレンはウキウキしながら早めの夕飯を食べ終わると、リュックサックから寝袋を出して興奮を抑えながら寝たのであった。

真夜中、エレンがすっかりと熟睡した頃。

ルドウガはゆつくりとベットから降りると、静かにドアを開けて外に出る。

ある程度歩いたルドウガは、ポケットから拳くらいの大きさの水晶玉を取り取り出す。

水晶玉を指で触っていくと音が鳴り誰かと繋がる。どうやらこの水晶玉は携帯電話の役割をするらしい。また、地球の技術よりも発展しているようで、水晶には相手の姿が映っていた。

「こんにちは。シエムナシャオヴィロダントラシヴュ先生」

「何じゃ。こんな真夜中に起こすとはお前らしくないぞ。ルドウガ・ドライオン。一体

何かあったのか？緊急事態なのか!？」

水晶の画面は荒く相手の顔がみえなくても、かなり焦っている事が伺えた。

「いいえ、緊急事態ではありません。ただ……私が出会った、未登録の魔術師【ソルスリ工】の少女が少し……いやかなり……異常な者でありまして……」

「異常な者？それはどういう事じゃ？」

「はい……その少女は……十代でありながら旅をしているのですが……未登録でありながら魔術を上手く使いこなせている事は、容易に想像出来るのでしよう」

「ほお……まあそうじゃな。十代の少女が旅をするには魔術が必要だからな……。だが、わしにわざわざ連絡するの必要は無いぞ。それどころか、こちらの方がもつと大変な事が起きたのじゃ!」

相手はルドウガの言葉に同意したのも、何か起きたらしく興奮していた。

「一体、何が起きたのですか!？」

「今日の夜中、未登録の魔術師【ソルスリエ】の少女の所に、サングラীব族の愚か者が少女を誘拐する為に襲って来たのじゃ!!」

「えっ!?!大丈夫ですか!？」

今度はルドウガが驚く番だった。

「ああ、大丈夫じゃった。その少女は何かサングラীব族の手から逃げ切れたのだ」

「それは凄いですね!!あの極悪非道のサングラーフ族から逃げ切れるなんて。それだと私が異常だと思っていた事は些細な事になりますね」

ルドウガはすっかり興奮していた。

「そちらの魔術師【ソルスリエ】と、こちらの保護したと魔術師【ソルスリエ】。どちらが力を持っているのは知らんが……。とは言え、この程度で夜中に電話をもうするな!いいいな?」

電話の相手は凄く怒っていた。

「はい、すみません。ですが……。最後に……。ひとつだけ……。気になることがあります」
ルドウガは謝りながらも質問をする。

「何じゃ?」

不機嫌になりながらも話は聞いてくれるみたいだ。

「少女の名前が物凄く気になります」

「たかが、名前ですか?」

「はい。少女の名前はエレン・ふわふわ頭・オーレウスのオーレウスの事何ですが……。電話の相手は鼻で笑った。

「ふん、馬鹿馬鹿しい。オーレウスの家のことだろう。膨大な魔力と不老の魔術で歳をとらない一族の話だろう。あれは只のお伽話だ」

「そうですよね。同じ名字で反応し過ぎました」

ルドウガは少しガツカリしていた。

「ふん、もう切るからな」

「はい、本当にすみません。シエムナシャオヴィロダントラシヴユ先生」

ルドウガが謝ると勢いよく電話が切られる。

ルドウガは気持ちを落ち着かせる為、暫くの間星空を眺めていたのであった。

この事が切っ掛けとなり、エレンの壮大な大冒険が幕を開けることになったのだ。

若き魔術師たち

第1話 別世界へ

まだ朝日が昇らない内にエレンの朝が始まる。

ゆつくりと寝袋から上半身だけ起き、周りを見渡しボーとした頭で一生懸命に考え、思いだそうとした。

薄暗い部屋。

エレンの寝袋で未だに寝ているソクラテス。近くにのベットで寝ているルドウガ。灰が残った暖炉。部屋の端つこに置かれたエレンとルドウガのリユックサック。机の上には鍋や皿などの食器が置かれている。窓からは薄暗くもぼやける程度には見える景色。

（あれ……ここは何処？何でここに居るの？すぐ近くに寝ている男性は誰だっけ？うん、思い出せないなあ。でもなんか、異常な程のワクワク感があるんだよね）

エレンがゆつくりと立ち上がり、ドアノブを回そうとした瞬間ルドウガが起きる。

「おはよう。エレン」

「おはようございます。えっと……誰でしたっけ？」

エレンは挨拶をし申し訳なさそうに尋ねる。

「…………… ルドウガ・ドライオンだ」

ルドウガはすっかり呆れ果てていた。

「はあ… まったく… いい加減、名前を覚えなさい」

「ごめんなさい」

エレンはシユンと頭を垂れる。

ルドウガはエレンの様子を見て反省している事がわかった。なので溜め息はついたが、それ以上言わない事にした。暖炉の前に立って仕切り直す。

「まだ、夜明けだけでも二度寝する気はないし。さっさと御飯を食べて別世界【オートルモンド】に行く準備でもしようか」

「別世界【オートルモンド】… って何？」

ルドウガは思わず転びそうになってしまった。

「エレン、別世界【オートルモンド】すら覚えていないのかい!？」

「うん、私昔から物覚えが悪くて」

エレンは申し訳なさそうに言う。

「よく今まで旅してこれたね。一歩間違えれば死んでいたかもしれないよ」

ルドウガは呆れた様子を隠さずに言う。

「私だって、身を守る方法とか！戦う魔法とか！ちゃんと覚えているから平気だもん！」
カチンとなったエレンは必死になって言い訳をする。

その様子が微笑ましく見えてきたルドウガは、エレンの頭を撫でながら言う。

「はいはい、わかったよ。言い過ぎてごめんね」

子供扱いされたエレンは恥ずかしさのあまり、顔が真っ赤になってしまい思わず顔を俯く。けれど、撫でているルドウガは違う事を考えていた。

どうしてこんな幼い子供が力を持っているのだろうか？魔術には詳しいのに何故別世界「オートルモンド」の事だけは知らないのだろうか？疑問を誤魔化す為にも撫で続けていたのだが、それでは先に進まないでエレンの頭から手を離す。

「少し早いけど朝ご飯にしようか？」

「……………うん」

照れて返事が遅れるエレンであった。

朝の日差しが漸く差し掛かった頃、エレンとルドウガは朝御飯を向かい合って食べていた。

朝のメニューはパンとチーズと少し焼いた干し肉。飲み物は普通の水。特に話題が無くて黙々と食べる中、ルドウガはエレンに話し掛ける。

「エレン、君は一体何処から来たのかい？」

「うーんと…… 幻想郷……？」

「幻想郷……？それは何処にあるのかい？」

「分かんない」

「幻想郷は地球に在るの？」

「うん、在るよ」

「聞いたこと無いなあ……。そんな場所」

ルドウガは溜め息を思わずついた。

聞いても結局何の手掛かりにもならなかった。

ログハウスを出て一時間歩くと、目的地のタゴン村に辿り着く。

その村にはブゾワヰジロンと言う伯爵が住んでおり、彼が所有している城には地球と別世界【オートルモンド】を繋ぐ”移動の門”があり、その”門”を使って別世界【オートルモンド】に行くのだ。

どうやら別世界【オートルモンド】に行くのはエレン達だけではなく、目の前には老

人と少女が手を繋いで歩き、少女の傍らには黒いラブラドルが大人しく着いていた。ルドウガはその姿を見ると声を掛けた。

「シエムナシャオヴィロダントラシヴュ先生」

その声に反応したおじいさんと少女は、止まりこちらを振り向いた。

老人の方はかなりインパクトが強く、町で見掛ければ誰もが振り返る容貌だった。もじやもじやした白い髪と髭はミミズクを連想させ、髪の毛のせいで金色の瞳が半分隠れていた。服装も個性的で脇にスリッパが入ったブルーのチュニツクドレスには、銀色のドラゴンが散りばめられている。ドラゴンと同じ色の銀色の靴はかなり先が反り返っていた。

少女は老人と違ってインパクトは強くないが、整った顔立ちや神秘的な雰囲気人が魅了させる。キリツとした顎の線は意思を強く感じさせ、鼻まで真っ直ぐに伸びた額は賢い印象を持たせる。三つ編みにされた美しい金色の髪の毛の中には、歳に相応しくない白髪が混じっていた。宝石のように煌めくマリンブルーの瞳は、何か嫌な事があったのか、暗くぼんやりとしている。老人とは違って黒と白のシャツや青のジーパン等といった無難な服装だった。

「ルドウガではないか」

エレン達を認識した老人は、ルドウガに親しげに話し掛けた。

「はい、おはようございます。シエムナシャオヴィロダントラシヴユ先生。しかしこの前の電話の件は本当にすいません」

ルドウガはおじいさんに挨拶を済ませるといきなり謝罪をする。その様子にエレンと少女は驚いていたのだが、驚いているエレン達の事を気にも止めず、老人はエレンを見ながら愚痴を溢す。

「全く……あんな時間に電話をかけるほどの内容でもなかるうに。ではそちらの少女が件の子か？」

「はい、そうです」

ルドウガはお辞儀しながら答えた。

エレンは黙って聞いていたのだが、少女の方は気になってしょうがないようで質問を
して会話の中に入っていく。

「ねえ、シエム先生。この人達はどちら様？」

少女の指摘に老人は慌てて紹介をする。

「ああ、ごめんごめん。この方達を紹介せんとな。こちらの男性はルドウガ・ドライオン
じゃ。わしと同じくランゴヴィ王国のトラヴィアの王宮に働く魔術師【ソルスリエ】
じゃ」

「どうぞ、お見知りおきを」

ルドウガはタラに向かってお辞儀をした。

「こちらの少女はお前さんと同じく、未登録の魔術師〔ソルスリエ〕じゃ」

老人はエレンを見ながら言った。

エレンは言われなくても空気を読んで始める。

「初めまして、私の名前はエレン・ふわふわ頭・オーレウスです。で、この子の名前はソクラテス。よろしくね」

エレンは喋りながらソクラテスを抱き上げ、自分とソクラテスをまとめて紹介をした。

少女も皆に見習って自己紹介を始める。

「初めまして、私の名前はタラティランネム・ダンカンよ。でもタラの方がいいわ。あの黒いラブブレードはマニトウーよ。よろしくね」

タラもまた自分とマニトウーとまとめて紹介をした。

「では、わしの事を知らんエレンの為にちゃんと自己紹介をしよう。わしの名はシエムナシャオヴィロダントラシヴュジャ。ランゴヴィ王国のトラヴィア王宮で高等魔術師として働いておる」

シエムは少し偉そうに自己紹介をした。

「さて、皆の自己紹介が済んだことじゃし。それではブゾワⅡジロン伯爵の城に向かう

とするか」

シエムとルドウガとマニトウーは前の方を歩き、エレンとタラは後ろの方を歩く。同世代エレンとタラは自然に会話が始まっていた。

「エレン、貴方は何処から来たの？」

「幻想郷からだよ。タ…タラは何処から来たの？」

「ここが私の出身地よ。幻想郷？聞いたことないわね。そこってどんな所？」

「山の中に在って自然豊かな所だよ」

「へえ、初めて知ったわ。そこって良い所？」

「うくん、自然は綺麗だけどちよつと危険かな」

「えっ!?!危険ってどういう事!?!」

ちようど、タラが質問したタイミングでブゾワージロン伯爵の城に着いた。

「ほら、お主たち着いたぞ」

城の入り口ではブゾワージロン伯爵が待っていた。

自然と会話が終わり話が続けられなくなる。

タラは後で絶対にこの話をしよう、と思いついて今は黙った。

「よくいらつしやいました。高等魔術師殿。もうお戻りになるのですか？」

「そうなんじゃ。タラとエレンとマニトウーとソクラテスを連れて行かないといけない

のじゃ。お前の息子はもう行ったのか？」

「はい、行きました！2時間程前に」

自慢気に答えた。

「それでは行くのか」

谷を見下ろすの高い塔の部屋に門があった。

その部屋には神話の場面が描かれていた5枚のタペストリーが架かっていた。タペストリーにはユニコーンと小人、石の塊に彫刻をほどこした巨人、尖った耳をもつ緑色の服を着た人間などが描かれていた。その上には王杖が置かれている。

「中央まで来てください」

伯爵の言葉を合図に中央まで集まった。

エレンはルドウガとタラはシエムと手を繋いだ。タラは怖がっているのかシエムはタラに微笑みをかけ安心させようとしたが、引きつった笑みを浮かべるだけであまり意味はなかった。一方エレンは怖がっていなかった。

伯爵が小さな生き物が描かれたタペストリーの下に来ると、持っていた王杖をその上に置いた。杖はタペストリーの絵のなかに吸い込まれていく。それを見た伯爵は別れを告げて出ていった。

王杖は輝き、他のタペストリーから光が発せられる。光は虹のようになった時、シエ

ムが大声で「トラヴィアの王宮へ」と叫び、一行の姿が消えたのであった。

第2話 トラヴィアの王宮

一行は先程と同じホールに居た。

エレンは少し怠さと吐き気を感じていた。そんな状態を無視して周りを見渡すと、目の前には異形の者が立っていた。背は二メートルくらいあり、オレンジ色の髪の毛がもじやもじやしていた。何よりも目が一つしかなく腕が4本もあった。

「新種の妖怪?」

「なっ?! 馬鹿な事を言うな!」

異形の番人に対してもエレンは容赦なく本音を呟き、失礼な発言に驚いたルドウガは叫び、エレンの頭を拳骨で少し小突いた。シエムも啞然してしまい口を開けばつなし状態になってしまっていた。怖がっていたタラはそれを見てクスクスと笑って少し緊張が和らいでいた。

「今まで地球から来た魔術師に怖がられたことはありませんが、出会い頭に妖怪扱いされたのは初めてです」

思わず一つ目の男性も呆気に取られた。

そんな中でも青と銀色の制服を着た番人達がエレン達を険しい視線で見張っている。

槍はいつでも怪しい者を刺せるように握っていた。

一つ目の男性は仕切り直す為、わざと咳払いしシエムに言葉を掛けた。

「高等魔術師様、再びお目にかかれるとは、なんとたる光栄！」

一つ目の男性は通行を許可する合図を出し、一行を通らせた。

その時“門”が開いたと告げるベルが鳴り、一つ目の男性は前より激しく動き回りだした。エレンとタラは彼の行動が気になってずっと一つ目の男性を見ていたが、一行はそのままホールから出ていった。

「治安係りじゃ、客が到着するたびにあんな感じに慌てふためく。今ではあれが普通の状態になってしまったがな。タラはカリブリス女史のところに行つて登録してもらおう。エレンはどうするんじや？ ルドウガ」

シエムは溜め息混じりにこれからの事を説明する。そしてエレンの事に関してルドウガに質問をした。

「そうですね。エレンの場合は両親が居ないので正式にランゴヴィ王国に保護して貰う事にします。私は特別な孤児制度の手続きをするので、シエムナシャオヴィロダントラシヴュ先生。エレンも一緒に、お客様としての登録して貰っても構いませんか？」

タラはこの話を聞いてかなり驚いた。

「分かった。エレンもお主の手続きが完了するまではわしの一時的な招待客にしよう」

「ありがとうございます。シエムナシヤオヴィロダントラシヴユ先生」

ルドウガはシエムに御礼を言うと、一行にお辞儀をしてから離れ別行動にする事になった。

エレンとタラはこれからの事を質問した。

「これから、何を登録するの？何で登録をするの？」

「王宮に入る為の身分証明書じゃ。それがないと誰も入れないからな。お前達はわしの一時的な招待客としてレベル6の証明書が貰える。出入りが出来ると言っても、自由に入れる場所と駄目な場所がある。登録してくれる場所にはカリブリス女史が居り、王宮の規則、礼儀作法、寝る場所、国王陛下への挨拶の仕方など彼女が説明してくれるのじゃ」

「国王陛下に挨拶？無理だよ」

エレンは弱音を吐いた。

「大丈夫じゃ。礼儀作法と言ってもそれほど、厳密なものではない。万が一、失礼な事をしたり言ったりしても地球から来たばかりだと言えば大丈夫じゃ」

シエムは話しても理解しづらい事が目に見えていたから、手っ取り早く王宮内を案内するのであった。

王宮内は誰もが動いていた。

タペストリーに魔術を掛けて掃除をする若い魔術師。ガチャガチャと音を立てながら動く鎧兜。王宮でさえも機嫌に応じて景色が変わった。

景色は太陽の光、牧場が映し出され、小鳥がさえさえずる光景は機嫌が良い状態だと感じ取れる。エレンはその光景に見惚れてボーと突っ立ち、タラはよく見ようとして身を屈めていた。

廊下の端まで移動した時には、エレンとタラの周りを魔術師にキスを投げかける嬉しそうな娘達が現れると共に、馬とユニコーンと小動物も現れダンスをするかのように陽気に飛び跳ねていた。二人はその映像に挨拶を返してしまふ。

楽しげな雰囲気は突然消えて無くなる。理由はタラが叫び声を上げたからだ。

逃げようとしたタラは、シエムの腕から逃れて後ろに飛び退いた。タラと同様危険な状況だと気が付いたエレンは、ソクラテスを抱き上げて空中に飛び上がった。足元には目が眩みそうな深い穴がいつの間にか空いており、その底から夥しい数の足と爪と口をもつ一匹の巨大な昆虫がエレンとタラを興味深そうに見上げていた。

昆虫が物凄い速さでその穴をよじ登って来た。

タラは逃げられなくて悲鳴を上げそうになった時、シエムは毒液で光る昆虫の爪を対して気にもとめない様子で、タラを掴み説明しながら叫んだ。

「王宮はご機嫌じゃー！心配ない。新しく来た者は皆同じように驚く。けど、何も怖がることはない。幻覚にすぎなのだから。何と、：！? エレンも飛んでないで降りてきなさいー！」

エレンの飛んでいる姿を見たシエムは、口を大きく口を開け固まってしまった。

だが、数秒間経った後、我にかえったシエムは叫んで降りるように命令をした。ただ、エレンはその命令を無視し、穴を越えるまでは降りてこなかった。

穴を越えるとエレンはシエム達の前に降りる。

シエムはエレンが降りた途端、詰め寄り胸ぐらを掴んだ。

「エレン！お主……その力……！一体何処で手に入れた!!」

余りに怒鳴り声で周りの宮廷人が、一斉にシエム達の方に振り向いた。

エレンはその迫力に吞まれて喋れなかった。急に落とされたソクラテスはシャーとシエムに向かって威嚇している。タラは二人の間に急いで入ってシエムに向かって怒鳴った。

「シエム先生！何でそんなに怒っているのかですか!?!そこまでする事何ですか!?!飛び上がる程度、他の魔術師だって出来ますよね!?!そのどこが可笑しいのよ!だからエレンを離して下さい!!」

タラの剣幕に驚いたシエムはエレンを離した。

エレンは咳き込み、ソクラテスはエレンに近寄り心配そうに鳴いた。シエムはタラに諭すように言う。

「良いか、タラ。確かに空中浮遊の魔術は有るとは言え、そんな直ぐに発動しないのじゃ。さあ、エレン。その力どこで手に入れた？」

タラと話終わったシエムはエレンの方を向き、真剣な眼差しをしながら話し掛けた。

しかし、エレンは先程のシエムの剣幕によつて頭がテンパってしまった。

「何で?!何で?!何でそこまで怒るの?!こ、こんなの当たり前だよ!」

「当たり前前じゃと?そんな事を出来る者は中々居ないのじゃ!では聞き方を変えよう。

誰から教わった?」

「自分で練習して、出来るようになったんだよ」

シエムははつと息を呑むに対して、怒りが収まらないエレンはシエムを無言で睨み続けた。このままだと切りがないと思つたシエムは一時諦める事にする。

「まあ、良い。後で話を聞くからな」

「……………別に大したことないのに」

エレンは胸ぐらを掴まれた事によつて、シエムの事が嫌いになった。

とは言え、高等魔術評議会で魔術師を管理している世界にとつては未登録の魔術師【ソルスリエ】が勝手に力をつけていることはかなりの大問題である。それこそ別世界

「オートルモンド」の存続の危機である。実際に、勝手に力をつけている集団は今や別世界「オートルモンド」や地球の存在を脅かす危険な存在になっている。

だからシエムの対応はある意味正しいのである。

険悪な雰囲気につつまれ、オロオロするタラ。不機嫌な様子でポケットからブラシを出して少し逆立った髪を治すエレン。前の方でぶつぶつ言うシエム。気まずい雰囲気の中歩き続けた。

今度は、壁の中に入る人達を見た。入る時は腕を前に振っていた。魔術師「ソルスリエ」が連れているファミリエも上手く通り抜けていた。何らかのコツがあるみたいだ。只、慣れない二人にとってはぶつかるようにしか見えなくてひやひやした。

この後色々な事が起きた。

タラが石鹼水をかけられたり、若い魔術師の乾かす魔術の賭け方にシエムが文句を言ったり、海と珊瑚の景色の中に巨大な鮫が現れて驚いたりした。

エレン達は歩いてる内に、攻撃的なポーズをとっている戦士の彫像の前に着いた。シエムは戦士の脇腹を素早く引つ張った。

すると彫像は動き出した。彫像は自ら自分で掃除を始め二匹の蜘蛛を追い払い、自分の上に積もっている埃を払った。大理石が大きく軋む音と共に、他の彫像も同じように動き出す。彫像達は、目の前に誰が居ようがお構い無しなので、タラは動き回る巨大な

身体を避けるのに必死だった。

その時近くで大きな物音がした。

急に行き交っていた人々が膝まずいた。エレンとタラは急な変化に驚いた。タラは特に酷く、恐怖のあまり顔色が蒼白しシエムに叫びながら問い詰める。

「何が合ったの!?!何が合ったの!?!」

強いしゃっくりに身体を揺すりながら答えた。

「別に何も、ハック、あいつがお前達の前を通ったら、ヒック、他の者と同じようにすれ
ばいいのじゃ」

王宮中に惹き付ける様な騒ぎを起こした張本人が、やって来ると人々は恭しくお辞儀をした。

その人は人ではなく頭はライオン、胴体は山羊、尻尾は蛇と言う、妖怪顔負けの妖怪のような生き物だった。恭しくお辞儀される程の高貴な生き物なようで、身に付けている物全て高級品だった。黄色い羽で飾られた縁なしの帽子、超金細工が施された銀のブローチの付いた、見るからに高級そうな生地の青いローブを纏っていた。

その生き物は、シエムに対してものものしく挨拶をしたが、シエムは簡単にお辞儀を返しただけだった。

再び歩き出すとエレンとタラは質問した。

「一体、何？」

「キマイラ。国王と王妃の第一顧問で名前はサタラールと言う。とてもずる賢い年老いたペテン師だ。明日、あいつに質問されたら、答えに気をつける事じゃ。人々を上手く喋らせて色々な事を聞き出すのじゃ……まあ、エレンに関しては何も答えて欲しい」

エレンは横にプイツと向き、タラはキマイラが遠ざかるのを確認していた為何も答えなかった。シエムはタラを捕まえ無理やり着いて来させた。

その後は無事に目的地に着く事が出来た。

どうやら、目的地は普通の場合らしく、エレン達は普通のドアから部屋に入った。部屋の片隅には堂々としたコンピューターが置かれ、資料で埋った巨大な事務机が部屋の半分を占領し、座り心地の悪そうな三脚の椅子が社長用の肘掛け椅子の正面に置かれていた。

タラとエレンに椅子に座るように合図すると、シエムも椅子に腰かけた。するとシエムはしゃっくりしながら叫んだ。

「カリブリスさん、ヒック、わしらは悪いことをした使用人ではない！ホック、御願いだから肘掛け椅子を貸してくれんかね」

空っぽの部屋から声が聞こえてきた。

「あらら、ごめん遊ばせ！トレーニングしていたものだから。椅子の座り心地が悪ければ悪い程、罪深い魂が悪くなるですってよ。でも貴方がたは勿論そうじゃないわよね」

「トランスフォルミス【変身させる】のおまじないによって、椅子よ変われ！お客様が寛げるように！」

別の声が聞こえた途端に、エレンのお尻の下で何か動き、髪がパチツと音が鳴ると共に、居心地悪い椅子が柔らかい肘掛け椅子へと変わった。

椅子が変わると同時にカリブリス女史が姿を現す。

エレンとタラは息を呑んだ。身体は一つ、足と腕は二本。ところが頭が二つあるのだ！エレンは思わず、新種の妖怪、と言いそうになるが、先を読めたシエムは睨んで止める。二つの頭はタラをまじまじと見ようとして身を屈めた。

「ええと、貴女はたしか……」

「……………あの有名なタラティランネム・ダンカンですよ」

「まあまあ、よくいらつしやいました」

「お会い出来て嬉しいわ」

「私達はカリブリス女史よ。私はダナ・カリブリス」

「そして私はクララ・カリブリス」

「一つめの頭がダナ。二つめの頭がクララと自己紹介をした。

「そちらの貴女」

「…… 名前は何て言うのかしら？」

「2つの頭はエレンの方を見て質問をした。」

「エレン・ふわふわ頭・オーレウスです」

「エレンは普通に応えた。」

「まあ…… かの有名なオーレウス？」

「…… でも、あれはおとぎ話」

「エレンよりもタラの方に興味があり、すぐに話題はタラの話題に戻る。」

「……まで……」

「…… 上手くいらっしやれた？」

「あ、はい、カリブリスさん」

「カリブリス女史はタラの方を見て親しげに声をかける。」

「イザベラがきちんと……」

「…… 育てたのね。良く分かるわ」

「シエム、教えてちょうだい。一体……」

「…… 何が起きたの？ 私達が聞いたのは……」

「シエム？シエム？」

二つの頭は、話を中断して不安げな色に変わりつつある魔術師の方を同時に見た。シエムは前よりも激しくしゃつくりをしていた。それを見たカリブリス女史は慌てて、タラとエレンとマニトウーとソクラテスを避難させた。

更に大きなしゃつくりをした瞬間、魔術師が膨れ始めた。エレンとタラの怯えた目の前で、シエムはどんどん大きくなつていった。身体と腕と足が段々と伸び、顔が変わり、不気味な牙が生えてきた。青と銀色の鱗が全身を覆ったかと思うと、背中には鋭いギザギザのときかが現れ、ローブを引き裂いた。指にはサーベルのような長い爪が生え、巨大な翼が音を発てて羽ばたいている。その度に書類が辺り一面に飛び散った。

シエムが居たところにドラコンが立っていた。

タラとマニトウーとソクラテスは恐怖のあまり悲鳴を上げ、エレンは呑気にドラゴンだ、と眩き観察する。

頭を上げた途端に天井にぶつかったドラゴン。

その衝撃で石が幾つか落ちてきて物凄い音を発てる。

「タラ？エレン？カリブリス女史？何処に居るんだ？」

ドラゴンの声の大きさに壁が震えた。

タラは泣き出しそうになった。

そしてタラとマニトウーとソクラテスは、急いで机の下の更に奥まで潜り込もうとする。エレンは逆に近付こうとした時、カリブリス女史は机の下から出てきて、勇敢にもドラゴンに立ち向かった。

「あらまあ……」

「……………何てお行儀が悪いのでしょうか！」

「どうにかして頂戴……………」

「……………今すぐよ！」

それを聞いたドラゴンはシュンとして抗議した。

「申し訳ない。でもしやつくりをするとこうなるのじゃ！」

「そんな事は知っているわ！」

「オワゾー・ド・ニユイ博士が貴方を治療したんじゃないの？」

「……………思い違いじゃなければね」

ドラゴンは俯いて答えた。

「あの薬……とてつもなく不味いんだ！」

「まさか、薬を飲んでないわけ……………」

「……………ないでしょうね？」

「分かった、分かった、薬飲むよ！ちよつと退いて。元に戻るから。アラカサム【姿を変

える」のおまじないによってドラゴンの身体は、いつまでも人間の体に戻るのだ！」

あつという間にドラゴンの身体は縮まり、牙や爪や翼や鱗が消え青いローブを纏った年老いた魔術師が現れた。

姿がきちんと戻った事を確認したカリブリス女史は再び話始める。

「だから私達は……………」

「…………… 地球で何が起きたのかちやんと……………」

「…………… 分かっているよのね」

シエムは呪文を唱えて、自分が押し潰した三つの肘掛け椅子は形を取り戻す。シエムはそこに腰かけ、呑気にタラ達の居る方を見る。エレンは始めから外に出ていたが、逆にタラは慎重になって机の下から出てこなかった。

シエムはカリブリス女史を無視して、とても優しくタラに語りかけた。

「ここにおいで、タラ。とって食ったりしないから」

タラは震える声で叫んだ。

「でも、信じられないわ!! 貴方はドラゴンに変身したってわけね!」

「いや、してない」

「してない。ですって!!」

「わしは人間に変身したんじゃない。元々わしはドラゴンだからな!」

タラは机の下にずっと居ることにした。

そして皮肉を言わずにはいられなかった。

「まったくよね。貴方はドラゴンで人間に変身するのよね。そして勿論、皆その事を知っているわけね」

「お前はわしの言うことを信じとらんのだな。それじゃあ見せてやろうか!!」

「「やめてえ!!!」」

三つの叫び声が部屋中に響き渡った。

タラとカリブリスの二つの頭は一緒に悲鳴を上げる。タラが急いで取り繕う。

「貴方がドラゴンだと言うなら、貴方は確かにドラゴンよ! 私にとっては何も問題ないわ」

「では机の下から出てきて、ここに座りなさい。マニトウーを落ち着かせなさい。わしは、子供も犬に変身した老いぼれ魔術師も食ったりせんから。エレンもソクラテスを机の下から出しなさい」

エレンは机の下に行き、嫌がるソクラテスを無理やり抱っこした。ソクラテスはシエムを見る度にシャーと威嚇した。マニトウーもタラに着いてシエムに傍に行くのを拒否して、必要となればいつでも飛びかかれる体勢で肘掛け椅子に乗った。

シエムはそれらを見て溜め息つきながら説明を始めた。

「わしは数百年前から高等魔術評議會を率いている。代々、魔術師〔ソルスリエ〕達を訓練し、魔術を完全にマスターさせてやるのじゃ。お前達の才能はお前達のものだ。人間は魅惑的だ。そしてわしらドラゴンは、長い間生きています。わしらの最悪の敵は何か知っておるか？」

「?」

エレンとタラは首を傾げる。

一応、二人とも、本で読んだ程度の知識はある。けども、エレンに至っては名前しか覚えていないし、タラは創作を想定した本の知識では当てにならないと分かっていたので黙っていた。

シエムは暗い眼差しを向けながら言った。

「狂気じゃ。わしらは狂人になる危険に脅かされている。わしらの中の何人かは気が触れ、大災害の様に他の種族に襲いかかり、そいつらが行く先々で大損害を与えるのじゃ。そうした気の狂った何匹かのドラゴンが人間を文字通り殺戮した。」

想像出来てしまったエレンとタラは息を呑み、吐き気を感じる程気分が悪くなった。

二人があからさまに気分が悪くなっている事を感じながらも、シエムは話を続ける。

「この手の問題が起こらぬようにする為には、狂気に堕ちられないように、出来るだけ気をつける事じゃ」

「でも、そう出来なかつたら?」

エレンとタラは段々と話に引き込まれていく。

答えは容赦ないものだった。

「そうすると、我々は死んでしまう」

「でも、そんな事は……」

「……ここでは有り得ないわ!」

ダナとクララが書類を拾い上げながら苦々しく反論をする。

不穩にもカリブリス女子の言葉に頷く事はなく、逃げるように話を変えタラとエレンに質問をした。

「お前達は、最初に自分の能力を使ったのは何歳の時じゃ?」

「九歳よ」

「ええと、……確か十歳……かな」

エレンは自信なさげに答えた。

シエムは驚いたようだったが、その事については何も言わなかった。

「やれやれ。まあいい。カリブリス女史、後で詳しく話すから、先に登録するのじゃ」

「分かりました……」

「……では登録します……」

「先に……」

「…… エレンの方から……」

「しましうか……」

エレンの情報がコンピューターに記録された。

そのコンピューターもこれもまた普通ではなかった。クララが「コンピューター！」と叫ぶと、コンピューターはの電源が独りでに入り「奥様、御用で？」と返事をし、二人を驚かせた。

ダナが言った。

「人間の女性魔術師の登録。姓はふわふわ頭・オーレウス、ふ、わ、ふ、わ、あ、た、ま、お、お、れ、う、す。名はエレン。年齢は12歳。区分はユニコーンの南棟。」

「記録いたしました。招待客ですか？有料ですか？」

今度はシエムが答えた。

「正式に保護するまでは高等魔術評議会からの無料の招待客じゃ。お金は持つてはいないが後で、一クレディミュ金貨を渡す」

「記録いたしました。ファミリエは？」

「白い猫。名前はソクラテス」

「身分証明書の種類は？」

「レベル六、青と黒と黄色のゾーンじゃ。緑と赤のゾーンは立ち入り禁止」
「登録完了」

コンピューターは、透明でピカピカした素材の長方形の形をしたカードを二枚出した。その後、タラもエレンと同じくカードを二枚貰った。

「貴女達の身分証明書よ。エレンは私に、タラはシエムに、手を出して」

カリブリス女史は命じると、エレンはカードを受け取る為素直に手を出す。タラも少し警戒しながらシエムに手を出した。

カリブリス女史とシエムはそれぞれ、エレンとタラの手首をぎゅつと掴んで呪文を唱えた。

「ファイキユス〔固定させる〕のおまじないによつて、この身分証明書が、全ての壁の為の通行証となるように！」

手首がヒリヒリと痛く違和感を感じて視線を向けると、なんと！その身分証明書は、皮膚に埋め込まれてしまったのだ！二人は急いでその部分を擦ってみたが、皮膚しか感じられなかった。それでも長方形のカードは完全に透けて見えた。更に驚いたことにカードには顔の写真が付いていた。身分証明書には白いユニコーンが浮かび上がり、その上には銀色に輝く三日月が描かれている。シエムはマニトウーの右足に、カリブリス女史はソクラテスの右足に同じことをした。

クララは微笑んだ。

「ほら、こうすれば、失くさないわ……………」

「…………… 王宮の全ての住民が身分証明書を持つているのよ。三日月とユニコーン付きのね。これはランゴヴィの紋章よ。ドアは通れても、これがなければ壁は開かないわ。カートの期限が切れていると……………」

「…………… 捕まってしまうのよ。壁が全部、塞がってね」

「赤と緑のゾーン以外は何処へでも好きに行けるわ……………」

「…………… その禁止ゾーンに行けるのは、王家と高等魔術師、王様の護衛隊長と王国の大蔵大臣だけよ。枕元に……………」

「…………… 王宮での生活の心得書が置いてあるわ。朝食、昼食、おやつ、夕食の時間、医務室、武器部屋、そして……………」

「大事な礼儀作法。カリバンが……………」

「…………… 貴女達を部屋に案内してくれるわ……………」

「カリバンは……………」

「…………… すぐ、ここに来るわ。では……………」

カリブリス女史が言い終わるか終わらないかの内に壁が開き、黒いボサボサ頭の男の子が現れたのであった。

第3話 カリバン・ダル・サラン

少年はここまで走って来たのだろうか、はあはあと息切れをし、元々ボサボサであった黒髪が更に酷くなっていた。少年の後ろに居る赤い狐も元気良く着いてきていた。彼の特徴である灰色の瞳は好奇心旺盛そうに大きく見開いて、散らかっている部屋を見詰めてからタラ達の方を見る。

「こんにちは！僕、カリバン！カルって呼んで良いよ！君達の名前は？」

タラはカルの元気のよさにちよつと圧倒されていた。

「初めまして。私はタラティランネムよ。でもタラの方がいいわ」

エレンは圧倒させれず快く挨拶をする。

「こんにちは！初めまして。エレン・ふわふわ頭・オーレウスです。よろしくね」

カルは一層につこりとした。

「うん、分かった。ところでカリブリス女史、何か御用で？」

「タラとエレンは、シエムナシャオヴィロダンドラシヴュ先生のお客様よ。ユニコーンの南棟に滞在する事になったから、タラとエレンをお部屋まで案内してくれない？」

「かしこまりました。僕も南棟にいるんだ。すぐ隣さ。行くよ。あれ、タラ、荷物無いの

「？」

タラは答えようとする前にながシエムが先に言う。

「荷物は後から届くんじゃ。タラ、エレン、行く前に水晶番号を覚えておきなさい。タラはわしの水晶番号、万が一の時の為じゃ。エレンはルドウガの水晶番号じゃ」

その言葉に従って、小さな紙がタラとエレンの手の中に降りてくる。そこには光る数字で番号が書かれていた。

「覚えておきなさい」

もう一度シエムは言った。

カルは吃驚していた。高等魔術師の番号を教える等と言う事は普通では有り得ない事だからだ。

「タラ、エレン。じゃあ、後でな。楽しむがいい」

「では後程、シエム先生…… カリブリス女史」

「失礼します」

タラとエレンは丁寧にお辞儀をした後、カルと一緒に部屋を出ていく。マニトウーは老魔術師を避けるように、ソクラテスは老魔術師に向かってシャーと威嚇しながらも着いてきた。

壁が閉じた瞬間カルは元気よく聞いてきた。

「高等魔術師のプライベートルな番号だつて。番号を覚えてくれるなんて初めて見たよ。ところできい」

「あの一つ余分な女史をどう思う?」

「カリブリス女史のこと? どうして頭が二つ有るのかしら?」

「新種の妖怪かと思つた」

カルはエレンの言葉が意味不明すぎて、理解が出来なくなりきよとんとする。しかし、理解が追い付くとカルは思わず笑つてしまった。

「アハハ、そんな風に言うの。エレン、君が初めてだよ。アハハ、あれはタトリスなんだ。タトリスは誰でも身体は一つだけど、頭は二つ有るんだ。でもその二つの頭の意見が違つたりすると大変だよ。上手く仕事が出来なかつたりしてね。ところで、君達は高等魔術師に招待されたんだつて? パパやママも?」

「いいえ、二人とも死んだわ」

「お父さんは病気で死んじゃつて、お母さんはずっと前にはぐれたの」

カルは廊下の真ん中で急に立ち止まつた。

ちようどそこにいた宮廷人をつまづきそうになり、三人を睨み付けた。

「ごめん。僕はうっかり口を滑らすことがあるんだ」

「いいのよ! だつて知らなかつたんだもの。イザベラお婆ちゃんが私を育ててくれたの

よ。でもお婆ちゃんは、私が魔術師「ソルスリエ」だって事を嫌がって内緒にしていたの。だから私は漸く最近になって、自分が魔術師「ソルスリエ」だって事を知ったのよ」「大丈夫だよ。カル、私は気にしてないよ。もうずっと前のことだもん」

エレンはカルに気を使ったものも、俯きながら少し暗いトーンで話した。その様子を見たカルは余計に気を使うことになった。

「本当にごめん。だからそんな顔をしないで、お詫びに困ったことがあつたら何でも言つて手伝うから」

カルの様子を見たエレンは急いで笑った。

これ以上心配させないように素早く笑顔を取り繕ったが、その行動が更にカルを追い詰める。

誰も喋らなくなりシーンとした雰囲気の中、気まづくなつたタラはカルに話し掛ける。

「：：えつと：： 実は私達：： 別世界【オートルモンド】の事を全然知らないの。何か教えてくれないかしら？」

その言葉を聞いた途端、カルの顔には少し微笑みが浮かんだ。それを見たタラとエレンは驚いた。

「それは素晴らしい！ ついに偉そうに知識をひけらかしたりしないやつに会えたぞ！ タ

ラ、エレン、僕達仲間になれそうだ！」

タラには願ってはない事だった。早速質問をする。

「ねえ、血の約束って何だか知っている？」

その言葉にカルは好奇心で満ちた眼差しで、タラをまじまじと見詰める。

「血の約束だって?! 戦士達の話かい？」

「ううん、そうじゃないけど、どうして？」

タラは狼狽して言った。

「血の約束って言うのは、二人の戦士が同じ敵と戦って傷を負った時にするもんだろ。その内の一人が死んだら、もう一人は二人の血を混ぜるんだ。そして復讐する事を誓うか。又は死んでいく戦士に頼まれたことを果たすと誓うんだ」

タラは考え込みながら言った。

「ああ、分かった。それで、その戦士の一人が自分の息子か娘が絶対に魔術師【ソルスリエ】に成らないようにしてくれて相手が頼んだとする。でもその相手が誓いを守らなかったらどうなるの？」

「血の約束をかわしたのに守らなかつたら、その戦士は死ぬのさ」

カルの言葉にタラは深い溜め息をついた。

タラは深い顔をして考え込んだいたが、急に立ち止まりパツと振り返った。エレンと

カルが驚いているのを横目にタラは駆け出した。

驚きながらもエレンとカルは追い掛けて叫んだ。

「どうしたの!?!」

「どうしたんだよ、一体?!」

タラは二つ目の廊下が交差するところで止まった。

「何でもないわ。ねえ、カル。ここで皆が着ているローブやチュニック、それに身に付けているものは何色?」

立ち止まったタラは真剣な表情で質問をする。

「特に決まってるないよ。メウス王国のジャファールでは赤、ヴィラン王国のブランディは緑、オモワでは女帝の色と言われている黄色と紫、そしてここランコヴィでは青。トラヴィアの宮廷が青と銀なんだ。でも、どうして?」

質問に答えたカルは、どうしてこんな質問をしたんだ?と不思議そうな顔をした。

タラは大きく息を吸い込むと呟く。

「そう、やっぱり思った通りだわ…!」

「どうしたの?」

エレンが心配そうにタラの顔を覗きこんだ。

「シエム先生に言い忘れた事があるの。ちよつとここで待つてくれない?」

タラはにこにこしながら言った。

エレンはすぐに頷き、カルは興味深げに目を細め、乗り気ではなかったが渋々承知した。

「うん、わかった」

「いいよ。ここで待っているよ」

タラは二人が了承した瞬間直ぐ様走り出した。

「どうしたんだろうね？」

「さあ？」

エレンとカルは不思議そうな顔をしながらも、言われた通りに待ったのであった。

五分くらい経つとタラは息を切らしながら戻ってきた。

「もう居なかったわ。ねえ、シエム先生がどこに居るかわかる？」

「そうだな、先生の執務室じゃないの？」

「そうなのね。シエム先生にも執務室があるんだ。ドラゴンだから洞窟にでもいるのかなと思っていたわ。ところでカル、この王宮に詳しいの？」

カルは思わせ振りに肩を下げて言った。

「何でも任せてくれよ！僕は2年前からサルドワン先生の初級魔術師なんだ。先生は魔

法数学と空間学の専門家さ。だから、僕が何処にいるかを何時でも知っておかなければならないと言つて、もう何千回も王宮の隅々まで見せてくれたんだ。立ち入り禁止ゾーン以外だったら、自分のポケットの中身よりも王宮のことをよく知っているくらいだよ！」

「分かつたわ、じゃあ道を教えてちょうだい。行きましよう」

カルはランゴヴィの紋章であるユニコーンと三日月によつて示されている通路をどうやつて突き止めるのかを教えながら歩く。

「通路が見つけれさえすれば、後は身分証明書を見せるだけでいい。そうすると、ユニコーンが通行を許可してくれよ。後、壁を使つて移動するよ」

先程初めて壁を通り抜けたエレンとタラはゾクゾクしていた。

エレンは髪が静電気で酷くなるし、タラも気持ち的に嫌なので二人揃つてカルの言葉を聞いて嫌そうに顔をしかめつ面をする。

「えつ、何で？」

「この場所ではドアは何処にでも有るわけではないんだ。それにドアよりも壁抜け通路の方がたくさん有るし、壁抜け通路の方が便利だし早いし」

エレンとタラは何も言えずに着いていったのであった。

カルの案内の元シエムの執務室の前に着く。

壁の窪みにはユニコーンの彫像と小さなドラゴンの彫像が置かれていた。タラはどうしていいのかわからないものも、とりあえず軽く壁を叩いてみた。すると置いてあったユニコーンと小さなドラゴンが動き出した。

「そこに居るのは誰だ!？」

「ほら見ろよ、女の子だぜ!そこのお嬢さん、何の用かね?」

小さなドラゴンは怒鳴りユニコーンは陽気に喋り始めた。

「ええと、タラ・ダンカンと言います。出来るだけ早くシエム先生にお会いしたいのですが…」

「仕方ないなあ、聞いてくるよ。後、お前。俺が良いって言うまで開けるなよ」

ドラゴンは不満そうに答えユニコーンに注意した。

「分かってるって」

ユニコーンは目を開けて軽く答えた。

そんな様子に見とれている内に小さなドラゴンが直ぐに戻ってきた。

「高等魔術師様は、直ぐにお前に会いたいそうだ。中に入ってよし」

小さなドラゴンは驚きながら言った。

「タラ、行きなよ。僕らはここで待っているから」

「行つてらっしゃい」

エレンとカルは優しく見送り、それを見たタラはありがとうと呟くと壁の中を進んで行ったのであった。

「しかし、一体何が合ったんだ？」

「さあ、分からないよ。戻ってきたら聞いてみたら？」

タラが居なくなつた後、暇潰しの為に自然と会話が始まつた。

「そうだな。そうすつか」

カルはニヤリと笑う。

「話変わるけど、エレンはどこから来たの？タラと同じ所？」

「ううん、違うよ。幻想郷から」

「幻想郷？それって何？」

カルは首を傾げた。そんな事をお構い無しにエレンは話を続ける。

「山の中に在る自然豊かな人里だよ」

「へえー、そうなんだ。それってどこに在るの？」

「分からない」

「えっ!?自分のもといた場所が分からないの」

カルはかなり驚いた。

「うん、だって生まれ育った場所じゃないし、流れ着いた場所だもん」

「流れ着いた場所……？じゃあエレン、君の出身地はどこ？」

「うーん、分からない」

カルはエレンの話を聞いて首を捻るが、小さい頃に引越して生まれ故郷を知らないだけだろと思つた。とは言え「流れ着いた」という表現には気になった。また、幻想郷の件についても山奥に在る人里でそこでもしか過ぎさなかつたから、他の場所の事を知らないだけだろうと勝手に考え、自己完結してしまつた。

お手上げになつたカルは話を変える。

「ふーん……じゃあ。あつちでは何して過ごしていたの？」

「幻想郷の事？だつたら、友達と鬼ごっことかして遊んで過ごしていたよ」

「友達ってどんな子がいたの？」

「霊夢は無邪気で明るくていつも一緒にいて楽しかつたなあ。幻想郷での初めての友達。雫は村の人達にいつも虐められていて泣いていただけ、誰よりも優しくて心配り出来る子だつたなあ。杏里は雫の妹で霊夢と同じく無邪気で明るい子だけどドジっ子でいつも転んだりして、放っておけない子だけど間違いだと思えば誰にだって反論出来る。強い子だつたなあ……」

エレンは楽しそうに語る。

「え……？村中の人達に虐められた!?それって笑いなから言う話じゃないよ！何で雫と
言う人は虐められていたの!？」

「えつと……確か……て、て、”程度”程度”なんちゃらのせい」

「……”程度”何だそれ？それって虐められる理由になるか？」

「分かんない」

「……うん……まあ……取り敢えず……皆良い人達になんだね……」

「うん！」

「こうして、エレンとカルが話している内にタラが戻ってきたのであった。

「待たせて悪かったわね。あれ……？カル……待っていただけなのに随分と疲れたそう
ね。何か合ったの？」

「……エレンが……」

「エレンが？」

「……何でもないよ……。ところでシエム先生と一体何を話していたのさ」

「……」

「エレンとの会話が物凄く気になっていたが、自分の話を聞かれないタラは黙り込
む。」

「ああ……君もそうなんだね……。君が答えたくないなら、その事はもう聞かないよ……。少なくとも今はね……」

カルはそう言うのと歩き出し、案内を再開したのであった。

目の前の壁が開けば心地好さそうな居間が現れた。

「さあ、着いたよ。お嬢さん方、ようこそいらしゃいましたー！」

大きな窓ガラスから入る日の光が部屋を照らしている。

部屋の中には小さな丸テーブルが数台置かれており、その回りには寛げるように肘掛けの椅子とソファアが置かれていた。更に暖炉が二つと飲み物の自動供給機も置いてあった。部屋の両隅には階段が取り付けられ、一方がユニコーンの共同寝室、もう一方はフェニックスの共同寝室に通じていた。

「ここが休憩室だ。ここでは話し合いをしたり、ミーティングをする。君達の部屋は隣だよ。こつちから行くからついてきて」

「あら、貴方は個室を持っているわけじゃないの？」

タラは驚いた。

「僕は初級魔術師は、アシスタントみたいなもんなんだ。だから、僕は下積みなんだ。もつと高いレベルの魔術師にならないと自分の部屋が持てない。レベルが上がれ

ば上がる程、部屋は大きくなる。シエム先生の部屋は特別大きいんだ。だって、寝ている間に元の姿に戻っちゃうから」

カルは暗い声で言った。

「ドラゴンの姿ね？」

「そうさ。大体、ドラゴンなんて全く厄介だよ。あんなに燃えやすい書類の山の中で寝てるんだよ。いつか、ドラゴンが大きな唸り声をあげたら、王宮中が火の海になるんじゃないか皆言っているよ。ほら、身分証明書を壁に差し出して、タラかエレンかどっちでも良いから、君達が招待客だつてことを示さなくちゃ。でないと、捕まっちゃうよ。僕は許可なく女の子の部屋に入るわけには行かないんだ」

タラはその言葉に従いカードをかざし、三人は部屋の中に入って行った。

部屋はそれほど広くはなかったが、部屋の中に備え付けられた家具はどれも特徴的であった。青いビロードの天蓋付きの大きめなベッド。明るい色の大理石でできたベッドサイトには小さなテーブルが置かれている。木全体がピンク色に木目が青緑色のタンス。カーペットは青い芝生でできており、あちらこちらに真っ白い小さな花が咲いている。部屋の残りの空間は大きなタンスで仕切られていた。壁面には緩やかな起伏の丘が遠くまで広がっていた。

「王宮は君達の事を気に入つたようだね。ここで見えるものはユニコーンの国マンタ

リールだよ。直ぐにユニコーンが出てくると思うよ」

カルが満足げに言った数秒後。若いユニコーンが、エレンとタラのベッドの周りを飛び跳ねた。

タラは触れないと分かっていたから、ユニコーンに触ろうとしなかったものも手がウズウズしていた。エレンは触ってしまい、感触が壁だった事が分かるとがっかりしてシユンとしてしまった。悲しみの音が静電気として髪がパチツと軽く鳴った。

「さあ、ユニコーンではベッドやダンスに自己紹介をしないとイケないんだ」

ユニコーンに見惚れているエレンとタラを現実に戻す為、カルは手を叩きながら話始めた。

「ベッドやダンスに自己紹介するの!?!」

エレンとタラは驚いた。

「そうさ、自分の物にするためさ。自己紹介するだけで君達の事が分かるようになるんだ。やり方は簡単だよ。ベット前に立って名前を言うだけで良いよ。ダンスも同様だよ。やってごらん」

「タラ・ダンカンです!」

「エレン・ふわふわ頭・オーレウスです!」

タラとエレンはベッド前に立ち叫んだ。

すると天蓋のカーテンが独りですうっと開いた。中にはふかふかの羽毛布団と綺麗なシーツが掛けられている。

カルは説明をする。

「天蓋のカーテンは独りでに閉まるんだ。だって、僕達のように若いと、眠っている間、能力をいつものようにコントロール出来るとは限らないからね。王宮中を飛び回ったりしないように、天蓋の中に閉じ込められているわけさ。もつと上級の魔術師達はカーテンのないベッドで寝ているよ。だけど、天蓋付きのベッドが気に入って、少しでも長く寝ていたいからって、自分の能力をコントロール出来ない振りをしている連中もたくさんいるけどね。さてと、挨拶も終わったから、もうベッドは君達の物さ。浴室を見に行こうか」

浴室は白いタイル張りでゆったりとしていて長風呂にも最適だった。そこでは穏やかな湖が静かな波の音を立て、その真ん中では美しい水の精オンディーヌが緑色の髪をとかしている。

浴室を見学している間に寝室から大きな物音が聞こえてきた。

寝室に戻ってみれば、届いたタラの荷物がベッドの側に置いてあった。

カルは手を擦り合わせた。

「それじゃあ、君達が僕の話聞いていたかどうか、試してみようかな。ダンスの所に

行つて名前を言うんだ」

エレンは先程と同じ様に前に立ち、タラはちよつと警戒して言った。

まるで目が付いているかのようにタンスが反応して、両開きのドアと三段の引き出しが独りで開いた。カルはその前に立ったかと思うと叫んだ。

「ランジャリユス【整頓する】のおまじないによつて、ここに来るのだ！服は全てしまわれる！」

カルが手を叩いて唱えれば、エレンのリユックサクからタラのトランクから服が竜巻のように吐き出され、タンスの中にきちんとしまわれていった。数秒後、タンスはいっぱいになり再び閉じた。

タラは感心して言う。

「わあ、凄いじゃない！何て言ったんだっけ？『ランジャリユス【整頓する】のおまじないによつて、ここに来るのだ！服は全てしまわれる！』だっけ？」

タラがカルと同じ言葉を言っただけで、タンスは再び開き、マルディーニ爆発が起きたような騒ぎになった。服が次々と凄い勢いで吐き出され、それと同時に女の子達が部屋の中に入ってきた。頭にタラとエレンの服を被り、目の前が見えない状況でやつてきた一団はかなざり声を上げた。

タラはおろおろして口ごもりながらも、その一団に駆け寄った。一番背が高くて、歳

上に見える茶色い髪の少女が顔色を真っ赤かにして怒っている。リーダー格の少女は、敵意に満ちた黒い瞳でタラをじろじろ見ながら嫌味を言う。

「大馬鹿としか言い様がないわ。自分の服をこんなに吹き飛ばしてどうすんのよ！カリブリス女史に言いつけてやるわ。どういう事になるか見物だわ！」

「ご、ごめんなさい。わざとやったわけじゃないのよ。本当にごめんなさい」

ただ見ているのも暇だったエレンは、タラが散乱とした服を片付けるのを手伝う。

「あ、エレン、手伝ってくれるの？ありがとう」

「別に良いよ。それにしても、たかが服を吹き飛ばして顔に被った程度なのにそこまで怒らなくてもいいと思わない？ちゃんと謝ったのに」

エレンはこの雰囲気の中爆弾発言をしてしまう。それもまだ当事者達がいる前で。

「はあ!?何よそれ！まるで私達が悪いって言い方ね！元はと言えば、あんたが服を吹き飛ばさなけやいって話でしょ！」

タラの事を指で指しながら言う。

「こつちが悪いと思ってるよ。けど、そこまで怒る事なの？」

「当たり前でしょ！」

「???」

少女が叫ぶとエレンは首を傾げる。

その反応を見て少女は余計に怒らせてしまった。

「もう！頭にきたわ！あんたらみたいなきびでお馬鹿達はこの部屋から出ていきなさい！今すぐによ!!」

「アンジェリカ、何言ってるんだ。タラとエレンがこの部屋から出ていくなんて、出来るわけないじゃないか？」

カルが背の高い少女の前に立ちはだかった。

「あんたこそ、ユニコーンの南棟で何してるのよ？ここに入ってくるのは禁止されてるんでしょ！」

「そんな事ないさ。カリブリス女史とシエムナシャオヴィロダントラシヴユ全体の両方に頼まれたんだぞ。タラとエレンをこの部屋に案内を、色々助けてやるようにって。お前こそ初級魔術師じゃないか。僕達みたいに共同寝室に居なきゃいけないだろう。出ていくのはおまえのほうさ！」

カルは反論をする。

アンジェリカの拳が怒りで強く握られていた。緊迫とした雰囲気包まれる中、どうやらアンジェリカは思い止まり捨て台詞を叫んだ。

「あんた達なんか庭の小人じゃない！必ず仕返ししてやるわ！3人のお馬鹿にはボロを着せて働かせればいいのよ。それにしても、ドラゴツシユ先生のところに行つて私が

どれだけ能無しと隣り合わせでいなきやならないか聞いてもらわなきや。そうしたら、先生はきつとこの部屋を私にくれるわ！」

悪意のこもった視線をタラとエレンにもう一度投げ掛けると、アンジェリカはお付きの一行と一緒に出ていった。

「ふう。あいつに殴られるかと思った！」

カルは溜め息をついた。

「私もよ。ところでエレン。助けてくれてありがとう。でも、いくらなんでもあの人達の前で言わなくても良いのに、喧嘩になったらエレン、危ないわよ」

タラは動揺しながらも、エレンの身を心配をして注意をする。

「大丈夫だよ！私の方が強いもん。魔法を使えば良いもん」

エレンは腰に手を当て胸を張って言う。

「エレン。心意気は良いけど、止めた方が良いわよ」

「タラの言うとおりの止めた方が良いよ。あいつは見ての通り。この女王様気取りする嫌なやつさ。しかもその上、魔術の力が備わったのが随分と遅いんだ。だから今年で十六歳なんだ。因みに話関係ないけどさ、タラの魔術で暴走した服を被っただけなのに、随分と怖がりすぎだなあ」

カルは全然動じておらず笑いながら言う。

「私だつてビックリしたわよ！でも、どういう事なの？どうして私の服がまた飛び出したの？きちんとしまわれてたのに！」

カルはタラを尊敬の眼差しでじつと見詰める。

「君は片付けの魔術をもう一回かけたんだよ。と言うより、まるでまた荷造りするようにもう一度命令しちやつた事さ。でも、どこにしまわれるのかをきちんとイメージしなかつたから、あつちこつちに飛んでいったのさ！」

「… つてことは… 私が呪文を口にしただけで、直ぐに魔術がかかると言うわけ？そんなの怖いわ！」

「えっ？魔法つて言葉を使えば、想像しやすくなってやり易くなるから、初心者向けの補助じゃないの？」

「何言つてんだよ！これは凄い事なんだよ！生まれつきの才能がそうさせるのさ。普通は、魔術をかけようとするのは、かなり骨がおれるんだ。上手くやるには、物凄く努力しなきゃならない。強い意志が必要なんだ。だから、エレン。君がやってみればいいよ。ほら、どうぞ」

エレンはカルを怒らせてしまう。

怒らせてしまった事に後悔しても謝る暇はなく、イライラしているカルに言われるがままに一步前に入る。エレンは取り敢えず出した物が元に戻るようと、いつも通りに

イメージを頭の中に描く。しかし……

「呪文何だっけ？」

エレンは呪文を忘れていた。

「ランジャリユス【整頓する】おまじないによって」

カルは呆れながらフオローする。

「……コホン。ランジャリユス【整頓する】おまじないによって、元に戻る！」

軽く咳払いをしてから腕を前に伸ばし、思い浮かんだイメージを固定しながら叫ぶ。

それでも散乱とした服はそのまま、髪の毛が静電気でパチパチとただけだった。

「あれ？」

何も変わらない様子にエレンは驚いた。

（いつもなら、直ぐに片付けられるのに…… やっぱり……）

普段エレンは魔法を使わないが、自分で作業するよりも魔法を使った方が良い時には仕方無く使う時がある。その時は今ののようにイメージを浮かべて手を少し動かす程度だ。あまり魔法を使わないが失敗する事はそうそうない。

「ほらね。難しいでしょ……って、あれ？」

カルがエレンを論していると、服がゆっくりと動き出し元に戻り始めた。十数秒ぐらいでエレンの服、タラの服全てがタンスの中に入っていた。

その様子をエレンはじっと見る。

(…呪文を使うと、変に意識をしちゃうから、やりづらい)

「イタツ!!」

エレンが考え込んでいると、バシツと背中から軽い衝撃が走る。

「凄いいじゃないか! エレン。初めてにしては上出来だよ!」

どうやら背中を叩いたのは興奮していたカルだった。

「へえ、凄いなあ。二人とも! この事は誰にも言わない方がよいよ。カワイコちゃん達」

「カ、カワイコちゃん?!」

エレンは顔を真っ赤にする。

「そんな風私を呼ぶしないで! それにしても私は魔術何か使えない。それも禁止されているのよ!」

タラは怒った。

「ああ、分かったぞ! 血の約束の話、あれは君の事だったんだね!」

カルに好奇心で目を輝かせながら言った。

「そうよ。私が魔術を使えば、おばあちゃんは死んでしまうのよ。貴方も私の前で魔術を使うときには、気を付けた方がよいわ」

タラはきまり悪そうに答えた。

カルは考え深げに唇を噛み締めた。

「でも、”血の約束”は絶対つてわけじゃないんだ。それを口にした人間や、その時の状況にもよるらしい。君は、おばあちゃんの前で魔術を使つて見せたことはある？」

「あるわ」

「で、おばあちゃんは、バツタリ倒れて死んでないよね？」

「ええ、そうよ」

「だから、きつと色々な条件があるんだよ。一緒に図書室に行こう。そういう事に詳しい本を見つけてあげるよ。ところで、タラはここにどれぐらいいるの？」

「十日ぐらいの予定よ」

「そうか、じゃあ、その間にきつと本も見つかるよ」

エレンが話についていけずにポカーンとしていると、銅鑼の音が聞こえた。

「やった！昼食の時間だ。早く行こう！」

カルはそう叫ぶとタラとエレンの手を掴んで、凄い勢いで駆け出して行くのであった。

第4話 オートルモンド【別世界】について

食堂に行くため何度も、壁の前に身分証明を見せて道を開けて進んだ。

その場所は大きなホールだった。

ホールには色んな人達がいた。どうやら魔術師以外の人達もいたがエレンにはどのような職種の人達なのかは判らなかつた。

カリブリス女史の掛け声が集合の合図だった。

エレンの肩に乗っていたソクラテスはホールの片隅に置いてある。動物用の食事場に向かつて走っていった。

カリブリス女史が「静粛に！」と言い、話始めた。

「皆さん、初級魔術師と新しい気象魔術師を紹介しますわ。ダンマリル先生は、初級魔術師としてロバン・マンジルを選びました。これでもう、あなた方はダンマリル先生にちよつとした用事を言い付けられずすみませぬ。そう言う面倒な仕事は今後、全てロバンが引き受けてくれるのですから。彼に感謝しましょう」

カリブリス女史の合図で、明るい色の髪と瞳をした端正な顔立ちをした大柄な少年が立ち上がった。ニコニコと笑顔だったが、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤に染まってい

た。また直ぐに座った。

「新しい気象魔術師の方を紹介します。シートを外に乾かそうとして雨が降ってきたらデリア女史に連絡してください」

「デリア女史と言われた若くて美しい女性が立ち上がり、優雅にお辞儀をしたが、カリブリス女史に冷たい目線を投げ掛けていた。

（何で怒っているの？）

「ファブリス！」

エレンが考え事をしている内にタラが喜びで声を上げた。その声でエレンはタラの方へと振り向いた。

するとそこには金髪に黒い瞳に長いまつ毛の美少年がいた。その少年はタラとカルの間に入り込んでタラと嬉しそうに会話をしていた。

「知り合いなのか？」

カルが聞いた。

「ああ！」

ファブリスは有頂天に答える。

「会えて最高だよ！父さんが僕を別世界【オートルモンド】に送り込んだ時、もう少しで君の能力について話しちやいそうになったよ。でも君がここにいるってことは、おばあ

ちゃんにほんとうの事を言っただね。そうだろ？」

「ええ、まあそんなところよ」

タラは何故か口ごもりながら言う。

「：：えつと、エレン・ふわふわ頭・オーレウスです。よろしくね！」

エレンは口調がたどたどしく喋り顔を真っ赤にしながらも、握手するために手を差し出し自己紹介をした。

「うん、僕の名前はファブリス・ド・ブゾワ||ジロンだ。よろしく」

ファブリスはそう言うときにこやかに笑い、エレンの手を握り握手をした。握手をしたエレンは更に真っ赤になっていた。

そんな中、カルはタラとファブリスの再開やエレンの慌てぶりなどをお構い無しに動きまわっていた。

「タラ、エレン、早くした方がいいよ。お腹がすいた！」

カルの言葉を合図に席に座る。右からカル、ファブリス、タラ、エレンの順になった。

四人が席に座ってもカリブリス女史の話は続いていた。その間カルはずつとぶつぶつと文句を言う。

そんな時だった。

まるでそれが聞こえたかのように、カリブリス女史は二つの頭を下げ、昼食の時間が

来たことを告げた。

若い給仕の一団がやってきた。運んできたものはローストビーフやグリルチキン、スパイスの効いたスープやバターがたっぷりかかった野菜、巨大なチーズ、ケーキやキャンデーとチョコレートなどが並べられてあった。

それはとても豪華な食事であった。旅の最中は勿論の事、幻想郷に住んでいた時でも御目にかかれぬ物だった。

「それでは、召し上がれ！」

エレンが感慨ぶっていると、カリブリス女史が微笑みながら言った。

そしてカリブリス女史が呪文を唱えると、部厚く切られたローストビーフがお皿に取り分けられ、ナイフやフォークが独りでにそれらを薄く切り始めた。

エレンは無理やり口に入れるナイフやフォークを捕まえ自分で食べた。その際に髪の毛がバチツとしたが、赤ん坊でもないのに無理やり口に入れて食べさせる方が、嫌だったので我慢した。

タラも同様にナイフとフォークを無理やり捕まえ自力で食べていた。

ファブリスは逆にそのままにしていた。その姿は日本のことわざにある郷に入っては郷に従えだった。まあ、ただ単に面白がっていただけであつたが。

カルの場合は自分のお皿に肉を三切れも積み上げ、物凄い速さで食べるようにして食べ

ている。彼のお皿は野菜以外の料理で今にも溢れそうだった。その食べっぷりは、まるで何日も前から口にしていないかの様だった。

「どうやってここに来たの?」

食事が一段落終わり、タラはファブリスに質問をする。

ファブリスは喜んで話し出した。王宮に来たときのびっくり体験をひとしきり話した後、一緒に私語とをするシャンフラン先生に早く合いたいと言った。

次はカルの番だった。全員が魔術師である家の五人兄弟の末っ子で、両親と同じようにサルドワン先生につくことになっていたが、あまり気乗りしないようだ。

カルは嘆く。

「よく分かんないよ。だって、僕のママは公認された最高の女泥棒なんだぜ。僕は高等魔術師の為に仕事をする必要なんかないはずだ。既にとつても優秀な泥棒なんだから!」

「泥棒?!」

エレンは驚いた。

「そう、泥棒だよ。僕はもう少ししたてば、立派な泥棒になるんだ」

カルはあっさりと言う。

「おい!泥棒、だって!?!別世界【オートルモンド】ではおおっぴらに言える職業なのかい

？僕達の地球では、物を盗む奴は、牢屋に入れられるんだ！」

「そうよ！それはやつてはいけない事だわ！」

ファブリスは驚きながら反論する。タラも又、感情的に反論した。

カルはその様子を不思議そうに見ていた。すると少しの間黙っていたが、気がつきカ
ルは叫んだ。

「ああ！その手の泥棒はそうさ！でも僕達は違うんだ！僕達は泥棒一家だ。つまり、ラ
ンコヴィ政府の為に仕事をするのさ」

エレン、タラ、ファブリスはすっかり訳がわからなくなつた。

「そもそも、ランコヴィ政府は泥棒を使って何がしたいの？」

「どんな泥棒でもいい訳じゃないんだ！やつていいのは政府公認の”札付きの泥棒”な
んだ！札付きの泥棒は幾つかの決められた仕事しかない。例えばね、ある魔術師がと
ても危険な呪文を考え出したとする。そしてどこかの王国や帝国が、その呪文を他の国
を征服するためにその呪文を利用しようとしたとする」

「それで？」

三人は声をそろえる。

「すると、ランコヴィ政府は、その呪文を盗むように頼むつてわけさ。札付きの泥棒はそ
の呪文を盗んで他の国々に配るんだ。そうすれば皆が同じ呪文を持って、バランスが保

たれるわけさー！」

三人は納得したが、まだ疑問は残っている。そこでファブリスが先に質問をする。

「でも、どうして君もまた泥棒になるって言うの？」

「僕も訓練が終わりさえすれば、その一人になれることって事だよ」

「ねえねえ、訓練って何？見せて！」

「どんな訓練なの？」

エレンはカルの方に体を前のめりし、目をキラキラさせながら言う。タラはエレンの様な行動をしなかったが興味深そうに言う。

「どんなのを見たい？」

カルはエレンとタラの様子を見て少し自慢げに言う。

「差し支えなかったら見せて頂きたいなあ。見たいなあー！」

逆にファブリスは、ちよつと疑っているような口調で言った。

カルは首をすくめた。

「差し支えなんか全くないよ。じゃあ、試しに君達が盗まれる役だよ！」

その瞬間、部屋の隅で静に食事をしていたカル、ブロンダンが騒ぎだし、テーブルの上に飛び乗った。女達は叫び、男達は悪態をついた。

エレンとタラが騒ぎを見ているなか、ファブリスは先にカルの方を振り向いて言っ

た。

「よし、始めていいよ」

「もう終わったよ」

落ち着いた声でカルが言う。

その言葉にエレンとタラは急いで振り向き、盗まれる事に気が付くとすでに驚いているファブリスの様になった。そんな彼等の目の前にカルは次々と戦利品を出して見せた。

ブゾワ||ジロン喉イニシャルの刺繍入りハンカチ三枚、するために噛み終わったチューインガム数枚、ピンクのゴム紐、金色のバレッタ、九枚のカード、手鏡、折り畳みのくし、ちび鉛筆一本、そして銀貨が二枚と栗色のちいさな手帳。

「バレッタとピンクのゴム紐と手鏡と折り畳みのくしは、ファブリス、君のじゃあないよな？」

カルはニヤニヤ笑いながら皮肉っぽく言った。

「何だつて！そんなもん持つてないよ！」

ファブリスは恥ずかしさのあまりに顔を赤くして叫んだ。

「私の物が… 全て無くなっている！」

「私もよ！信じられない！何にも感じなかったわ！」

エレンとタラはポケットの中を探りながら言う。

「僕もさー！」

カルは彼等の様子を見ながら、得意気に長くてしなやかな指を動かした。

「これは、小さい時に教わった方法なんだ。何が注意を逸らさせるものを用意しておく。さつきはブロンダンを使ったんだけどね。でも勿論全く別のでもいいんだ。そして自分が必要な物をちようだいする。簡単さ！」

エレンとタラとファブリスは、カルの方を腕前にすっかり感心して、昼食の間じゅうずっと、カルを質問攻めをした。どんな生活を送っているのか、もつと知りたくなったのだ。

カルの自慢のエピソードは、信用できる話と誇張した嘘臭い話で半々だった。

カルから盗まれた物を返してもらい、四人はデザートのカーキとキャンデーをお腹いっぱい食べ、ホールを後にした。

これからの事をカルは説明を始めた。

「ここでは、張り切りすぎちゃいけないんだ。タラはシエム先生から夏休み中って言うていたし、エレンは先生決まっていなしね。だからのんびり過ごさなくちゃ！誰かが君達に会いたがったら、身分証明が教えてくれるよ！」

「身分証明が教えてくれるの（ですって）？」

エレンとタラは驚きのあまり目を大きく開いた。

「どの先生も、僕達には身分証明を使つて連絡してくれるんだ。僕達を呼ぶ時も、先生の元に行かなければならない時もね。身分証明が何も指示してこなかったら、その間僕達には必要ないつてことさ。僕の場合はその時間を出来るだけ、のんびり過ごす事にしてるんだ。まあ、訓練はするけどね。そうだ！王宮の庭園に行つてみない？ファブリス、午後は何か用事ある？」

「ないよ。シャンフラン先生の手伝いをするのは明日からだ」

ファブリスはにっこりして言う。

「良かった。じゃあ見に行こう。庭園は凄いでー！」

カルはウキウキしながら案内を始めたのであった。

暫く歩くと庭園に着いた。彼等は庭園を見て、カルの言つたとおり凄いい場所だつたと痛感する。それは植物でさえ、魔術によつてカラフルだつたからだ。

赤色の幹に青と黄色の葉っぱに覆われ、花の色は赤と黒の木が繁茂しており森の様になつてゐる。

更には動物でさえも魔術を使う。その事を知つたのはしつぽが二本ある赤い二十日鼠が体がオレンジに緑色の大きい耳の猫から逃げる時に魔術を使つて、数メートル先に

逃げたのを見たからであつたからだ。又、猫も鼠を追い掛ける時に魔術を使つて距離を一瞬にして縮めた。

カルはエレンとタラとファブリスを案内しながら話す。

「この世界、オートルモンドでは七つの季節が存在し、それぞれ、カイヨ、ボータン、トレボ、フェシユ、プリシユ、モワンシヨ、雨季のサルタンつて呼ばれている。で、一年で十四ヶ月あるんだ。天気は魔術によつて自由自在に変えることが出来るから、誰にも予想が出来ないし、可笑しい事が起きるんだ。日陰でも摂氏四十度になったり、夏なのに雪が三メートルも積もつたりすることがあるんだ。それとさつき、動物が魔術を使つたの見ただろ？ 外敵から逃げたり、獲物を追うためだけではなく他にも予測不能な天気に対応する時にも使うんだ。雪が降つたら、たつた一晩で毛を生やし、雪のように白色に変えることが出来る。因みに天気に対応する際に魔術を使うのは、動物だけではなく植物も使うんだ……」

カルはすっかりはしやいで、別世界の事を次々とエレンとタラとファブリスに夕食のドラが鳴るまで説明をしたのであつた。

夕食後、エレンとタラはカルとファブリスと別れて部屋に戻つた。

部屋に入ったエレン達が見たのものはアンジェリカが偉そうにふんぞり返つており、

その周りには他の少女達が集まっていた。

エレンとタラは自分の寝室に着くと、それぞれ寝る準備をした。

エレンはソクラテスをベッドの上に置き、タンスの中を調べた。そこにはお目当ての物、ネグリジエと新しいバスタオルが入っていたのであった。バスタオルはともかく、ネグリジエは長年旅をしていて持つていかなかったもので、凄く嬉しくなったのであった。

薄いピンク色のネグリジエと下着とバスタオルを持つて浴室に向かう。お風呂に入る前に歯を磨いたその後、服を脱ぎ、今日着た服をたたみ別の所にまとめて置いてから扉を開けた。

そこには、水の精オンディーヌが優雅に佇んでいた。

「……くんぼんは」

エレンは思わず挨拶をする。するとオンディーヌはニコツと笑顔で返した。それを見届けた後、体と髪の毛を丁寧に洗う。

体を洗い終わりとエレンは湯船にゆつくりと浸かった。

「くうくう、いい気持ち。生き返るく。あゝ、極楽。極楽」

顔を赤くして緩んだ表情で親父っぽい事を言う。これは幻想郷では老若男女問わず誰もが言う言葉で、エレンにもうつったのだ。

「お風呂好きっ！」

湯船にちゃぼんと少し音を立てて入り、オンディーヌはエレンの近くに座った。

「うん、好きだよ」

「そう、良かったわ。他の人達はシャワーを浴びて終わりなのよ」

「え？ そうなの？ 気持ちいいのに、勿体無いね」

「そうね」

エレンがお風呂を好きになったのは幻想郷の影響であった。エレンが旅で流れ着いて、暫くたったある日の事だった。

それは幻想郷に着いたばかりの頃、行くところのないエレンが町をさ迷っていると町に買い物に来ていた老夫婦が声をかけてきたのだ。エレンは戸惑ったが、その老夫婦はとても人柄が良く、その好意に甘えてお世話になることにしたのだ。

その日の夜

「ちよつと狭いけど、気持ちいいわよ」

お婆さんに案内された場所はお風呂場だった。お世辞にも広いと言えず、かなり狭い場所だった。そこには、湯の入った木の筒型の箱が設置され、体を洗うためのタオルと

白い固形石鹼が置かれていた。

二人は服を脱いで体を洗い終わった後、筒型の桶の中に入った。

湯はかなり熱かったが火傷はしない温度だった。だが、エレンが前に住んでいた所では湯船に入る習慣はあまりなく、更に慣れていない人と肌が密着していたので、恥ずかしさのあまり体感的に火傷する程熱く感じていたのだ。

そんな気を紛らわそうとエレンは話しかけた。

「… ねえ、さっきお風呂場からお爺さんの声聞こえたの。そのとき「くくく、生き返るの」。あゝ。極楽。極楽」って言っていたけど何で？」

「… ああ、あれね。とても気持ち良くて、この里では誰もが言う言葉なのじゃ」

「誰もが？」

「そうじゃよ、男の人なら今でも言っている人は多いし、女の人なら今は言つてなくてもかつては、言つておつたのじゃ」

「あれ？誰もが言う言葉じゃないの？」

「そうねえ。言い方が悪かったの。誰もが言つていた道つて言う方が正しいの。子供のときは必ず言つたもんじゃ。だけど、成長するとあんまり言わなくなつて、私や爺さんみたいな年寄りになると逆に言うようになるのじゃ。で、エレンちゃん。気持ち良いじゃろ？」

エレンは長旅で暫く間、お風呂に入るところかろくに体を洗うことも出来ずにいた。そんな久し振りに入ったお風呂は体をほぐし、疲れが抜けていくのが実感するほどであった。しかもエレンの為に薬草を使っていて、お湯は薄い緑色になっていた。

「うん！気持ち良いよ！」

エレンはそんな優しい心遣いに嬉しくて満面の笑みで応えた。

お婆さんもエレンの笑顔見て嬉しそうに笑った。

「なら、エレンちゃんもせっつかくだから、一緒に言ってみるかの」

「くくく、生き返る。あゝ、極楽。極楽」

湯船に浸かりながら昔の事を思い出した。結構長く考えていたのでのぼしかけた。

オンディーヌにお別れを言いお風呂を出た。

ネグリジエに着替え、髪をタオルで乾かしながら浴室を出た。

エレンはタラの所に向かう。

エレンがお風呂に入っている間タラは、革でできた分厚い本を読んでいた。その本には金色の文字で「王宮の礼儀作法、習慣及び風習、法律及び義務に関する書」と書かれていた。

パタパタと足音を発てながら近づく。

「あら、エレンじゃない。……っってお風呂入っていたんだ」

タラは側に近づいて来たエレンに気がつき、本から顔をあげて話しかけた。

「うん、そうだよ。お風呂気持ちいいよ！良かったら入った方がいいよ！」

エレンは髪をタオルで拭きながら笑顔で言う。

「……悪いわね。私、お風呂好きじゃないのよ」

タラはエレンの笑顔を見て少し気まずそうに言った。

「ふーん、そうなんだ。ところで何で本を読んでいるの？」

エレンはタラの言動よりも、タラの持っている本が話になってしょうがなかった。

「ああ、この本にはこれからここで暮らして行くの必要な事が書いてあるの。エレンも後で読んだ方が良いわ」

「……それって、私でも覚えられるかな？」

エレンは自信なきげに言う。

「大丈夫よ！この本不思議な事にね。すんなりと内容が頭の中に入ってくるのよ。でも、エレンって物凄く物忘れ激しいよね。どうして？後、それとずっと、聞き忘れていただけ……幻想郷って何が危険なの？」

不思議な出来事に興奮していたタラだが、話していく内にずっと聞きそびれた事を思い出し、真剣な表情で質問をした。

「あ、その事？ 幻想郷には人を食べる妖怪がいるからだよ。それと私が物忘れ激しいのは、他の皆よりかなり長生きしているからだよ。もう何歳かは忘れたけどね」

エレンは何でもないうように言う。

「え!? 人を食べる妖怪!? そんな危ない存在が地球にいるのよ!? そんな危ない存在からどうやって生き延びたの? 」と言うか妖怪って何? 聞いたことないわよ! それと! 長生きってどれくらいなの? どうやって長生きしているの? 」

エレンと対比するようにタラは狼狽した。

エレンは、考え事をするように頬つぺたに人差し指をあてながら言う。

「: : うーんとね。妖怪については分からないんだ。調べなかつたし、皆がそう呼んでいるから、私もそう呼んでいるだけ。だから何も知らない。身を守る方法は魔法だよ。長生きした方法も魔法だよ」

「じゃあ、何でランジャリユス【整頓する】のおまじないが直ぐには出来なかつたの? 長生きする魔法の方が難しいでしょ? 」

タラはエレンの話に疑い始めた。しかもその煮え切らない答えに苛ついてきたのだ。

「長生きする魔法の方が難しいに決まっているよ! : : 確かにあの魔法直ぐには出来な

かったよ。何か凄くやりずらかった。やっぱり、いつもは言葉はいらないし、それに言葉を使う時は戦うときで言うときとイメージしやすくして発動しやすいね。日常では絶対使わないよ。変に意識しちゃう。タラだっていつもやっている事のやり方を変えたら物凄くやりづらいよ」

エレンもタラの態度に苛つき、少しムツとした声で話す。

「へえー、そうなの? …… まあ、確かにそうよね。 …… 分かったわ! 例えるならまるで、いつも右手でペンを持って書いているのに、急に左手に変えたら文字は一応書けるけど、物凄くヘンテコな字になっちゃうみたいなことでしょう?」

タラは理解できたことが嬉しくて興奮ぎみに言う。

「そうなのよ。そんな感じ」

エレンはため息つきながら言う。

「じゃあ、これからやりづらいわね。ここで色んな魔法を学ぶと思うけど、どうする?」

「うーん、そうね。でも、これからも自分のやり方を通すよ」

「でも、またシエムに突っ込まれるわよ」

「…… シエム? 誰だっけ?」

「今日、私達を案内してくれたドラゴンのことよ」

「…… ああ、あのドラゴンことね。けど、私。悪いことをしているわけじゃないから、

「このままでいくよ」

「そうね。エレンの言う通りだわ。少しやり方が違うからって、怒るのは可笑しいわ。色んな人がいるんだから、色んなやり方があっていいはずよ」

ちようどその時、十時を告げるドラが鳴り響いた。

「あら、ドラが鳴ったみたい。もうお休みの時間よ」

「え、そうなの？じゃあお休みなさい」

「お休みなさい、エレン」

エレンはお休みの挨拶をすると、急いで自分のベッドに向かったのであった。

新たにこの世界にやって来た二人の少女が、そよ風に吹かれながら眠る。明日から新しい日常が訪れるのであった。

第5話 王との対談

鳥がチュンチュンと鳴く中、エレンはゆったりと起きた。

その部屋には、昨日の机と比べ物とまらない程の堂々した机があった。次の間もあり、その部屋には暖炉が設置され、ソファアと長椅子が置かれていた。更には、天井に眩いばかりのシャンデリアが下がっていた。

エレンの寝ていたベットも、普通サイズの二倍まで大きくなっていた。天蓋には豊かな彫刻が施されている。ソクラテスが眠るベットでさえも、見るからにふわふわで高級品だ。

家具どころか部屋の大きさも倍どころか、個人部屋になっていた。それでも寝ぼけているエレンは気が付かなかった。

部屋の外からエレン、エレンと呼ぶ声が聞こえる。

その声と呼ばれてエレンは、寝惚けながらも何とか身分証明書をかぎして開けた。開いた瞬間、なだれ込むようにタラとカルとファブリスが入ってきたのであった。

「もお、心配したんだからね！エレンー！」

「うう……ごめんなさい……。って、これって私謝らないといけないの？」

「そんな事よりもエレン！君って本当は凄いなだね！たった1日で、もう個室を貰えるなんて凄いじゃないか！」

「そんなに凄いことなの？」

「ああ、そうさ！部屋の説明した時に言っただけど、もう一回言うね。本来の今の僕達は下積みクラスで、もつと高いレベルにならないと自分の部屋が持てないんだ。それなのにエレン！もう君は自分の部屋を持ち、結構広かった！相当レベルが高いってことさ！入ってきて初日で部屋持ちなんて初めてだ！ランゴヴィ初級魔術師の歴史の中で初めてだ！どんな風に過ごしたらそんな風になるの？」

カルは食器を顔にくっ付ける程、ガツガツ食べながら興奮ぎみに言う。

あの後、エレンを見付けたタラ、カル、ファブリスはエレンを連れて食堂で朝食を摂っていた。

タラはまだ何か言いたそうだったが、手首に埋め込まれた身分証明書がブンブンと振動を始めたので何も言えなかった。

身分証からの用件が終わると、タラは顔を少ししかめ面をしながら皆に説明をする。嫌すぎたのかタラの口から、本人の意思とは関係なしに溜め息が勝手に溢れる。

「朝食が終わったら、”直ぐに部屋に上がって礼服に着替える”ですって！王様と王妃

様に会うためらしいわ。でも、そんな人達に会いに行きたくないわ！」

「えー！本当？私も行きたくないー！」

エレンは軽い感じで言っているが、本当に嫌な顔をしている。

「そりや凄いい！光荣だと思わなきゃ！」

カルはタラとエレンの嫌がる様子を見て、面白がって笑った。

「さあ、行くか。高等魔術師は、少しでも遅れると怖いぞ」

「じゃあ、僕はアントレヌール先生の所に行くね。さつき僕も呼ばれたんだ。またね」

エレンとタラとカルはファブリスと別れ、準備して行くのであった。

急いで部屋に戻ったのだが、どうすれば良いのか分からずにエレンは途方に暮れる。

何気なく部屋を見渡すと、いつの間にかベットの所にドレスが置いてあった。そのドレスは青と銀のチェックドレスで、脇にスリットが入った大人っぽいデザインのものであった。直感的にこのドレスに着替えれば良いと理解したエレンは赤いリボンを外し、鏡の前で身だしなみを整える。

着替え終えたエレンは、急いで部屋を出てタラとカルと合流し王座の間に向かうのであった。

正面広場に着くと、広い廊下で入り口までは滑らかなスロープが続いてそこから王座の間に行けるらしい。

暫く歩くと白と金色の部屋があり、その壁には丸天井まで銀色に塗られていた。壁面には幻想的な彫刻がぼどこさされていた。幻影の景色と玉虫色に光る旗が彫刻の美しさを更に引き出していた。

王座の間前でシエムは、筋骨逞しい男性と話し込んでいた。

そのすぐそばでは、大きな赤い目をした塊の生き物がいた。どうやら先生らしく、心配そうにずっと廊下をキョロキョロと見渡し、初級魔術師を待っていた。

更にその近くでは、長い白髪のエルフの先生とがっしりとした体格の少年が話していた。

辺りを見渡し終えると、意地悪な少女が先生らしき人と一緒に現れた。先生らしき人は吸血鬼で体格は長身で異常に痩せ細っていた。瞳は火が燃えているように赤く、闇のように黒い長い髪を後ろに撫で付けていた。

吸血鬼はタラの方に笑顔を向けたが、それは人を震え上がらせるような冷たい作り笑いだった。

人がある程度集まりだすと、カルはエレンとタラの方に身を屈め小声で説明をする。「高等魔術師達だ。あの吸血鬼の名はドラゴツシユ先生。吸血鬼の言い方の他にパンパ

イアとも呼ばれている。彼の初級魔術師は見たとおり、アンジェリカ・ブランドローだ。その横にいるエルフの名はダンマリル先生だ。昨日、紹介されたように初級魔術師はロバン・マンジルさ。君達の正面にいる人間はサルドワン先生で、初級魔術師は僕だ。カリブリス女史にはもう会ったって言ってたよね。で、初級魔術師は誰かは分からないなあ。それと、あの赤い塊の人はカームバームで名はパタン先生だ。昨日、紹介されたデリア女史もいるね。それから空のポロのチームを率いているアントレヌール先生もいる。彼の初級魔術師は、君達の知り合いのフアブリス。僕達の病気を治してくれる祈禱師もいるぞ。彼の名はオワゾー・ド・ニユイ先生。初級魔術師はモニカ・ゴットヴェルダム。あのふくよかな女性はブーディウ女史。初級魔術師はキャロル・ジェンティ。あそこにいる泡の中に入っている人魚はシレラ女史。初級魔術師はスキレール・エテルナ。そして君達もよく知っているシエムナシャオヴィロダントラシヴユ先生は、初級魔術師をもたないドラゴンさ」

カルが話が終えるのと同時にシエムが話始める。

「今日は客人の一人を紹介致します。タラテイランネム・ダンカン。イザベラ・ダンカンの孫娘です」

シエムがそう言うと、高等魔術評議会の彼方此方の席から囁き声が聞こえ、視線がタラに集中した。

その事に疑問を感じたエレンは、タラに肘で突っついて小声で話しかける。

「ねえねえ。タラのお婆ちゃんって有名人なの？」

「ええ、そうみたい」

エレンとタラが小声で話していると騒々しいファンファーレの音が突然鳴り出し、王様と王妃様の到着を告げた。

余程大事な話なのか、後もう少しで王様と王妃が来るのにも関わらず、カリブリス女史が部屋中響き渡る大きな声で連絡を始める。

「皆さんに連絡があります！」

「昨年から喘息患者が増加していると、祈祷師のオワゾー・ド・ニューイ先生から報告がありました。ですので、今年からファミリエをベットのの中に入れることは禁止になりました」

「でも、皆さんの側にファミリエを置いておくことが出来るように、止まり木や動物小屋を用意しました。また、共同寝室の隅には、ファミリエが快適に過ごせるように色々な設備も用意しています。こうすれば、ファミリエ達は何時でも近くにいられますよ」

この発表に不満者が続出し、抗議の声が増えてくるが、この反応は予め分かっていたようで妥協案を先に考えてカリブリス女史。その妥協案により抗議の声がやんでいったのであった。

そんなやり取り取りしている最中に、一匹の銀色の豹が現れた。そのせいでスキレールのファミリエの小さな猿が暴れ始め、スキレールが必死に宥めていた。

銀色の豹の脇から、茶色の髪の毛を可愛らしく巻き毛にし、少しの衝撃で壊れてしまいうような程の華奢な体格の少女が現れる。

豹の脇から現れた少女は皆からの視線と、遅れてしまったことによる罪の意識から顔を真っ赤に染め、今にも泣きそうまで体を縮めていた。

「ご、ご、ごめんなさい。わ、私、遅れちゃって」

「大丈夫よ。王様達の謁見はまだ始まってないわ。貴女はカリブリス女史の初級魔術師ね？名前は何？」

ブーディウ女史が少女に優しく声をかけ慰めた。

「モワ、モワ、モワノー・ダヴ、ダヴィールです」

「名字じゃなくて、名前は？」

「グロ、グロリアです。で、でも、あ、あのモワ、モワ、モワノーの方がいいです……」

あの意地悪な少女が、冷やかに見たせいでモワノーは更に体を縮めていた。

エレンは意地悪な少女にムツとした表情で、相手が睨むのを止めるまでの間ずっと睨んでいた。先に意地悪な少女の方が折れたが、隣に居る吸血鬼に何やらこそこそと話し掛け始めた。

その後ファンファアーレの音が鳴り、王様と王妃様の登場を告げる。

王の名はベア王、王妃の名はティターニア王妃。

王と王妃は小柄な体格で見たところ五十歳前後だ。歩く姿は紺色と銀色のローブが相まってより王者の威厳を感じる。王と王妃は王座に座ると参加者全員に優しく微笑んだ。

まずはお客様であるタラの謁見から始まった。

とても優しく声をかけられていて、かなり愛想が良かった。それはタラが嬉しさのあまりに泣きそうになっている事が、少し離れた位置からでも分かるぐらいだった。しかし、第一顧問のキマイラの介入によりその雰囲気は壊された。だが、王と王妃とシエムからのお叱りを受けてキマイラは渋々納得し自分の席に戻っていったのであった。

タラの謁見が終わると王妃はエレンに微笑んだ。

自然とエレンの謁見が始まり、エレンは中央前まで歩き立った。

「初めまして、お名前は何て言うのかしら?」

「エレン・ふわふわ頭・オーレウスです」

エレンはそうハキハキ言って御辞儀をする。

「そうか、元気があってよらしい」

「貴女の事は、ドライオンから聞いているわ。確か、旅をしていたらいいですね?でも、

今日からここが貴女のお家で、他の初級魔術師達は貴女にとつて姉妹や兄妹になれるでしょう。私達ランコヴィ王国は、貴女の訪問を心より歓迎致します」

「有り難うございます」

「旅をしていたらしいが、それは何故？」

「はい、魔法道具のお店を立ち上げる為です」

「そうか、ここではお店を堂々と出せるから安心してよいぞ。ところで、エレン。お主のことはドライオン以外からも話を聞いている。確か、君はもう既に個人部屋を持つていらっしゃるらしいな。それも豪華な部屋をたつた一日で。君も知つての通り魔術師の部屋は力によつて決まる。君は何でそんなに力を持つているのかね？」

王の発言により、歓迎ムードから一転してピリピリと張り詰めた雰囲気になる。

視線がエレンに集まり、特に高等魔術師の視線は体を射ぬく様な視線だ。

「…それは、旅をしていた時に身を守る為です」

「そうか。でもそれだけでは、個室は貰えてもあそこまで豪華な部屋にはならんぞ。他に何か心当たりがあるはずだ。思い出せないのか？」

「…え、えつと…」

エレンは元々、忘れやすく覚えていないのに王と周りからの厳しい視線により思い出しにくくなつてしまう。

それでも一生懸命思い出そうとする。

(…：うくん、そもそも、力をつけたいつもりはなかったんだけど。心当たりが思い出せない……。)

数秒間が数時間に感じる程のプレッシャーの中で必死に記憶を手繰り寄せる。

あまりにも何も思い出せない為、記憶の空間は真つ黒だった。一寸先も見えない暗闇の中を歩いているような感覚に落ちる。

記憶の手がかりを見付ける為に考え続けている時だった。

(…：あ!!)

朧気な記憶の中でも鮮明に光る。

一瞬電流が走ればその後にくよくよに白、赤、青、黄色などの丸弾が過ぎ去っていく。形は丸だけではなく、星や十字架等多種多様で形が定まっていなかった。数は辺りを多い尽くせる程多かったが、直ぐに消えてとても儚かった。

その姿はまるで……

(…：花火。みたい……。そうだ！思い出した……。！心当たり思い出した!!)

「思い出しました！私が力をつけていた理由を思い出しました！前に私の住んでいた所では、辺りいっぱい光線や光弾を沢山撒き散らして戦う方法がありました！その光が

「花火、みたいで綺麗で、私も出来るようになりたくて、いーっばい練習しました！出来るようになるまで、とても難しかったです。でもそのおかげで力がついたんだと思います」

エレンは思い出した嬉しさで、興奮してしまい声が弾み式典には相応しくない音量で話してしまった。

だが、エレンは満面の笑みで言うものだから、周りの大人達は文句を言えなかったのであつた。

「そ、そうか。では、君は前に何処に住んでいたんだ？」

「幻想郷です」

「幻想郷？聞いたことはない。まあいい。後で君とはじっくり話す必要があるみたいだ。下がりなさい」

「はい、失礼致します」

エレンは御辞儀して自分の場所に戻つた。

戻つたエレンに対してタラが心配そうに肘で突ついて話しかけようとしたが、この後また、話があるって言われたエレンは緊張して何もかも気にしていられなかつた。

謁見が終わつた後、エレン以外の初級魔術師は帰り、ベア王、ティターニア王妃、シエ

ムと一部の高等魔術師が残った。

エレンは美しい彫刻がぼどこされた豪華な椅子に座っていたが、周りからの視線で緊張して顔をうつむき、体を縮めていた。更に椅子の位置が真ん中でより視線が受けやすくなっていった。

エレンがいたたまれなくなってしまうた数十分後。

大きな白いケープを羽織った人物と青く小さな体格の男性が現れる。

顔を上げたエレンはかなり驚く。その少年は体格そのものは子供だが、顔はかなり老けていたのだ。

更に驚く事に、ヘルメットを被っていた人物は人間ではなく植物だった。ヘルメットだと思われた部分は黒い花びらだった。どうやらここまで歩くのに根を使って床を滑るように歩いていたらしい。

「ひゃっ!!」

エレンは驚きのあまり声をだした。

「御取り込み中に申し訳ありませんが、では始めます。」

慣れているのかエレンの反応を気にも止めず、青い男性は話を仕切り出す。

「……… 始めるって何を？」

「ああ、すいません。私の名はルーク・トリック。これから貴女には真実を話して貰いま

す。その為の確認として、真実を語る者に嘘かどうか確認させて頂きます。私は話せない彼の代わりの代理人となります」

「真実を語る者、？」

「はい、真実を語る者とは、この植物で人の頭の中を覗きこむことが出来る。知的植物の事です」

ルークは植物に指で指した。

エレンがビックリして固まっていると、王妃が優しく微笑み、エレンをリラックスさせようとした。

「何も怖がることはありません。貴女は本当のことを話して頂ければ大丈夫です。気軽に話してみして下さい」

「では、質問をします。幻想郷は何処にありますか？」

「覚えていません」

ノームは植物の脳波を受け、喋れない彼の代わりに話す。

「彼女は嘘をついておりません。どうやらまるつきり覚えてないようです」

ノームがそう言うとう会場は大きな溜め息に包まれた。

「では、その花火の様な戦い方をする人は何人ぐらいいましたか？」

「私が見たときは……五、六人くらいかな……」

「五、六人も地球に魔術師〔ソルスリエ〕放置されているのかよ」

高等魔術師の一人が呆れて溜め息しか出せなくなっていた。

「では、その人達とは知り合いですか？」

「いいえ、違います」

「その人達は、灰色のローブを着ていましたか？」

「着ていません」

「性別とか、何か他に分かることがありますか？」

「皆………女性でした………。服装は皆バラバラです………」

「ふわふわ頭・オーレウスさんはこの戦い方を自分で取得しましたか？」

「はい、自分で取得しました」

ノームは再び脳波を受け取り確認する。

「………ふわふわ頭・オーレウスさんの発言に嘘はありませんし、誰かに危害を加える気もありません」

「そうか。これによりエレンの審議を終える。ルーク、ご苦勞であつた」

「はっ」

ルークは御辞儀をして「真実を語る者」と共に部屋を退出する。

親の敵のように睨み付けていたのに、急に優しく暖かく迎えたもんだから、温度差に

ついていけずにエレンはボケっとしてしまう。

「驚かせちゃってごめんなさいね。でも、これは仕方ないことなのです」

本当に申し訳なさそうに謝るテイターニア王妃。シエムも王妃に続いて頭を下げて事情を語る。

「テイターニア王妃の言う通りじゃ。我々がここまで徹底的にやるのには理由があるのじゃ」

「理由って?」

「実は最近。サングラーフ族と名乗る一部の魔術師達が力をつけて、我々に対して攻撃してくるのじゃ。彼らの目的は、儂らドラゴンを滅亡に追い込み、この別世界「オートルモンド」と地球そして、全宇宙を支配することじゃ。だから、エレン。お主が人よりも倍、何倍もの力があると知った時にはサングラーフ族と繋がっているとと思ったのじゃ。でも、もう、これで安心じゃ。すまなかった」

嫌な奴だと思っていたシエムが突然謝罪した事により、エレンがポカーンと口を開けっ放しのアホ面になってしまう。

「私からも、改めて言わせて貰います。ランコヴィイ王国によろこそ。私達ランコヴィイ王国は、貴女の訪問を心から歓迎致します」

「……はこ」

「では、エレン。疲れただろう。下がちなさい」

「はい、失礼致します」

訳も分からなくなったエレンは、何も考えずに広場から出ていくのであった。

「しかし、あの娘をどうするつもりだ？」

「勿論、我々はエレンを歓迎する。だからこのままランコヴィ王国で暮らしていくのだ」

「だからと言って、あんな危険な存在をここには置いてはおけん！」

「では放っておいて、サングラーヴ族の仲間入りさせたいのか!？」

「そ…それは……」

エレンが部屋から退出した後。

ルークが、真実を語る者が読み取った内容を更に細かく報告すると、驚愕の事実により更なる困難を呼んでしまったのだ。

「しかし、オーレウス家の伝説は本当に合ったんだな……」

「となると、彼女は我々よりも歳上で千歳以上か……」

「イザベラは何やってる！全然管理出来ていないぞ！」

「ルークからの報告によりますと、花火の様な戦い方は自分で技を生み出し、その威力は

桁外れらしい……」

「しかも、それが五、六人もいてその人達も威力が桁違いらしい」

「とは言え、昔のことですから今は、数が減っているかもしれない…… 数が減つていけば良いのですが……」

「と言うか！何ですか！報告によれば、亀に乗って戦ったり、背中にミサイルを付けて飛んでいた人がいたらしいですわ。別世界【オートルモンド】でも聞いたことないです！」
「皆さん、お静かに！これからのことを発表する」

シエムが叫ぶと騒ぎがピタツとやみ、高等魔術師達は一斉にシエムの方を向く。

「陛下とのご相談の結果。シエムナシャオヴィロダントラシヴァは、エレンを自分の初級魔術師にし、責任を持って観察をする。ランコヴィ王国の高等魔術師達は、速やかに幻想郷を探し出すのじゃ。間違ってもサンングラーヴ族に気付かれるようにな、いいなあ！」

「はっ!!」

高等魔術師達は声を揃え返事をする。

エレンの過去が、エレンの知らないところで高等魔術師達の問題を増やしていったのであった。

第6話 交流

あの後、疲れきったエレンは部屋までとぼとぼと歩いて戻り、着替えをする気力もななくベツトに倒れ込むように眠る。

エレンの眠りを妨げのは外から扉を叩く音だった。

コンコンと始めは小さな音だったが、次第にドンドンと強めに叩かれ、音に反応したソクラテスがエレンに扉を開けるように鳴いて唆す。

エレンは渋々起きて、眠っていたい気持ちを無理やり抑え込み扉を開ける。

扉を開けるとそこには、タラとカルとファブリスと謁見に遅れてきた少女がいた。

「ふあゝ。いつたい、何の用？寝ていたいんだけど。」

「ごめんなさいね、エレン。でも凄く心配していたの。大丈夫？」

タラは心配そうな面持ちでエレンを見詰める。

「うん、一応大丈夫だよ。話をしていただけだから」

「そう。良かったわ」

タラは心の底から安堵してホッと息をついた。

「うわゝ。朝少し見たけど凄いなあ。部屋見てみたいなあゝ、上がって良い？」

「うん、良いよ」

本当は眠っていたいエレンだったが、急に起こされたせいで眠気が無くなり、どうせならこのストレス発散に付き合っけて貰いたくなかったのだ。

「じゃあ、遠慮なく。お邪魔します」

「おい！エレンは疲れているから止めとけよ！」

遠慮ないカルにファブリスが怒る。

「私は大丈夫だよ。それに誰かと話している方がストレス発散になるよ」

「ほら、エレンだって良い言ってるから良いじゃん」

「……分かったよ。けど、エレン、無理しなくて良いからな」

「うん、ありがとう！」

エレンはファブリスの優しい心遣いに弾んだ声で言う。

「じゃあ、私もお邪魔するわ」

「わ、わ、私も良い？」

謁見に遅れてきた少女は、エレンと面識がないため遠慮がちに言う。

「うん、良いよ」

「あ、あ、ありがとう。お、お、お邪魔します」

エレンが彼らを案内した場所は次の間は、初級魔術師の部屋よりも二倍大きい。

壁にはランゴヴィ王国の景色を描いた絵画が飾られており、部屋のすみには来客の為に白いお洒落なコードハンガーが置かれている。足下に引かれた白いカーペットは、そのまま寝転んでも眠れそうな程ふわふわだ。部屋の中央には白色のスイートシツクなソファアールが三つあり、複数人用の大きめのソファアールが二つ、一人がけソファアール一つあり、彼ら全員が座っても余裕があった。

ソファアールの間にはスイートシツクなテーブルが置かれており、その上には来客用のお菓子が用意されていた。

「ほ、ほ、本当に凄いわ。カ、カ、カルがうらやましくなるのも、わ、わ、分かるわ」

「そう言えば、何でそんなに喋り方が変なの？」

エレンは首を傾げながら謁見に遅れてきた少女に問う。

「グ、グ、グランシヨットびよ、病にか、か、かかってしまったからよ」

「グランシヨット病とは、魔術師だけがかかる病気で、魔術を使いすぎると体を消耗させると同時に、余分な魔術が関節の中に居すわって軟骨を蝕んで、全く動けなくなる。死ぬことはないとは言え、とっても危険で手遅れになると治るまでに物凄く時間がかかる。唯一、救いのあるところは治療法があるぐらいかな」

「いち早くソファアールに座ったカルが得意気に言う。」

「… あ… そうなんだ。失礼なことを聞いてごめんね」

「べ、べ、別に、だ、大丈夫よ。ちや、ちや、ちゃんと謝って、く、くれたからへ、平気よ」

「そっか、ありがとう。名前は」

「モワ、モワノー・ダヴ、ダヴ、ダヴィールです。モワ、モワ、モワノーって呼んでね」

「私の名前はエレン・ふわふわ頭・オーレウスです。宜しくね」

エレンは右手を差し出して握手を求めた。

「こ、こ、こちらこそ宜しく、お、お願いね」

モワノーも右手を差し出しエレンの握手に応じた。

「ところで、皆は暇なの？」

モワノーと挨拶をしたエレンは、来客用のお菓子を食べ始めている皆に話を振る。

「うん。何か分かんないんだけど二日間、急遽休みになったんだ」

フアブリスが飴を舐めながら言う。

「大方、エレンの故郷のことなんだろうなあ」

「それって、どういうこと？」

カルの発言にエレンは首を傾げる。

「うーん、説明するには別世界「オートルモンド」の歴史を知らないといけないなあ」

「別世界【オートルモンド】の歴史って？」

「五千年前の話。別世界【オートルモンド】では、ドラゴンと悪魔が戦っていたのさ。理由は確か……悪魔が全宇宙を支配しようとしていから」

「え、ええ。そ、そうよ。そ、そ、その時に悪魔はドラゴンと戦っていたけど。あ、悪魔はきゅ、急に別世界【オートルモンド】から地球へとタ、ターゲットを変えたわ。ち、地球のある場所から、お、別世界【オートルモンド】への侵入通路が、み、見つかったからよ。そ、そこをし、侵略してしまえば別世界【オートルモンド】をいつ、一気に押し寄せることができるから」

モワノーはカルの発言をサポートする。

「で、ドラゴン達はその事にいち早く気づいたから、先に征服しようとしたんだ。ドラゴン達は、別世界【オートルモンド】を支配していたから、エルフヤトルル、巨人や小人、吸血鬼やキマイラを引き連れて地球を支配しようとした。けど、出来なかった。地球にはデミデュリスという天才的な魔術師が、四人の優れた魔術師と共に軍隊をつくって対抗した。ドラゴン達は敗北を喫し、地球の征服計画をきっぱりと終わった」

「じゃあ、エレンの故郷の人達がデミデュリスという魔術師みたいな存在かも知れないってこと？」

タラは白い部分の髪の毛をカシカシ噛みながら言う。

「そう、そう言うとき。で、タラは何やっているんだ？」

「気にしないで、考えよときの癖なの」

「で、で、話を戻すわ。ド、ド、ドラゴンは私達のの先祖と協定して、あ、悪魔を討ち取って”禁じられた煉獄”に、に閉じ込めたわ」

「ちよつと待つてー！じゃあ、地球にはいつから魔術師がいたんだ？」

ファブリスが口挟む。

「洞穴生活を始めた原始人の時くらいからいたらしい。その時はまだ、魔術を使えない人間”ノンソ”を世話して助けていたんだけど、その内の何人かは自分のことを”神”に見せかけて崇めさせようとしたんだ」

「じゃあ!?ギリシヤ神話のゼウスやアフロディーテ、北欧神話のオーディンやトール、エジプト神話のイシス、オシリス、アヌビスとかは、皆、人間の魔術師だったこと？」

読書家のファブリスは、今まで読んできた空想上の話が実際に起きたことを知り驚いた。

「そうだな。だけど、別世界【オートルモンド】の高等魔術師評議会は神と名乗ることを禁じ、特別警察を設けたのさ。もしそう言うことをすると、すぐに逮捕されて牢屋に入られるか、死刑になるか」

「……じゃあ、エレンの故郷の魔術師はもしかして殺されてしまうの？」

タラは白い部分の髪の毛をカシカシと噛むのを止め、カルに質問をする。

「……死刑になる基準は解らないが、少なくとも神と名乗るぐらいなら、牢屋行きぐらいだと思う。ただ、神と名乗った人物が力をつけていたり、ノンソに危害を加えたり利用したりすればアウトだね。まあ、見つかったらかなり怒られるのは目に見えているね。もしかしたら、高等評議会の判断によつては魔術を使えなくしてしまうかも」

「へへ、そうなの。ねえ、エレン。花火の様な戦い方をしていたのはどれくらい、いたのかしら?」

「五〜六人くらいかな」

「じゃあ、その戦い方実際した?」

「うん、した」

「「な、何で!?!」」

衝撃のカミングアウトにエレン以外、一斉に声を荒げてる。

「何か、分かんないけど勝てば願い事が叶うから」

「そこまで、して叶いたい願い事は何?!」

「魔法道具のお店を出すこと」

エレンはえっへんとどや顔で宣言した。

「… エレン。その夢だったら、ここにいれば叶うよ」

カルはかなり呆れて天を仰いだ。

「幻想郷でもお店を出していたけど、あまりにも売れなすぎて辞めちゃった」

「ノンソに気づかれちゃいけないのに何やってんだ」

カルの呆れが止まらず天を仰いだままだ。

「も、も、もうかなりヤバいわよ！ろ、ろ、ろ、牢屋行きにな、な、ならなきゃいいんだけど…。」

モワノーは顔を青ざめ普段よりももってしまふ。

「これって、どういうことになるんだ？」

「うくん。この場合だと、幻想郷の魔術師を見付かり次第に、エレンと一緒に追及されるのは確かだな。…正直に言って、あまりにも事例がなさすぎて解らない」

「でも、ノンソには手を出していないし。神と名乗ってないから大丈夫じゃないの？」

「それでもかなり怒られるぞ。牢屋行きの最悪の可能性を考えるぐらいにはな」

「何で？そんなに怒られないといけないの？」

カルとモワノーの話を理解出来ないエレンはきよとんとする。

のほほんとしているエレンの態度を見てカルとモワノーは、エレンの顔とぶつからないぎりぎり距離まで近付き、小さな子供にも緊張が伝わるように真剣な表情でエレンの

顔を見詰めながら言う。

「良いかい、エレン。地球にいた魔術師さえもライバル意識が芽生え、争い始めたんだ。そのせいで、地球が減びるところだったんだ。ドラゴンが止めてくれないければ、地球は五千年前に消えていたんだぞ」

「だ、だからと言って、お、別世界【オートルモンド】には、い、い、色んな種族がいるけれども、あ、あ、あ、あまり仲良くないの」

「はつきり言つて、専門家の中にはいつ戦争がおきてもおかしくはないって、言っている人もいるし。ドラゴンが統治しているとは言え、エルフとか他の種族の中には、自分達方こそが、別世界【オートルモンド】の支配者に相応しいって思っている人達もいて、けっこう、危ういだぞ。それなのに、自分達の知らないところで、勝手に力をつけていることを知ったら、新たな火種になるぞ」

「へえー。そうなんだ」

カルとモワノーの必死の説明にも関わらず、エレンは呑気な返事をするだけであつた。

「そう言えば、さあ。地球と別世界【オートルモンド】ってどんな関係何だ？」

気まずい雰囲気になってしまったので、ファブリスは空気を変えるために質問をす

る。

「そうねえ。エレンの故郷のことは見つかるまで、何も解らないから一先ず、置いておいて。それに、今考えたって不安しか感じないなら、見つかるまで何もこの事は考えなければいいんじゃないの？」

考えることに嫌気がさしてきたタラは、ファブリスの質問に賛同する。

「そうだな。考えたって仕方ないな」

「お、お、別世界「オートルモンド」と地球は一応、こ、こ、交流は有るわ。ぼ、ぼ、貿易していて、と、特に、ド、ドラゴン牛が好物だから。よ、よく地球から輸入しているわ。け、けれども、ち、地球にはその存在を、か、隠しているわ」

「へえー、そうなんだ。と言うか、隠しているのによく貿易が出来るわね」

「ぼ、貿易のために地球に、い、い、一部、そ、魔術師「ソルスリエ」がいるの。そ、その人達が魔術を使つて、う、上手く誤魔化しているから」

「ねえ。何で、そんなに存在を隠しているの？」

エレンは疑問に感じたので純粹に質問をする。

それが何か触れてはいいけない線に触れたようで、カルとモワノーはたじろいだ。

「ねえ、何で？」

「気まずそうに口をゴニョゴニョしているものも、二人は答えられずにいた。

「ねえ、どうしたの?」

エレンは一人用のソファから降りて、二人の顔を心配そうに覗き込む。更に気まずくなった二人は顔を下に向けて目を合わせないようにした。

「ちよつと!ちよつと!どうしたの?!急に何で、こんな事になるのよ!?そんなにエレンの質問に答えられないの?」

二人の豹変ぶりにタラは思わず慌てる。ファブリスも真剣な表情で二人を見る。

二人は互いに見詰め合うと溜め息をする。

見詰め合ったまま数秒間経つと観念したのから、カルから話しを切り出した。

「地球をあまり信用していない。……それに……実は……僕達、別世界「オートルモンド」の人達は、地球の事を少し見下している」

「そ、そ、そうなの。ご、五千年前の戦いで、ド、ド、ドラゴンが止めてくれなければ、い、い、今頃、ほ、滅んでいて、お、お、別世界「オートルモンド」の事を知ったら、ま、また争いがおきると思っっているから」

「実際に、地球では魔女狩りがおきて、魔術師の子供達や関係ない人達が殺された」

魔女狩りと言う言葉に、エレンは悲しそうな顔をしてうつ向いた。

「そ、そ、それに、ち、地球は、ま、魔力が少ないから、わ、私達ま、そ、そ、魔術師「ソ

ルスリエ」達のち、力が、よ、弱くなってしまふの。ぶ、文明も別世界「オートルモンド」よりもかなり、お、遅れているし。で、でも、貴方達の事は、ば、ば、馬鹿にしているわ。ほ、本当よ。し、信じて」

モワノーは沈んだ表情で言う。

「そうなんだよなあ。この事を言ったら嫌われると思つて言いたくなかつた」

カルとモワノーは言い終わると暗い表情でうつ向く。

暗い雰囲気が部屋を包み込み、楽しかつた時間を消し去っていく。誰もが何をして良いか分からない中、立ち上がったタラはカルとモワノーをいきなり抱きついた。

「うわ!？」

「きゃ!？」

二人は驚きのあまり声を出す。

「そんな事で嫌いにならないわよ。だつて、貴方達、罪悪感を感じているじゃない。まあ、そんな考えがあるなんて悲しいけど、…これから考えを変えれば良いじゃない」

「それに、私達は友達だよ。そんな簡単に嫌わないよ」

「タラやエレンの言う通りだよ。まだ、会つて一日も経っていないけど、僕達も君達は仲良くしていきたいと思つているからそれで良いじゃん」

タラが子供を優しく諭す様な笑顔で。

エレンは誰もが安心するような満面の笑みで。

「ファブリスはどこかちよつと呆れていてるけど、優しく微笑んでいる。

「ふう〜。良かった〜。地球から来た人達と話すのが初めてで、しかも、話している内に楽しくなってきたからさあ。こんな事を聞かれる事事態想定していなかったからなあ。焦った〜」

「わ、私は、びよ、びよ、病気とかで、い、いつも、ひ、独りぼちだったから、さ、寂しくて、でも、友達が出来て、嬉しかった。き、嫌われなくて本当に良かった」

そんな三人を見てカルとモワノーは心の底から安堵する。

「ねえ。せつかくだから、地球の話もしない？私とファブリスの周りだけだけど」

「おお、それ良いね。エレンの話ばっかで、ちよつと飽き飽きしていたんだ」

「タラは空気を変えるために提案をする。それを聞いたファブリスは喜びながらその提案に乗る。」

「じゃあ、決まりね。カル、モワノーは地球の事をどこまで知っているの？」

「わ、私は、ぜ、全然知らないわ」

「僕は地球の映画とか好きで、それなりに知っている」

「そうか。よし、これからいっぱい話すぞ！」

「そうね。私達の故郷の事を好きになつてもらいたいし、何よりも、貴方達ともつと、

もっと、仲良くなりたいたいものです」

「あ、そうだ！明日も臨時で休みなんだよな？せつかくだから、明日外で、地球の遊びをしない？」

「良いね。それ！でも、今日はいっぱい喋る日よ！」

ファブリスの提案にタラは興奮ぎみに賛成し、それからはずっと楽しい時間であった。

興奮したタラのテンションに、最初はエレンとカルとモワノーは着いていけなかったが、話をしている内に段々と楽しくなつて着いていけるようになっていた。

タラとファブリスの共通の友人の話をしたり、エレンの地球の過ごし方がちよつと可笑しくて着いていけなかった時は皆でポカーンとしたり、それ以上に可笑しい別世界【オートルモンド】の習慣に、地球組の三人は目を丸くしたりして五人は楽しく話していた。

あまりにも楽しくて、彼らは夕食を告げる銅鑼の音が鳴るまで話をしていたのであった。

第7話 初披露

銅鑼の音に気づくと五人は直ぐに食堂に向かった。

昨日と同じく豪華な食事が並べてあり、五人の中で一番お腹を空かしているカルが、今か今かとウズウズしながら待っている。

だが、今日も何か連絡事があるみたいでカリブリス女史が叫ぶ。

「静粛にー！」

「皆さんに、シエム先生からお話があるので聞いて下さい」

カリブリス女史はそう言うと一緒に下がり、代わりに老魔術師のシエムが前に出た。

「この度、シエムナシャオヴィロダントラシヴユは、エレン・ふわふわ頭・オーレウスを私の初級魔術師として選びました」

他の初級魔術師や使用人達が驚きながらエレンの方を見る。

「えっ!?!嘘でしょうー！」

エレンも驚きのあまりかなり狼狽している。

気になったタラが辺りを見渡すと、高等魔術師達は驚いていない事に気付く。

タラは仲間達にコソコソと話し掛ける。

「もしかして、監視？」

「えっ、ええ、そ、そうかもしれないわ」

「もう、動き始めたのか」

「やっぱり。僕やモワノーだつて考えられたんだから、高等魔術師達の方が考え付き。まあ、大丈夫だと思ふけど」

驚きすぎて固まってしまったエレンを余所に四人は話をする。シエムは言うだけ言うときさつさと自分の席に戻る。

今日の連絡事項はこれだけのようで、シエムが席に座ると同時にカリブリス女史は食事の号令をかけた。

すぐにざわめきが消えて食事が始まったが、五人の内カル以外は直ぐに食べれなかった。

「大丈夫だよ。別に捕まる訳じゃないからさ」

カルは口をモグモグしながら言う。

その言葉を聞いてエレン達は一先ず、食べる事に集中力したのだった。

ご飯を食べ終えた五人はそれぞれ自分の部屋に戻る。

タラとモワノーは女子寮へ、カルとフアブリスは男子寮へ、エレンは自分に与えられ

た部屋に戻る。

エレンは自分の部屋に戻ると直ぐ様お風呂に入った。

三十分以上ゆつくりと湯船に入って、身体をほぐし疲れをとる。

身体も心もリフレッシュさせた後は、髪の毛をタオルで乾かし櫛で整える。

自分の櫛をしまった後はファミリエ用の櫛を持ち変えて、ソクラテスの毛を櫛でとかしていく。ソクラテスの毛をとかず度にゴロゴロと音をたてて喉を鳴らす。

(これからどうなっちゃうのかな…)

ゆつたりした時間が癒すことはなく、逆に不安を募らせてしまう。それでも、気分を誤魔化す為にソクラテスのブラッシングを続ける。

ニヤーツと、どこか気の抜けた声が出た。

エレンの顔を見上げるソクラテスの顔はまるで、大丈夫だよと伝えているかのように感じさせる。

「…そっか。ありがとう」

エレンもソクラテスに気遣いに感謝をし、優しく微笑んで返事をする。

消灯時間がくるまでの間、エレンはソクラテスにブラッシングを続けて揺つたりとした時間を過ごすのであった。

次の日の朝自然と食堂の前に五人が集まる。

エレンが着いた時にはタラ、モワノー、カル、ファブリスが到着していた。

「おはよう。皆！」

「おはよう。エレン」

「お、おはよう」

「おう、おはよう」

「おはよう。エレン」

エレンが元気よく挨拶するとそれぞれ挨拶を返した。

揃ったのでさあ入ろうとした瞬間。

エレンの身分証明書がブンブンと唸り声をあげながら鳴る。エレンが何かする前に身分証明書は、人間の姿のシエムの笑顔が浮かび上がらせる。

「やあ、エレン。おはよう」

「お、おはよう。…誰？貴方には番号を覚えていないんだけど」

「それは、ワシらが情報を扱っているから解るもんじゃ。それと、エレン。ワシの名はシエムナシャオヴィロダントラシヴユだ。…ハア。御主、エレンは物は忘れしやしない理由も解るし、仕方ないとは言え。…これは酷すぎる。まあ、それよりもエレン、君は昨日から、ワシの生徒じゃぞ。先生と呼びなさい」

「はい、先生」

戸惑うエレンを余所に話を続けるシエム。

「それで、よろしい。大事な話がある」

「何？」

「陛下どのが、御主の作った魔術に興味があるから見たいそうだ。朝御飯を食べ終えたら至急、外の広場に来なさい」

「それって、私達も見て良いですか？」

エレンが返事をする前にタラが話に入り込む。

浮かんたシエムの顔をタラ、ファブリス、モワノー、カルが不安そうに見つめている。

シエムは少しの間考えこんだ後に言う。

「：．． まあ、良いだろう。高等魔術師達も集まるし、初級魔術師達も釣られて見るかもしれないしな。なら、カル。エレンを案内しなさい」

「はい、解りました」

カルは少し緊張しながら返事をする。

「では、よろしい。待っているからなエレン」

シエムはエレンの返事を聴かずに勝手に通信を消してしまふ。

後に残されたエレンは、自分がまるで罪人の様な扱いに呆然とし、そのまま突っ立つ

てしまう。

「エレン。大丈夫？」

タラはエレンの顔を心配そうに覗きこむ。

タラの様子を見て心配させたくないエレンは、首を激しく横に振り更に頬を叩いて元気を出す。今までの対応に不満を感じて怒りが爆発する。

「私は大丈夫だよ！だって魔法を使うだけ！誰かを傷付ける為に使うわけじゃないもん！そんなに魔法を見たきゃ、見せてあげる！私は悪くないもん！危険人物じゃないもん！」

そんなエレンの様子を見て、カルはピューツと口笛を吹き手を叩く。

「良いぞ。エレン！その調子だ」

「カ、カル！」

「でも、カルの言う通りかな。別に、エレンは悪い事をしている訳じゃないし。そりゃあ、昨日のカルとモワノーの話で、高等魔術師達が慎重になるのが分かるけど。それに……僕も……エレンの魔法見てみたいし」

「で、でも……」

「別に大丈夫よ！それに、私達が見ているから、何かあったらフォローするから安心して！」

面白がるカルを咎めるモワノー。カルの肩を持つフアブリスにモワノーは戸惑い、自分達に言い聞かせるようにエレンを励ます。

「うん！ よーし、久し振りに使うから、いっぱい食べて備えよー」

「おう！ 僕もいっぱい食べるぞー！」

「カルは関係ないでしょ」

気分が上がり片手を上げるエレン。それに続くカルを見て呆れるタラ。クスクス笑うフアブリスとモワノー。何とも愉快な朝御飯が始まる。

朝御飯を食べ終えた五人、特にいっぱい食べたエレンは準備万端だ。五人は、いつも通りに喋りながら外の広場に向かう。

それでも五人は大丈夫だと、心の底から言い聞かせて不安を誤魔化しながら歩いたのであった。

五人が着いた時にはもうシエムが待っていた。

「やあ、来たかね。準備は良いか？」

「うん、良いよ」

「では、行くぞ」

返事を聞くとシエムはエレンの手をとり連れて行く。

「また後でね。バイバイ」

「おう、また後でな」

「え、ええ。ま、またね」

「またね」

「じゃあ、また後で」

エレンには余裕あり手を引かれながらも手を振る。

空元気なのか、本当に余裕あるのかは分からないが、カル、モワノー、タラ、ファブリスもいつも通りに手を振って分かれるのであった。

エレンと別れたタラ達は、エレンの魔術を見る為の場所を探す。

広場には既に高等魔術師や初級魔術師が集まっており、その集団が大きな円を作り出している。円の中心は空いていて、そこでエレンが披露するだろう、とタラ達は推測をする。

高等魔術師は吸血鬼のドラゴツシユ先生やエルフのダンマリル先生、カルの先生のサルドワン先生や第一顧問のキマイラなどがある。

初級魔術師はロバンやスキレール、アンジェリカとその子分であるモニカとキャロル

などがいる。

更に空には二枚の黒い翼が生えた上に、スピードアップの為なのかジェットエンジンが付いた黒い小さな箱のような物体が飛んでいた。黒い箱には大きな一つ目も付いており、その大きな目で辺りを見渡している。それらが何台も空を飛んでいた。少しでも見逃さないようにしていた事が容易に伺えた。

「あれは何?」

「ああ、これ? スクープだよ。撮影する為の機械さ」

タラは空に指を指しながら尋ねる。

話ながら少し歩くとタラ達は丁度良いところを見付け、そこで見学することにしたのだ。

タラ達が待つて数分後。

円の中心からシエムとエレンが登場する。登場したシエムは綺麗なお辞儀をして挨拶をする。自分が終わるとエレンに催促し、エレンにもお辞儀をさせる。

二人のお辞儀が始まりの合図だったようで、エレンは何も呪文を唱えずに高く飛び上がる。

それだけの行動で辺りの魔術師から驚きの声をあがる。カルとモワノーも例外ではなく驚いている。驚いていないのは見たことあるタラと別世界【オートルモンド】に来

たばかりで、考えが浸透していないフアブリスだけだった。

ある程度の高さまで飛ぶとエレンは止まった。

エレンは静電気で少しぼさぼさになった髪の毛を気にしてハートの赤い光弾を放つ。最初は数個の光弾だったが、数十個まで増えて、大きな一つのハートを作り出していた。次に繰り出したのは黄色の光弾だ。

光弾は左右に三個ずつ出てきて、合計六個出てきた。すると光弾は形を変え、先がぐねつとしたレーザー状に変化する。

これには全員がおおーっと感嘆の声をあげる。

髪の毛をパチパチが少し酷くなっているが、まだまだ続く。

今度は、黄色の光弾が四つ出てくる。光弾はどこかに飛んでいく。

「えいー」

その間に、自分の身体よりも二倍大きい赤い光弾と青い光弾を一個ずつ作り出す。

大きい光弾は、エレンの周りを回りながら少しずつ離れていく。

大きい光弾がエレンから離れた瞬間、黄色の光弾が戻ってきて、赤と青の大きい光弾にぶつかるが壊れてはいなかった。

光弾が戻ってきた事に、魔術師達は口を開けてたまま驚く。

大きい光弾を残したまま、エレンは作り出す。今度は自分の周りに数百個の光弾を出

す。光弾は周りを円の形を作りながら囲む。しかも、光弾は次々と色を、赤、青、緑、黄色と色を変える。

もう驚きすぎて何も反応がなかった。

「はあー！」

数百個の光弾が消えると、今度はカードの様な四角い赤い魔方陣が二つエレンの後ろに現れる。四角い魔方陣から赤いビームを打ち。数十個の赤い光弾も一緒に現れる。

数十秒間出して終わると。

「魔符 ふわふわアブラカタブラ」

エレンがそう唱えた。

すると、エレンは左手を右手に添えると、右手から赤い魔方陣が現れる。赤い魔方陣から、極太の赤いビームが放たれた。

ビームは空気を振動させ遠くまで飛んでいった。

これには驚きすぎて固まったままの魔術師達が、恐怖のあまり腰を抜かしてしまう。

「神符 デウス・エクス・マキナ」

これで終わらず、まだエレンは唱える。今のは少し変わったタイプで、今まで、エレンの近くに現れていた魔方陣が、広場の中心の誰もいない場所に現れた。それなりの大きい黄色の魔方陣が現れた瞬間、雷が魔方陣目掛けて、落ちてきて雷鳴が轟き、地面を

振動させる。

雷が落ちた場所には焼け跡が残った。そこから焦げた臭いが充満する。アンジェリカは、「ひゃっあ!!」っと恐怖のあまり情けない声をあげる。

これで、全て終わったのかエレンは地上に降りてきた。

エレンの髪の毛は静電気が酷すぎて、アフロヘアになっていてパチパチと音が鳴る。

エレンはやりきった解放感でどや顔をしている。だが、この行動が間違いだと気付く。

エレンの事を誰もが恐怖の目で見ている。

タラ達も驚きのあまり声を掛けてこなかった。驚愕の色が目には浮かぶだけだった。

シエムは調子を取り戻すと、直ぐ様エレンの腕を引っ張りどこかに連れて行く。

彼らが恐怖を感じたのは魔術の威力だけではない。

ほぼ呪文を言わずに、身振り手振りだけで出来るからだ。呪文と言ってもかなり短い。別世界【オートルモンド】の魔術師達は長い呪文を使うのだ。もし、彼女と戦うのなら圧倒的に別世界【オートルモンド】側が不利になる。

エレンの光弾を避けられなかったスクープの残骸が、彼らの恐怖の象徴に見えたのであった。

第8話 最悪な始まり

シエムに腕を引つ張られて連れてこられた場所は、シエムの執務室だった。

シエムの執務室は鍾乳石の洞窟でできており、辺りには金貨や宝石が山の様に積み上げられていた。

シエムは簡単な手の動作で金貨や宝石の山を消し去った。

その後二人分の椅子を用意し、シエムは片方の椅子をエレンに座らせると、シエムはその真正面にもう片方の椅子を置き、座り対面する。

そして話が始まった。

話の内容はエレンの故郷幻想郷の事だった。

シエムは必死になって、エレンに色んな風景の写真を見せて少しでも思い出させようとした。

だが、思い出させた事は、幻想郷が山の中にあることと住んでいた時の思い出だけだった。

シエムの話が終わり、エレンがシエムの執務室を出た頃には、もう夕食に近い時間帯

だった。

エレンはボサボサになった髪の毛を櫛で櫛でとかしながら歩く。本当はシエムの話の最中にも、髪を直したかったが、怒られてしまった為に来れなかった。

エレンが、髪をとかしながら歩くと、後ろから声を掛けられる。

「やあ、オーレウス」

エレンが振り向くと、そこには燃える赤い瞳の長身痩躯の吸血鬼の男性が立っていた。

先程前まで怯えていた筈が、今では犬歯を見せつけながら微笑んでいる。

「はい……誰ですか？」

「私の名は、サフィール・ドラゴツシユだ。覚えておきたまえ。それよりもこれから、授業を始める。着いて来なさい」

「えっ。今日は確か」

「ああ。君の言う通り今日は休みだ。だが、アンジェリカは勉強するべきだと言ったのだ。君達も彼女を見習いたまえ」

そう言うのと、ドラゴツシユはさっさと、歩いて行ってしまう。エレンは渋々、早歩きで着いて行くのであった。

ドラゴツシュに着いて行つて、着いた場所はトレーニンングルームだ。

トレーニンングルームとは、学校の体育館の様な所で、広さは三倍以上もある。周りには見学する為のスタンド席があつた。

トレーニンングルームの中心には、生徒以上の数の座れるクッションが置かれていた。前の方の席には、ブレア、トリシア、アンジェリカとその子分であるモニカとキャロルが座っている。真ん中辺りの席には、ロバン、スキレル、ジャヌ、タンギーが座っている。後ろの方の席には、タラ、カル、ファブリス、モワノーが座っていた。

エレンが入つてくると、初級魔術師達は恐怖でぎよつとした顔で見てきた。

例外だつたのは、ただじつと見つめるロバンと先程の自分達の行いに、後ろめたさを感じてかきこちない笑みを向けるタラ達だけだつた。

エレンは、手を振りながらタラ達の近くの席に座ろうとしたが、ドラゴツシュに肩に手を置かれ行けなかつた。

「駄目だ。君にはこれから、授業で実践してもらおう。前に来なさい」

ドラゴツシュはエレンを連れて前に行く。

エレンが通るだけで、ロバンとタラ達以外は大袈裟に身体を避けた。

エレンとドラゴツシュが前に立つと、ドラゴツシュは授業を始めた。

「ええ、皆さんにはこれから、自分の基礎技術を見直してもらいます。ではやってみよう

か、オーレウス」

そう言うと、ドラゴツシユはエレンにこわばった指を指した。

「何を？」

具体的な内容ではないので、話が伝わらずエレンは首をかしげる。

「自分のローブにデコリユスのおまじないを掛けてみなさい」

「デコリユスのおまじないって何？」

ドラゴツシユはしまったと、顔に手を当てる。

ドラゴツシユはすっかり、エレンが地球から来たばかりだと言うことを忘れていたのだ。あれだけの魔術を操っていられたから、もう高等魔術師として認識してしまっていたのだ。

「デコリユスのおまじないとは、飾り付けるおまじないの事だ。そして、こう言うんだ。

『デコリユス【飾り付ける】のおまじないによって、服を飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ』で、ローブを飾り付けなさい」

「何でデコリユスのおまじないで、自分の基礎が解るの？それにローブに飾り付けるなら、裁縫でちよちよいのちよいだよ」

エレンの態度にドラゴツシユは、かなり面倒くさい少女だと思った。

初級魔術師達は、エレンの発言に啞然として口をポカーンと開けてしまう。

だが、アンジェリカとその子分であるモニカとキャロルは、意地悪そうにクスクスと嗤った。

ドラゴツシユは面倒な気持ちを隠しきれずにため息をこぼしながら、説明をする。

「良いか。服の模様が自分の思う模様にとれだけ、近く再現出来るのか。複雑な模様にするほど、魔術の操作が難しくなる。模様で、どこまで出来るのかが解るのだ。それに、このおまじないなら失敗しても、被害はそれほど出ない。だから初級魔術師達にとつて良い腕試しだ。解ったら、やるのだオーレウス」

ドラゴツシユは途中から、少し怒鳴り気味の声を投げやりになつて言う。

「うん、分かった」

エレンは軽く言うのと、一步、前に出て考える。

(さて、どうしようかな？服の飾りを魔法でやろうとは、一度も思った事もないし...)
エレンが魔法を使う時は戦闘の時か、空を飛ぶ時か、魔法薬を作る時か、料理などで火を使う時か、何かを保存する時に冷やす時か、洗濯物を乾かす時か、片付けをする時ぐらいだ。

エレンは魔法を使ったり、受けたりすると髪の毛が静電気でパチパチして酷くなるので、あまり使いたがらない。

けど、今は授業だから使わないといけない。それに異世界の魔法にもかなり興味はあ

るのだ。

とは言え、普段、唱える事はなく身振り手振りで魔法を行う。それは、はつきりと想像出来るからこそ唱えなくていいのだ。けど普段使わないところに、使うのは想像しにくい。補助としてこの機会に呪文を使う事にした。

エレンは青と銀色のローブを見て想像する。

（よし、可愛いのにしよう。模様は……ハートを使つてと。私の作った光弾の中にハートあるしね。デコリユスのおまじないかあ……長いなあ。そうだ！デコリユスつて短く言おう。それに短く言つても、ちゃんと発動するか確かめられるしね）

「デコリユス！」

エレンは短めに叫んで、人差し指をローブに指す。

唱えた瞬間、髪の毛にパチツとする音とポントと軽い音が鳴る。すると、エレンのローブには赤いハートと線で可愛いく彩られたのだ。

エレンはこの結果が自分が望んだ通りなので、大いに満足したが、ドラゴツシユはかなり気に入らないかった。

「ちゃんと呪文を唱えなさい。オーレウス」

「でも、出来たから良いでしょ？」

「……もういい。君では見本にすらなれなかったようだな。アンジェリカ、教えてあげ

なさい」

ドラゴツシユはゲンナリとした顔で、アンジェリカを指名した。

「はい、先生」

エレンはよう済みになったので、そそくさとタラ達の近くの席に向かう。すれ違い様にアンジェリカは、勝ち誇った嫌みたらしい笑みを向ける。子分達もクスクスと意地悪そうに嗤う。

エレンには、何故ここで、勝ち誇った顔をしているのかが分からなかった。そもそも彼女とは勝負をしていない。エレンは彼女の事を再度、嫌な女としか認識しなかった。

エレンがクツシヨンに座ると、アンジェリカの発表が始まった。

「デコリユス【飾り付ける】のおまじないによって、飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ」

アンジェリカが大声で唱えると、複雑な模様がローブに浮き彫りになった。

「そうだ。アンジェリカ、良い見本だ。次は、ジェンディ。やってみようか」

アンジェリカは、終わるとエレンに意地悪な笑みを浮かべながら、自分の席に座る。それと入れ替わるように赤毛の少女が前に立った。

「デコリユス【飾り付ける】のおまじないによって、服を飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ」

理解不能な象形文字がすぐに出て、ローブを飾った。

次に、金髪の少女ゴットヴェルダムが前に出て、唱える。

「デコリユス〔飾り付ける〕のおまじないによって、服を飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ」

けど、何も起きなかった。

「口先だけでは駄目だ。ちゃんと心の底から想いなさい。もう一回だ」

「デコリユス〔飾り付ける〕のおまじないによって、服を飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ」

顔を真っ赤にしながら叫ぶと、努力が実って六つの模様が現れた。

この頃には、エレンは疲れからか眠気でウトウトしてしまって、誰がどんな模様にしたのか、あまり覚えていなかった。覚えているのは、友達のか印象が悪くないロバンのだけだった。

フアブリスのローブには虎とライオン、モワノーのローブには花、カルのローブには跳び跳ねる狐、ロバンのローブには木と植物が現れた。

エレンが本格的に眠りに入る瞬間、雷鳴が轟いた。

アンジェリカの叫び声とともに、エレン以外が一斉に飛び上がった。

すっかり目が覚めたエレンが、辺りを見渡すとアンジェリカのローブには、何百匹もの蛇が這い回っている。子分達のローブには、鶏、七面鳥、ダチョウが飛び回っており、ドラゴツシュのローブには、ニヤニヤした死人の不気味な顔が浮かぶ。

タラのローブには、銀色の立派な馬が跳ね回っている。

飾りを付けた一部の人達にも、変化があった。モワノーのローブは花から王冠や王杖と言った、きらびやかな装飾品が浮かぶ。でもモワノーは、いきなり変わったことで、ひどく怯えている。

ロバンのローブは木や植物が生えている森の景色から、争いをするエルフの戦士へと変わる。この事でロバンは完全なパニック状態に陥ってしまう。

「一体何のつもりかな、お嬢さん？」

ドラゴツシュには、誰がやったのか直ぐ解るようで、タラを血走った目で睨んだ。

「ごめんなさい。でも、私。ここまで望んでないんです！」

タラは自分が起こした状況に、パニックになってしまい自分自身にも恐がっている。

「望まないよ、呪いは掛けられんよ。望んだのなら、話は全く違うがね。お前は、自分の才能を見せつけて、友達があつと驚くことを望んだのではないかな？それでは、お前がどれ程強いのかお手並み拝見といこうか？」

ドラゴツシュは、タラの前に立ちローブに指を指し怒鳴った。

「ノルマリユス〔元に戻す〕のおまじないによって、消えなさい。ローブは殺風景になるのだ」

そう言うと、ローブの中の馬は震えて消えた。

「それではお嬢さん。馬達をもう一度出現させなさい」

「でも、でも」

先程の失敗で、タラは嫌がる。

「私が言った通りにするんだ！」

ドラゴツシユは頭ごなしに怒鳴り付けた。

「デコリユス〔飾り付ける〕のおまじないによって、飾りなさい。私の模様を照らし出すのだ」

タラの魔術は失敗した。けど、エレンから見るとタラは失敗してホツとしている。だが、この事に気が付いていないドラゴツシユは、残忍な笑みを浮かべる。

「私がお前に呪いを掛けたのだ。お前がどんな小狡い奴でも、直ぐに解くことは出来ない。これでお前も呪文を正確に唱えられない無能な魔術師の仲間入りだ！私の授業を混乱させると、どういう事になるか身に染みただろう！」

それからドラゴツシユは、他の魔術師達の方を向いて大声で叫んだ。

「デコリユス〔飾り付ける〕のおまじないによって、一人一人の願いが叶うように」

タラの魔術によって、変わったアンジェリカ、ジエンデイ、ゴットヴェルダム、モワノー、ロバンのローブが元の模様を取り戻した。

タラの件が終わると、丁度一時間経ち授業が終わった。

ドラゴツシユは部屋を出るときに、悪意に満ちた眼でタラの事を睨みながら出ていった。他の魔術師達もタラの近くを通らないように避けて歩いた。

けど、エレン達やロバンにはタラがわざとやったとは、思わなかった。

ロバンは励ますように、タラの肩を優しくポンと叩いて、出ていった。カルはドラゴツシユ先生に危うく食って掛かりそうになった。エレンもドラゴツシユ先生とアンジェリカとその子分達に思い切り、睨み付けた。ファブリスとモワノーはタラに友情を込めた視線で、見つめながらタラの隣に立った。

「あの薄汚い野郎は、やっぱ、何か企んでいるに違いない!」

カルは、厨房から生温かいミートパイを半ダース程持ってきて、分け合おうと吐き捨てるように言う。

「何を企んでいるの?」

魔法をいっぱい使ってお腹が空いたエレンは、早速食べながら聴く。

「実はトレーニングルームに向かう途中に、ドラゴツシユ先生が謎の会話をしていたのを聞いたんだ」

「謎の会話って？」

「消えた四人の魔術師についてさ。この件で高等魔術師達は、初級魔術師達を守る為に王宮の回りに呪いを掛けて、秘密警察も呼んで警戒体制に入ってたんだけど、未だに何の手懸かりも無いんだ。それなのにドラゴツシユは、よく捕まえたとか言い出したんだ。もし捕まえたのなら、今頃四人の魔術師は戻ってきているし、犯人だつて捕まつて、王宮中の噂になるから誰がつて直ぐに解るし。そもそも、一体何を捕まえたんだ？怪しすぎるのに、にやけた顔でどっか行つたんだぜ！」

「それに！何でこんな風にタラを侮辱するんだ！タラは

わざとやったんじゃないぞ！タラのローブに呪いを掛けて、皆に、タラは呪いを掛けられないと思わせようとしたんだ。クソツ！本当に頭に来る！」

「へえー。そうだったんだ。でも本当！タラに対して酷すぎるよね。けど、呪文は唱えなくても発動出来るもんだよ」

「えっ！そうなの？…… あ、そうか！さつきから、エレンはそんなに呪文を使わなかったな。…… 後、さつきは態度悪くてごめん」

「私からもごめんなさい」

「私もごめんね」

「僕からもごめん」

怒りから一転して、罪悪感からの下げ気味になった視線で、エレンの顔を伺いながらすまなそうにカル、モワノー、タラ、ファブリスはエレンに謝った。

「…… 気にしていないと言えば、嘘だけど。そこまでしなくて良いよ…… って、モワノーの喋り方が普通……？」

エレンもその事で、多少不満を感じていたが謝罪を受け入れる。それよりもエレンは、モワノーの話しの方が気になった。

「あ、本当だ！モワノー、もうどうもっていないじゃん！」

「怒っている時は、何故かどもらないの。とにかく私は物凄く怒ってるのよ。タラ、私達は何とかするから、見て」

モワノーは顔を恥ずかしさで真っ赤にしながら応えた。そして、手を広げ唱えた。

「ノルマリユス〔元に戻す〕のまじないによって、消えなさい。ローブは殺風景になるのだ！」

モワノーのローブから花の模様が消え、元のローブに戻った。

カルは口笛を吹いて喜ぶが、エレンにはこの事が何故、先生への対抗になるのかが解らなかつた。

「ねえ、モワノー。こんな事して、何の意味があるの？」

「意味？意味ならあるわよ。だって、先生が付けたおまじないを消せば、私達にはそれな

りに力があるって証明出来るし、あんな奴の力は大了たことはないって証明出来るしね。…… それにあんな奴が付けた飾りなんて、いらないでしょ？」

モワノーは悪戯つ子の様な笑みを浮かべて、ウインクをした。

「最高だぜ！モワノー！さあ、次は僕の番だ！」

カルは興奮しながら、よく響く声で呪文を唱えた。カルのローブも元に戻る。

「私は呪文を掛けられていないけど、まあ、欲しくてやった訳じゃないから……。いない！」

エレンは拒絶の言葉で、軽くポンツと音をならして、ローブを元のローブに戻した。フアブリスは少し苦勞して、二回目の呪文で元のローブに戻した。

じっと見ていたタラは、彼らの優しさに嬉しくて涙を浮かべていた。

「貴方達は本当の友達だわ。有り難う。とにかく私は魔術を掛けることは駄目なのよ。だって、お祖母ちゃんの命を危険にさらすことだもの」

「何で、タラが魔法を使うと、お祖母ちゃんの命が危ないの？」

「それは、この前に言ったでしょ。『血の約束』 っつて」

「ああ、あの時の話か。でもあれ、条件があるからそう簡単には死なないよ」

「…… ちょっと待って、この事は、私達以外で知っている人はいるの？」

「シエム先生は知っているわよ」

「そう……。だとしたら、他の人達には伝わっているのかは分からないけど。もし、伝わっていたら、タラのお祖母さんが死ぬかもしれない事を分かっている、やらせたの?」
必死に頭を働かせながら話を聴いていたモワノーは、この考えに至って恐怖のあまりに顔を青ざめた。

「……あ……。本当に、あの野郎!最低な奴だな!やつぱり何か企んでいるに違いない!」
ぼつけとしていたファブリスは、話を理解すると堪忍袋が切れて激昂をする。

「こういう事って他の人達に伝えるもんなの?」

タラは考えながら、白い髪の毛をカシカシと噛む。

「解らないわ。けど、誰かの命に関わる事ならば、伝わっていても可笑しくないわ」

「じゃあ何で、タラは魔法を使ったの?」

エレンの疑問に、カル達はタラに咎める様な目線を投げ掛けた。タラはその視線を受け身を縮めさせた。

「それは……。私だって、使う気は無かったわ。只、授業を見ていて、私のローブに馬が付いていれば綺麗だろうなと思っただけよ。後、面白そうと思っただけよ」

「へえー。タラもエレンと同じく呪文を唱えずに出来るんだ。それは凄いや!」

「でも、そうだとしたら、タラはこれから魔術を使う授業に参加しない方が良いじゃないの」

「そうね。シエム先生にでも言つて、これからは見学にさせてもらうわ。と言うか、シエム先生はこの事を知っているのに、何故私に授業に参加させたのかしら？」

「だって、今日は元々休みだったのに！あの性悪アンジェリカが、授業をやるうと言いだしたんだ！勝手にやるぶんにはあつそだけど、僕達も巻き込むな！それにあいつらも、エレンが変な事を言う度に嫌みたらしく嗤つていたし！」

「そうそう！本当にあの人達性格悪い！何で一々笑われないといけないの!？」

「それは、嫉妬よエレン。あの人達なんて貴女の魔力の八分の一以下よ。だから少しでも、有利になればマウントしたくなるのよ」

「もしかしたら、アンジェリカもドラゴツシユと一緒にグルだったりして」

モワノーがエレンを宥めていると、ファブリスが冗談げに言う。

「まさか！アンジェリカは性悪だけど、それと同じくらいに臆病なんだぞ。でき来ないって」

「まあ、冗談だよ」

ファブリスがおどけると、夕食を告げる銅鑼の音が鳴り響く。

「お腹空いたし、行こうか！」

待ちに待った夕食で、カルの機嫌がすっかり直った。

「そうね。けど、ちよつと待つて」

タラは呼び止めると、口をきゅつとして神妙な顔つきになる。

「?どうしたの?」

エレン達は首をかしげた。

「まだ大事な話があるの。けど、これからご飯だし…。だから、また今度話を聴いてほしいの良いい?」

「何だそんな事か。良いよ。友達だもん。幾らだつて聴くよ!」

カルの何時ものおちやらけた表情ではなく、真剣な表情で返した。エレン達も真剣な表情だけど、優しく母親の様な笑顔を浮かべた。言葉を言わなくても、カルと同じ意見だ。

そんな姿を見て、タラはまた、目に涙を浮かべてはにかんで笑った。

「うん、有り難う」

「じゃあ、行こう」

フアブリスの言葉で食堂に向かうのであった。

タラがまだ話していない別世界【オートルモンド】に行くまでの間に起きた出来事が、彼らまでも襲いかかるとは露知らずにいたのであった。

ご飯を食べ終えたエレンは、疲れたのはさつきと寝る事にした。

朝食ギリギリまで寝ているつもりだったのだが、あまりにも騒々しい物音だったので、仕方なく起きた。ここまで五月蠅くされると、流星に気になる。

エレンはいつも着ている服に着替えて、その上にローブを羽織り部屋を出る。

物音のする方向に向かうとタラ、カル、ファブリス、モワノーが先に着いていた。

彼らの視線の先には、十数個以上の檻が置かれている。檻の中には奇妙な生き物が入っていた。どうやらの話せるらしく何か喚いている。

「あれは何?」

「あれはアルピーだ!」

カルはかなり驚いた。

「アルピーって何?」

「アルピーとは、上半身が人間の女性で、下半身が鷲の生き物だ。あの爪に消えつけろ! あの爪には毒を持っていて、未だに解毒剤が出来ていないんだ。こいつらの毒は強力で、もし引つ掛かられたら百パー死ぬ」

「うええ」

思わず近付こうと思ったファブリスは、勢いよく後退りをした。

「しかし、こいつらは何で喚いているんだ？」

「ああ、これ？これが、こいつらにとつてのコミュニケーション法なのさ。僕達みたいに普通に話す事は出来ないんだ。話したかったら、こいつらみたいに話さげや駄目だ。今やるから、ちよつと見てて」

カルは悪戯つ子の様に笑うと、前に出て檻の前に着くと喚いた。

「おい！頭の可笑しいカラスの糞みたいな、ペしゃんこの虫けら野郎と牛の糞野郎の娘達！」

アルピーは直ぐに静かになった。その内の一匹が悪臭を放つ羽を落としながら、檻の扉の前まで跳ねてきた。アルピーは鳥の様に頭をかしげて、グルグルと鳴き始める。

「グルル、あんた達の夕食がやって来たよ！ほら、このキャンキャン鳴いている小さな負け犬を見てご覧よ！」

近づいて来たのにも関わらず、カルは落ち着いている。そして、からかうようにアルピーの前で、身を屈めた。

「ハゲちよろで老いばれ鳥のアルピーさん、お尻も汚いねえ。その足で食べるのかい？お前達の臭いを嗅いだら、ジャツカルさえも胸糞を悪くしそうだ！」

「まあまあだね」

別のアルピーが跳ねて来て、カルの罵りスタイルを勝手に評価し始めた。

「でも罵りの言葉には、もつと早く言うんだ。そこを直すともつと良くなる」
続いて聞こえてきた悪態に、エレンはもう嫌になつて耳を手で塞いで聞こえない位置まで離れた。

だからこそ、エレンは直ぐに気が付かなかつた。

檻を乱暴に揺らす音、扉が開く音、誰かの悲鳴が重なり、魔法が発動した様な不思議な音が聞こえてくる。

エレンが騒ぎに気付いて様子を見に来た時には、タラが倒れていた。その身体をよく見るとアルピーの猛毒の爪で引っ掛かれていたのだつた。

第9話 煉獄へ

「タラー！」

エレンはタラのところに駆け寄り、思わずタラを揺すろうとするとタラは悲鳴を上げた。

どうしていいか解らず、エレンがおろおろしていると、一部始終を見ていたキマイラが、タラの側に駆け寄り、カルとファブリスの助けを借りて、気を失っているタラを背中に担いで、何処かに行ってしまった。

エレン、カル、ファブリス、モワノーが着いて行こうとしたが……。

「そこにいる全員、動くな！」

怒鳴り声を上げたのは、制服を着こなしたエルフだった。エレンや周りの人達はその声で、まるで金縛りのように固まって一歩たりとも動けなかった。

「これから、ここににいる全員。事情聴取をする。大人しく着いてこい！」

そう言うと、制服を着こなしたエルフの集団が二手に別れた。一つは、現場に残り写真を撮ったり、魔術で現場を調べたりする現場班。もう一つは、エレン達を別の部屋に連れて行って、話を聴く取り調べ班。

エレン達は一つの列を作らされ、前と後ろにエルフが立ち、犯人の様に別の部屋に連れて行かれたのであった。

「私の名はダンディリユス・マンジルだ。で、君の名前は、エレン・ふわふわ頭・オーレウスで合っているかね？」

「はい、合っています」

エレン達が連れてこられた場所は、机と椅子しかない狭い部屋だった。

そこに一人ずつ呼ばれて、話を聴かれていく。今はエレンの番で、他のエルフの制服より少し豪華な制服を着た陰気なエルフに、見下ろされている。見ているよりもほぼ睨み付けているに近い。

エレンは何も悪い事をしていないけど、ダンディリユスの威圧感から俯いてしまう。

「あの事件が起きた時、君はどこで何をしていたかね？」

「私は……あの鳥の声が聞きたくなくて、少し離れた位置で様子を見ていました」

「……ほお。では何で、アルピーの声を聞きたくなくなつた？」

「……あの罵倒が耐えられなくて」

「そう。では、何で檻の所に来ていたんだ？」

「朝起きたら、五月蠅くて眠れなくなつて、どうしたのかなつと気になつたから」

「君が檻の所に行く時には誰かの一緒にいたのか？一人着いた時には、檻の前にはどれぐらい人がいたんだ？」

「… 檻の前まで行く時は一人でした。… 私が着いていた頃にはカル、モワノー、ファブリスと他にも誰か分からないけど、数名いました」

「… つまり、君の事を証明できる人はいないと…」

「はあああ!?!それって！私が！犯人?!私はタラの友達だよ！友達を傷つけたりはしないよ!!!」

エレンは、犯人扱いに耐えられなくなつて机をドンツ！と叩く。

だが、タンディリュスはそれ以上の音で机を叩き、部屋全体を響かせる怒鳴り声を上げた。

「ああ、そうだ！お前だつて容疑者の一人だ！この事件は、高等魔術師や力のある魔術師には誰だつて出来ることだ。そしてお前の事は、周りからよく聴いている。力ある魔術師だつていうことを！それにあの事件の時、周りから離れて見ていたのだろう。つまり、お前の無実の証明を出来る人が、誰一人もいないんだ！」

「ふざけないで！私はぜっ！絶対友達を傷つけない!!」

友達を傷つけたりする人物として、疑われるのが悲しかった。でも、それ以上に怒りが噴火した火山の如く怒りが込み上げてくる。

「それに！そんなに疑わしかったから！あの時の様に！あの変な植物を連れて来れば良いじゃん！」

「『真実を語る者』か。あれは、確認用だ。それに覚えていないと意味が無いんだ。お前の様に忘れていて、幻想郷にたどり着けないように」

「後、友達だからと言う言い分けは全く通用しない。友達が友達を殺したり、親が子を殺したりする。お前以上に怒り、泣き崩れる奴もいるがそいつが犯人だった事はよくある」

エレンに対して、冷ややかに落ち着いた声で反論する。

「でも！それでも、私は！」

「言い分けは聴かんよ。それにもう、時間だ。証拠が無い限りお前を捕まえる事はない。だが、これ以上五月蠅くすると、公務執行妨害として罪が増えるだけだ。さっさと出て行きなさい」

エレンは手できゅつと拳を作ると、黙って部屋を出て行った。

エレンが部屋を出るとカル、モワノー、ファブリスが心配そうに待っていた。

エレンは彼らを見付けると、モワノーに抱きついた。悔しさのあまりに涙を流す。

「うう……。うう……。ヒック……。酷いよ！私が力を持っているからって！友達を傷つける最低な人扱いだよ……。何で……。何で……」

始めは、軽く空を飛んだ事から

次は頭の中をのぞかれた

力を見せろと言われたから、見せたら怖がれ

最後は犯人扱いされた。

エレンは力をつけたのは、ただただ懂れたから。悪いことに使う分けじゃないのにと嘆き憤る。

それよりも、悔しいのは、この中で一番力を持っているのに何も出来ない事だ。

あの鳥の毒は、魔法じゃ効かないらしい。効くならば解毒剤なんて、いらぬ筈だ。

けど、その解毒剤の存在すらしていない。

エレンが魔法薬を今から作るとしても、効くかどうかは分からないし、出来たとしても間に合わない可能性の方が高い。

エレンはモワノーのローブを掴みながらボロボロと泣き崩れる。

そんなエレンをモワノーは頭を優しく撫でながら話す。

「大丈夫よ。エレン。私達は、貴女の事をちっとも犯人だと思っていないわ」

モワノーは穏やかな声でもらわずに言う。彼女がどうもならないっていう事は怒っているのだ。それでも、エレンを慰める為に感情を抑えている。

「全く！エレンがそんな事をする分けないだろうに！」

カルは怒りで叫んだ。

「カル。気持ちには分かるが止める。また、取り調べを受けて、傷つくだけだ」

ファブリスは落ち着いてカルを止めていたが、その声には強い怒りが含んでいた。

「……何で！何で！力があるのに助けられなかった!!今も！何も！出来ないの!?!」

モワノーのローブを強く握り締める。

「そんなことを言ったら、僕だってなんにもできなかったぞ」

カルが嘆いた。

「僕もそうさ」

「わ、わ、私もなにもできないわ」

フアブリスとモワノーもカルに同意する。モワノーからは怒りが消え、普段の吃音に戻った。

「取り調べ終わったら、タラのところに行こう。なにも出来ないけど、少なくとも気持ち的には力になれると想うからさ」

フアブリスは、気分を変えるように手をパンパンと叩いて仲間達に呼び掛ける。

「おお、そうだなフアブリス！」

「そ、そ、そうね。行きましょう」

「うん、行こう！」

悲しみから一転して気を取り直す一同。

「……ところで……タラの家族……お祖母ちゃん……だっけ？こういう事は伝えた方が良いんじゃないの？……なにかあった時の為に」

最悪な結末を考えてしまったエレンは、自分自身に嫌悪感を感じてたどたどしく話す。モワノー、カル、フアブリスはきよんととしていたが、エレンの考えに頭が追いつくと一瞬暗い顔をしたが、直ぐに気持ちを切り替えて賛同した。

「……ああ！そうだね！」

「で、でも、わ、私連絡先とかし、知らないわ」

「僕の父さんに経由で伝えてもらうよ。タラの家の番号なら知っているけど、家にいるか判らないし。父さんなら、直接繋がる番号を知っているかも知れないしね。それに僕もタラの様子を見たいし」

「よし、まとまったところで行くか」

「じゃあ、君達は先に行つてて。僕は色々と用事を終わらせてから行くよ」

「わ、分かったわ。ま、ま、任せたわよ」

「うん、よろしくね」

全員分の取り調べが終わった途端、エレン、カル、モワノーはファブリスと別れて、急いでタラがいる場所を目指した。

タラがいた場所は応急医務室だった。

タラはベット上で寝ていた。顔は真っ赤に染まっていた。絶え間なく汗が出ており、時々ウツ・ウツ・と魘（うな）されていた。

「…………… タラ」

エレンは思わず呟いてしまう。きゅつと手で拳を作るとモワノーが優しく腕を掴んだ。

「モワノー」

エレンは泣きそう目でモワノーを見つめた。モワノーは何も言わず、小さく首を降るとタラの方を見る。

「だ、大丈夫よ。し、信じましょう。き、き、祈禱師先生の腕を、タ、タラの体調をし、信じましょう」

「…… うん」

「はいはい、お二人さん椅子だよ。椅子。とりあえず、何か進展があるまで座っていい」

カルが魔術で椅子を作り出した。カルは雰囲気を変える為、必要以上に明るく喋った。

「ありがとう。カル」

「カ、カル、あ、ありがとう」

エレンとモワノーはお礼を言うと、カルに続いて座り待ち続けたのであった。

五十分ぐらい経った後だろうか、ファブリスが皆の分のご飯を持ってやって来たの

だ。

「遅くなつてごめん。それと、お父さんに頼んで家に連絡したんだけど……繋がらなかつた。で、家に行つたんだけど、誰も居なかつた。お父さんも直接繋がる番号を知らなかつたんだ。でも、お父さんが通りかかつた時に連絡するつて約束してくれたから、後は待とう」

ファブリスは仲間たちに飲み物とパンやサンドイッチといった手軽に食べれる物を配りながら説明をする。

「サンキュー、ファブリス。そつかあ……居なかつたのかあ……。何で居なかつたんだらう?」

この中で一番多く貰つたカルが、早速開けながら言う。

「こちら! 君達! ……ここでの飲食は禁止だ! 食べるなら外に行きなさい!」

カル、エレン、ファブリス、モワノーは祈禱師先生の助手に周りに迷惑かけない程度の音量で怒られた。

「すみません……。アハハ、怒られたちやつた」

カルは謝つて祈禱師先生の助手が去つた後、舌をペロツと出して惚けた。思わずエレン、モワノー、ファブリスはクスクスと笑つた。ファブリスは笑いながら言う。

「全く、カルのせいで怒られたじゃん」

「そうだよ。カルって食いしん坊だもんね」

「そこまで、笑わなくて良いじゃん」

ムスツとするカルを笑う三人。カルは不貞腐れながら立ち上がり、どこかに行こうとする。

「カル、どこ行くの？」

「ここじゃあ、食べちゃいけないからね。外に行くよ」

「カル」

そんなカルを引き止めるモワノー。

「なんだい？」

カルは不思議そうにモワノーを見る。

「ありがとう」

モワノーはどもらずに笑顔でお礼を述べた。

「…………… 何の事か、さっぱり分からないや」

カルは照れ臭そうに頭をかくと、モワノーの顔を見ずに部屋から出ていくのであった。

カルが食べ終えて部屋に戻ると、その間に話し合つて順番で一人ずつ食べる事になつていたので。

朝が過ぎ、昼が過ぎ、夜になつてもタラは目覚めなかつた。あれから話している内にシエム先生なら知っているのではないかと気づいたが、今は治療にあたっている為結局のところ無理だった。

そのまま彼らは、応急医務室で泊まる為の許可を貰い、一晚過ごしたのであった。

翌朝

タラは目を覚ましたが、顔色も変わつておらず、水をガブガブと飲んでいて。水を飲むか寝るかで、とても話せる状態ではなかつた。

しばらく経つとタラが何やら口をパクパクして、懸命に何かを伝えようだ。

「タラ。どうしたの？」

エレンが心配そうに聞く。タラが壁の方へと顔を向けるとぎよつとずるしていた。

「？」

エレン、モワノー、カル、ファブリスとこの場にいる全員が壁の方へと、？と首をか
しげながら向いた。

すると、そこには……………。

灰色のローブにミラーグラスで顔を隠した人物が、応急医務室の白い壁に写ってい
た。

「誰?!」

エレンが皆の気持ちを代弁するかのように体全体で驚いた。

「おお！タラ、私のメッセージを受け取ってくれたんだな」

その人物は亡霊の姿へと変わり、この状況になったのが、よっぽど嬉しかったのか笑
いだした。仮面の色も青く光った。

エレンがもう一度、聞き出す前に怒り狂ったシエムは亡霊に向かつて呪いを掛けた。が、一瞬ふらつとしただけで、直ぐに笑いだした。

「無駄だ！ 私には全く効果がない。だが、お前に一つ良いことを教えてやろう。私を追い返すと後悔するぞ。この子を死なせたたくないならな！ 私は解毒剤を持つている。治してやつても良いぞ。ただし、条件がある。この子が元気になったら、こちらに引き渡せ」

「そんな事は絶対にせん!!」

「何！ 言ってるの!! タラの命が懸かっているのに！ 勝手に！ 決めないでよ!! 救ける方法を考えてよ!!」

自分勝手なシエムに怒りを感じたエレンは、シエムの怒鳴り声を遮った。シエムはエレンを無視して続けようとしたが、カルが恐る恐る反論した。

「ぼ、僕もエレンと同じ気持ちです。この事はタラが決める事じゃないですか？ だってタラの命なんだから」

シエムは二人のことを睨み付けたが、二人は一步も引かなかつた。

シエムは仕方なさそうに溜め息をつくど、タラに優しく声をかけた。

「エレンとカルの言う通りかもしれないな。タラ、お前が決める事じゃ」

「死、死にたくない……」

タラは意識が朦朧としている中で何とか呟く。

「だが、わしらは解毒剤を持っておらんのだ。お前が生きていたいなら、マジスターに引き渡さなければならんのだ」

「せ、せ、先生が決めて……」

タラはそう呟くと完全に意識を失った。シエムは項垂れながら言う。

「分かった。マジスター、お前の勝ちだ。この子の命を遊びたくない。どうすれば良いのか、わしに言ってくれ」

「お前が、私に従うとは、何と愉快だ！ 一時間後にタラを扉の間に連れてこい。助手の一人にタラを引き取りに行かせるから。最後に言っておくが、解毒剤を手に入れる為に助手を人質にしようなどと考えるなよ。そんな事したら、解毒剤を即座に捨ててしまうからな。そうすればタラは死ぬ。分かったか？」

シエムが了承の返事をする、マジスターはもう一度皆を見下す様な笑みを浮かべて、消えていった。

シエムは辺りをキョロキョロとし、マジスターの亡霊がいなかどうかを確認すると若い魔術師達と向き合った。

「今度ばかりは、他に道はない。禁じられた魔術を使わなければならないのだろう！」

シエムの宣言にカル、モワノー、祈禱師とその助手が青ざめた。

「禁じられた魔術って何？」

エレンとファブリスは同時に質問をする。

「煉獄に行く為の魔術の事じゃ。そこに行つて、悪魔の助けを借りねばならんのじゃ。

お前達には危険すぎるから、わしと一緒に行かない方が良い」

「何を言っているんですか！この子は私の患者です。一晩中、どうにか死なせないよう

にと、頑張つたのです！今ここで見放す分けにはいきません」

祈禱師がそう言うのと助手も頷いた。

「いや。お主らは、ここに居てくれ。何かあつた時にお主らが、無事ではないと治療が出来る。だから、ここで待つていてくれ」

シエムにそう言われて、祈禱師とその助手は渋谷と受け入れた。

「僕達だつて、行くよ！」

カルが断言をする。エレンもモワノーもファブリスも真剣な表情で頷いた。

シエムは彼らの顔を一人ずつじっくりと見つめる。シエムは溜め息をつくど、真剣な表情で若い魔術師達と向き合う。

「……お主らには危険すぎる。無理じゃ」

エレン達は反論しようとした。特にエレンは、何も出来なくてかなり齒痒かった。しかも、皆、辛いのにエレンの事を気にかけてくれたのだ。ここでやらなきや何時やるんだという想いだった。

シエムは彼らが一言も喋らない内に言う。

「だが、君達の力は必要だ。今から、わしの指示従ってもらおう。……それと、エレン。お主の力、借りさせてもらうぞ。お主と一緒に煉獄に行くぞ。……他の者は、悪いが、そこまでじゃ」

カル、ファブリス、モワノーは何か言いたそうだが、シエムの有無を言わせないひと睨みで言えなくなってしまうたのであった。

エレンが急いで部屋に戻り、ソクラテスをベットのの上に置くと、使えそうな魔法薬をできるだけポケットの中に詰め込んだ。

そして、応急医務室に急いで戻ったのであった。

エレンが戻った時には、皆の頼まれ事が終わっていた。

カルは可笑しそうに笑いながら、灰色の大きな卵を抱えていた。モワノーは本を抱き抱えて来た。何故かその髪はちよびつと焦げていた。ファブリスと祈禱師の助手は瓶の中で動いている植物を持ってきた。

「皆の者有り難うじゃ。だが、君達はここまでじゃ」

「本当に僕達の力は必要ないのですか？」

カルは念押ししてシエムに聞く。ファブリスとモワノーもシエムの顔を見つめる。

「…………… 悪いが、必要ないのじゃ…………… さあ、エレンおいで…………… 君達は部屋の外へと出るのじゃ」

シエムは心底残念そうに言う。暫くの間、シエムとカル達は見つめ合っていたが、カル達の方が折れて部屋から出ていく。

「私に任せて」

エレンは小さな声だけでも力強く呟いた。

「……任せたぞ」

カルは右手で握り拳を作るとエレンの顔へと近づけた。少しビクツとしたエレンだが、エレンも真似して拳を作ってカルの顔に近づけた。カルとエレンは、拳と拳を軽くぶつけた。

ぶつけるとカルは部屋から出ていった。ファブリスとモワノーも真似をする。

「き、き、気を付けてね」

「任せたよ」

それぞれ、言葉をかけてから部屋から出ていく。

「エレン。準備が終わるまでにタラの身体をどこだつて良いから掴みなさい」

「分かった」

エレンは返事をするるとタラの右手を握った。

祈祷師が準備を終えて部屋から出ていく。シエムは本を手にとるとタラの周りに置いてあったカップに、あの動いていた植物を入れる。

カップの周りから赤い煙が濛々と立ち上り、円を作った。

シエムは呪文を唱え始めた。

「禁書を通じて嘆願する！悪魔の煉獄を通ろうとする、我ら旅行者達を守りたまえ。我らの心は純粹で恐れを知らない！」

シエムが唱えた途端、耳をつんざくような雷鳴が轟き、部屋中何も見えなくなった。

第10話 煉獄

エレン達が目に映ったものは、もう、応急医務室ではなかった。

そこは灰色の広い原っぱだった。空は青ではなく退廃的な紫色だった。他は何にも無い寂しい場所だった。エレン達はその原っぱの真ん中にいたのだ。

「……は？」

「煉獄じゃ。悪魔の支配者が住むサークル七じゃ」

エレンは何気なく辺りを見渡す。その時、気付いたのであった。エレンはタラの右手を掴んでいたはずなのに、今、エレンの手の中には何もなかった。

「あれ？どういうこと!？」

エレンは手を見るのと同時に自分の体を見た。

その体は幽霊の様に透明になっていた。タラやシエムも同じ様になっていた。シエムはこの結果に困惑し嘆いた。

「ちくしょう。身体もついてくると思っていたのだが、魂しか通り抜ける事は出来なかったようじゃ。ここで魂に起きる事は全て、彼方の世界の身体も起きてしまうのじゃ。だから、気をつけるのじゃ。禁書に依れば、わしらは直ぐに、煉獄の支配者の元

に辿り着く事になっておる。その城が数分後にはわしらの手の届く所にやってくる筈じゃ」

「城がやってくるの!?!」

エレンは思わず驚いた。城が自ら移動するとは到底思い付かないからだ。

「ああ、そうじゃ」

シエムは何でもないように言う。そんなやり取りをしている中で、タラが突然目を覚ました。でも、タラは今まで殆ど眠っていたので、状況が解らなず首を一生懸命に振って辺りを見渡していた。

「あら……ここはどこ?……もう!大丈夫だわ!!シエム先生!私はもう治ったの!?!」

タラは何と先程までの熱や痛みを感じなかった。それで治ったと思ったタラは喜びのあまり、辺りを走ってはしやぎまわった。

「ほんとなの!?!タラ!」

「ええ、そうよ……エレン。今まで、心配かけてごめんなさい。でも、もう大丈夫よ!」

「ほんと!良かったよ!!……それに!謝らなくていいよタラ」

「……うん、ありがとう」

タラとエレンは向かい合い抱き合うと喜びの涙を流した。二人は手を取り合うと円となつてはしやぎまわる。そんな二人を物凄く気まずそうに見るシエムは、声をつまな

らせながらもやつとのことで言う。

「……………残念ながらそうじゃない。タラ、今のわしらは、魂だけがここに来てい
るから、苦しみを感じていないのだ……………それとエレン。お主はちゃんと話を聞いて
いなかったのか？煉獄に行くだけで治るなら、こんなに仰々しくはならんよ。気軽に
二人で行つてくるさ」

そう言われたタラとエレンはまた泣きそうになる。今度は絶望的な意味で。

タラはまだ自分が命の危機に脅かされている恐怖で、エレンは上げて落とされた
シヨックで。

泣いている二人を見ることを出来なかったシエムは速く城よ来い！と念じながら
待つていた。

シエムの念が届いたのか、悪魔の城は直ぐにこちらに来たのであった。

エレンとタラは驚きのあまり泣くことを止めた。彼女らにとつては自分達が行く
ではなく、城からこちらに向かつて来たのだ。エレンとタラは口をぽかーんと開けたま
ま城を見つめた。

悪魔の城は四本の足で支えられた巨大な黒い石の城だ。

シエムは二人を現実に戻す為に手をパンパンと叩く。その音に二人はハツとして意
識が現実に戻った。

シエムは二人の状態を確認すると話を始めた。

「悪魔の支配者の城がやって来たのじやだが、相手の挑発に乗らないように気をつけるのじや」

「はい！」

「うん！」

タラとエレンがしつかりと返事をする。

シエムは大きく頷き飛び上がる。ある程度の高さまで飛ぶと着いてくるように手で合図を出した。

タラとエレンはその合図に従い飛び上がった。

この城に興味を持ったエレンとタラは近づいて見る。すると、面白い事にドアや窓の家にとって重要な役割を全く理解しておらず、ドアが壁の高い所にあたり、逆に窓が低い所にあたりとしていた。屋根なんかは壁の側面についていた。

タラはこの城を作った人に、もう一回家をちゃんと見たら？と思っていた。エレンも変な城と感じていた。

タラは自分の命に関わっているのに飛ぶことが楽しく感じてしまっていた。エレンも髪の毛が静電気でパチパチしないことに喜びを感じていた。

壁を幽霊のように通り抜けて中に入った。

中に入ると、シエム達は現実離れた光景に頭が着いていけず激しい目眩に襲われた。そこでは、赤色、黄色、青色、白色、黒色がぶつかり合いをして恐ろしい戦いを繰り広げられていたからだ。

派手な黄色は左側の壁と床の一部を陣取り、時折ぶつかってくる明るい赤色を襲い掛かろうとしている。どぎつい青色は右側の壁を陣取り、怖がって後退りしている臆病な白色に攻撃をしていた。天井を陣取った黒色が他の色に襲われて呑み込まれそうになるものも、触手の様なものをだして牽制していた。

エレン達は戦っている色達をよく見てみてみた。すると、漂っている窓の周りだけは汚れていなかった。窓からの景色はすっかり“色が抜け落ちた”様な灰色の草原が見える。どうやら、色達はこの場所がかなり気になるらしい。

その事に気がつけても、どうしてそうなったのかはエレンとタラには分からなかった。ただ、シエムだけは目を細めてじっと窓の方を見つめる。

「……何で、色が戦っているの？色って、動くものだったの？」

エレンはタラの気持ちを代弁するかのように質問をする。だが、タラは他にも気になる事があったようだ。

「……ねえ、私の身体、少し戻ってきてない？」

「……ム!!呪われた悪魔めが!!あの色達を閉じ込めたようにわしらにも閉じ込める呪

文を唱えたのだ。しかも、わしらは完全な魂だけの存在だけではないから色達に触れる事が出来てしまう。色達はあの真ん中にある魔法の窓から外に出るために戦っているのじゃ。それ故に色は、外に出るためにわしらに張り付こうとしている」

シエムだけはこの現状に気づくことが出来た。更に質問をしてきたタラを見てシエムはため息をついた。

「壁に触るな、罨に嵌まるのではないぞ。急がないと何も通れなくなるぞ。わしの後に着いてくるのじゃ」

色達は言葉が理解できるらしく、シエムの話を聞いた途端、じっと動かずに辺りを伺いはじめた。

始めに動いたのは赤色だった。赤色は電光石火の速さで、シエムの足目掛けて飛んできた。シエムは寸でのとどこでかわすことが出来たが、天井から降りてきた黒色が、いつの間にか近づき、待ち伏せをしていた。シエムは後ろに飛び退いて避けた。

タラとエレンもシエムと追い付く為に色達の罨の中を全力で走り抜ける。

特にエレンの動きは見事だった。

迫り来る色達を紙一重に避ける。赤色が右肩を狙えば、わざと少し前に突き出して当たらないようにし、その間に左足が青色に狙われるのだが、膝を持ち上げ位置を変えて避ける。黄色と白色も狙われるが、走りながら飛ぶ体勢に変えて黄色と白色の間をスレ

スレに飛んでかわし、シエムの所にたどり着く。

それを見たタラも真似をしようと思ってしまう。それが間違いだった。だと言うのもこの回避方法は、常にギリギリで避けないといけない為、少しでも怖いと思えば失敗してしまうのだ。エレンは幻想郷での戦いで馴れているが、タラはまだ普通の少女。避けれる訳がなかった。それでも真似をしてしまったのは、シエムの所に急いで辿り着かないという思いからの焦りだった。

黄色に捕まったタラは左腕から徐々に侵食されていく。

「し、しまったわ!」

焦り出してももう遅い。シエムが捕まったタラを見て、赤色と白色に捕まってしまふ。エレンも青色、黒色に追いかけられ鬼ごっこ状態になってしまう。

エレンが逃げ回り、更に赤色、黄色、白色が追加されそうになった時、タラが何か思いついたのか甲高い声で叫ぶ。

「聞いて! エレン、シエム先生動かないで、色達と話をさせて!」

「えっ何で!」

納得いかないエレンは逃げ続ける。そんなエレンに説得を続けるタラ。

「色達を解放する方法を思いついたのよ!」

「でも! どうやって!」

「それは、エレンが止まってくれば、出来るわ！だから！お願い！止まって!!」

タラは全力で叫んだ。あまりにも必死に頼み込むので、エレンは渋々だが言うことを聞くことにした。エレンが動かなくなり、色達はそれを良いようにと着色していく。タラはエレンの動きを止めたことを確認すると、部屋中響き渡る声でもう一度叫ぶ。

「色達よ！貴方達を自由に解放してあげるわ！その代わり、私の話を聞いて！」

色達は話を聞かず動きは止まらない。タラはめげずに叫ぶ。

「聞いてちょうだい！私達は、悪魔の支配者に会わない限りは、この城を出ていけないの。だから、私達にとりついても無駄よ。でも、私の言うことを聞いてくれるのなら、ここから出られるわよ」

それでも色達の動きは止まらない。エレン、シエム、タラの体は絶え間なく汚されていく。タラは自分の出した案に後悔しかけた時、辺りを伺っていた赤色の動きが止まる。それを境に黄色、黒色、青色、白色の動きが止まり、辺りは静寂に包まれる。

タラはこの状態を逃さないようにと全身全霊の力を込めて叫ぶ。

「貴方達は一つになるのよ！そうしないと、出口を通ることは出来ずに、ずっとそうやっていなければならなくなるわ！色の明るい順に並んでみて！白、黄色、赤、青、黒の順よ。それから部屋の真ん中の窓の前まで行くのよ。ほら！」

最初は色達は動かず、躊躇いがちだったものも渋々従い始める。

色の渦にもたまにならずに、白、黄色、赤、青、黒の順で合体していく。

だが、直ぐには何も変化が起きなかった。

ただただ色が一つに固まっただけ。何も変わらないことに色達は不満になり、また暴れるのではないかと一行は不安に陥る。ところが――

鋭い風切り音ともに色達がクルクルと回り始める。五つの色は一つの虹となり、部屋中に輝きだす。そこからは新たな色が生まれだす。明るい緑、魅惑的なオレンジ色、甘いピンク。色達が回れば回る程虹は綺麗になっていく。中央の窓まで辿り着くと色達は大喜びで出ていく。そして、灰色の平原は、美しい色で埋めつくされていくのであった。

「タラ、エレン、大丈夫か？」

シエムは色達が出ていった後、直ぐに自分の肌の中に色が残っていないか確認をする。

「あれ？タラ、ネックレスつけていたの？」

エレンがタラの首元に指を指す。

シエムは振り返りタラは自分の首もとを見ると、タラの喉のくぼみには不思議な模様がいつの間にかできていた。しかも、それは美しいネックレスになっていた。金のフレームにルビー、サファイア、ダイヤモンド、黒檀が付いたネックレスだ。位置はちよ

うどタラがローブの襟を上げれば、隠すことができる場所だ。

「いや、私、ここに来てからネックレス何て付けていないわ」

タラは手を降つて否定する。

「それはここから解放してくれた色達からのお礼じゃ」

シエムが説明をする。

「えー！良いなあ！私にも欲しい！」

エレンは目をキラキラさせながらタラにねだる。

「私はいらぬわよ。トラヴィアに戻つても、また肌がこんな風になつていたら困るんだけど……」

当の本人は喜んでいなかった。

「先程言つたように、ここで起きたことは現実でも起きる。残念だな。ただ、タラ。その色は感謝の印だから害はない。もしお前がいつか色達を必要になつた際に、その名前を呼ぶだけで色達が戻つてきて助けてくれるのじゃ」

「えっ！ー！良いな！良いな！凄いいじゃん！私も欲しいー！」

エレンは更に目をキラキラさせてタラにもつとねだつた。

「それでも、私はあまり嬉しくないわ。そんなに欲しいならエレン。貴女にあげるわ」

いくらいつでも助けてくれるからつて、タラにはいらぬもので余計なお世話だつ

た。

理由は色の印がタトウーに見えるからだ。別世界「オートルモンド」ではタトウーが善いものか悪いものか、どちらの立ち位置かは知らないけど、地球では悪い印象を与えるからだ。そして、タラはいずれ地球に戻るのだ。そうなると、いくら隠せたところでもいつかは見つかるし、最悪の場合この印のせいで何かを諦めないといけない可能性もある。しかも、模様はネットクレス。何でわざわざタトウー入れたんだと？同じやつを買えばいいんじゃないのか？と余計に言われやすい。

そんなタラの気持ちを一ミリも察していないエレンは嬉しそうに注文をする。

「ほんと？ありがとう！えつーと…。金のフレームにルビーはハートの形をしたネットクレスが欲しい！」

「そう、分かったわ…。ところで、全部の色は引き取ってくれないの？」

タラは一部の色しか持つていけないことに心底がっかりする。その様子にエレンは首をかしげる。エレンはタラを何とか元氣付けようと必死に数秒間考ええる。

「… そうだ!!ねえ、タラ。だったら、お互い同じものを持とうよ！」

「同じもの？ペアルックのこと？でも、何で急にペアルックを言い出すの？」

エレンはペアルックが何なのかは分からないが、タラが興味を示してくれたのでそのまま話をする。

「そうそう！それだよ！それ！私と同じネックレスにしようよ！私が金とルビーのネックレスなら、タラは黒と白を混ぜて灰色のシルバーのフレイムに、サファイアをハートの形にしてお揃いにしようよ！」

「……そうね……。それなら……。いいわ。では……。色達よ！私達の望むものになりなさい！エレンの喉に黄色と赤でハートのネックレスを彩りなさい！私の喉に黒と白で灰色になり、青でハートのネックレスを彩りなさい！」

タラがそう言うとき色達は喉の窪みから出て宙に浮かぶ。赤と黄色はエレンの元に行き、望み通りの姿に変える。タラのところに残った青、白、黒も変わっていく。黒と白は混ざって灰色になり、青はハートの形になる。

「……！！模様が付いた！タラ！ほんとにありがとう！！」

色はタラの言われた通りに模様をつけた。エレンは模様を確認すると、エレンは嬉しさのあまり満面の笑顔でタラに抱きつく。タラはそんなエレンの姿を見てまあ、良いかと色達の印を受け入れる。タラの険しかった表情がどこか緩んだ優しい表情となる。

「ゴホン」

シエムは咳払いをする。その音でほのぼのとした雰囲気から現実へと戻される。

「お主達。いい加減にしなさい。時間は無いのじゃよ。今でさえ、実体ができてきているのに、もつと実体ができてしまったなら、もう壁を通り抜けることができな。それと、

悪魔の支配者に色達を逃がしたことをばらすのではないぞ。ほれ、気づかれる前にさつさと立ち去るぞ！」

シエムはそう言つてエレン達の返事を聞かず、先に壁を通り抜ける。エレンとタラは急いで後を着いていく。

壁を通り抜けたさきは、大きな部屋だった。

悪魔の王の姿は何と黒いドラゴンだった。ドラゴンの周りには普通の生物ではありえない形、色をしているおびただしい数の悪魔がいた。

どれもこれも小刻みに体を揺すり、涎をたらし、何かを罵り、そこらじゅうに唾を吐き、その音はとても五月蠅く、エレンとタラに物凄い不快感を与える。

シエムは喧騒とエレン達の様子を無視して、悪魔の支配者にお辞儀をして話し掛ける。

「御会いできて光栄です。悪魔の支配者殿。ドラゴンの姿をなさるとは、ご自分の本来の姿はお気に召さないのでですか？」

支配者が雷鳴のような叫び声で返事をする。それだけで辺り一体の悪魔達の喧騒が止まる。

「ふん。私は叫び声が大嫌いだな、お前の若い仲間達を怖がると五月蠅いから、配慮した

わけだ。光栄に思えたまえ」

エレンは急いで口を塞ぐ。「じゃあ！さつきまでの騒動は別に良いの？」と余計なことを言ってしまうそうだからだ。

「ほら見ろ、その金髪の小娘が、怖がって口を塞いでいるのではないか」

悪魔の支配者はケタケタと嗤う。シエムはエレンを一睨みすると悪魔の支配者と向かい合う。

「いえ、彼女は別です。他の者はちゃんと躡られております、悪魔の支配者殿。怖がってなどおりません」

今度はタラが怖い顔でシエムを睨み付けた。タラは表だつて行動をしていないが、本当は怖くて仕方なかった。そんな気持ちを無下にするシエムに心底タラは怒りを覚えた。

シエムと話をしていた悪魔の支配者が突然姿を消す。エレンとタラがびっくりしていると、悪魔の支配者が姿を現す。何故少しの間消えたのか、この後それを嫌でも知ることになる。

それは悪魔の本来の姿は黒いドラゴンではなく、何とも形容しがたい不気味な姿に変身……いや、戻ったからだ。

本来の悪魔の姿は、口できており長い紫色の舌がぶら下がっている。しかも点々と

黒いシミがついている。他にも大きな白い球もついているた。その球の周りには長い触手がたくさん生えていた。更に触手の先には目までついていた。目は赤、緑、青などのカラフルで、大きさも大小様々で揃っていなかった。

この形容しがたく、一目見れば何週間も夢でうなされる程の醜悪で恐ろしい姿に、エレンはもつと力をいれて口を塞ぎ、タラは何も行動をしていないが精神力で難とか耐える。

王座に座った悪魔の支配者は、怖がりながらもエレンとタラが恐怖を耐える姿を愉しそうに見つめる。悪魔の支配者は満足すると数百の目をシエムに向けて話し出した。

「それで、シエムナシャオヴィロダントラシヴユの為に何をしてやったら良いのかね？…しかし、まあ…随分と長い間、私に相応しい人間に会っていなかったから。嬉しいよ。とは言え、お前達の世界の時間の十二年前に会ったがな。確か…名はマジスターだったな。そいつは力を求めていたから、私はある条件と引き換えに喜んで力を与えてやった。結果は、そいつの望みを上回るものになってしまったがな！…プツ、ワアハハハハハ」

悪魔の支配者は何故か喜び嗤いだす。その様子にシエムの堪忍袋が切れて怒鳴り声をあげた。

「貴方のせいだ！そいつは気が狂い！わしらを脅かし！わしらの言うことを完全に聞か

なくなるぐらい強くなった！全ての世界を支配したいと考えるぐらいにな！奴の力への強い欲望がこの若い娘を傷つけたのじゃ!! 貴方がこの娘を傷つけたようなものじゃ！それに、わたしの取り決めを知っている筈じゃろ。ドラゴンと人間の魔術師の連合軍が悪魔に勝ったあの最後の大きな戦い以来、ドラゴンは悪魔を攻撃せず、悪魔もドラゴンに近付かないことになった筈じゃ」

この会話についていけないエレンはポーツとしていたが、タラは一語一句逃さないように話を聞いていた。

愉快に嗤っていた悪魔の支配者は、シエムの反論を聞くと眉をひそめて苦々しく語りだす。

「私達が選んだ事ではない。それに、お前達が、悪魔をこの煉獄に閉じ込めたのではないか。まるで下等生物を扱うようにな。お前達が呼び出さない限り、私達は戻ることさえできないのだ」

苦々しく話していた悪魔の支配者が何故かニヤニヤと嗤う。喉をならし悪意に満ちた口調へと変わる。

「ふん。その小娘が傷付いたと文句を言うが。それは貴様らの自業自得ではないのか？ 大体、力を与えたからと言うが、今みたく、貴様ら側が自由自在に此方に来れるのがいけないのではないか。それなのに、何故私の責任になるのかね？ しかもそいつは人間で

「はないか。取り決めでは人間には関係がない。そうじゃないかね？」

「わしらの国の人間に攻撃することは。わしらを攻撃することと同じじゃ。だから、償いを求めているのじゃ！」

何も言い返す事はできなかった。が、シエムは断固として譲らなかつた。

悪魔の支配者はせせら嗤う。

「そりゃ、はったりだ！そんなもんは全く通用しない。お前が詳しいように、私も協定の条項に詳しいのだ。我々、悪魔達はちゃんと取り決めを守っているさ。だがお前は、悪魔とドラゴンとの間で戦争を起こしたいようだね。お望みならばやってやろうじゃないか！」

悪魔の支配者の言葉に迫り込まれるシエム。それでも引き下がらず低姿勢で頼み込む。

「いや、そんな事は望んでおらん。だからいい貴方に、この娘を無料で治して頂けないかと頼んでいるのじゃ」

悪魔の支配者は小馬鹿にし、ふんと鼻を鳴らす。

「無料でだど？馬鹿を言うのではない、この老いぼれトカゲが。私はこれまで一度だって無料で何かをしてやったことなどはない。その小娘を治してやったら、それ相応の見返りを貰わないとな」

シエムがその言葉を聞いて、待つてました言わんばかりのスピードで、カルが盗んできたアルピーの卵を取り出す。

「わしはアルピーの新鮮な卵を持つておる。何なら直ぐに差し上げてもよい。アルピーの解毒剤一瓶に対しては、中々良い取り引きだと思うがな」

悪魔の支配者は可笑しそうに嗤い出す。

「はあ？アルピーの卵だと？私を馬鹿にしているのか？そんな卵など全く必要ないわ。…… そうだな、どうせなら、魔法のメダル”エスカリドス”はどうかね？一世紀前にお前が取り戻したのを知っているぞ。それなら私にも使い道がある」

シエムは悪魔の提案に苦い顔をする。その表情を見たエレンとタラは、そのメダルがとても大事な物だと察する。

「…… よし、分かった。それでは、わしのエスカリドスと引き換えに、解毒剤一瓶だな」
シエムはかなり渋々だが取り引きを了承する。

悪魔の支配者はシエムを注意深くじつと見ていたが、自分の目を一つ舐めると、ゲラゲラと嗤い出し、長い紫色の舌を出して挑発をする。

「ああ、残念だ！」

その声はとても嬉しそうだ。が、急に溜め息をつく。

「もう少しでお前のエスカリドスを手に入れる事ができたのに。でも私は、残念ながら

そんな解毒剤を持っていないのだ。ああ、残念だ。私が持っていないければ、他に持っている奴何て、誰もいないだろうなく」

悪魔は口笛を吹く。そんな様子に、今まで黙っていたエレンが怒りが頂点に達し、これまででの不快感を忘れ叫ぶ。

「じゃあ！何で！こんなことをしたの!?!」

「あの有名なシエムナシャオヴィロダンドラシヴユが私に屈服するのを見たかったからだ！このちつぽけな人間を救うために、こいつがどこまで譲るのかと思つてね」

悪魔はゲラゲラと嗤いながら答える。その様子にタラも猛烈に腹が立ち、シエムの言いつけを破つてしまう。

「私達を助けられないのなら、とつとと消えなさいよ！全く！口程にもないじゃない！ああ、時間の無駄だったわ。高等魔術師先生、行きましよう！本当に力を持つている人のところに！」

タラの発言に悪魔の支配者の怒りを買つてしまう。更に周りには家来達がいるので、腸が煮えくり返る程の怒りになってしまう。

「ほお、この小娘は牙を持つているようだ。私に噛みつくとはいい度胸だな。この私に力がないと思つている。直ぐに思い知らせてやろう！お前はお前達の世界に戻れば、直ぐに実感させてやろう。直ぐに、直ぐにだ！この私を嫌でも思い出させてやろ

う…… スパリダム！」

悪魔の支配者が叫ぶと、エレン達は嵐に飛ばされるただの藁くずのように、煉獄から追い出される。

エレン達が消える直前、悪魔の支配者の怒りの叫び声が聴こえるのであった。

第11話 一難去つてまた一難

エレン、タラ、シエムの魂は、いつの間にか現実に戻ってきた。三人は直ぐ様自分の体の中に戻る。

三人は体に戻つて瞼を開けると、カル、モワノー、ファブリス、祈禱師とその助手が顔を覗き込んでいた。無事に目が覚めるのが分かると手を取り合いとても喜んでいた。

喜びを充分に分かち合うとカルから話し出す。

「無事でよかつたよ！」

「ほ、本当に、そ、そうね！」

「ああ、本当だ！」

「取り敢えず、確認しますね」

祈禱師はタラのおでこに手を当てようとする。その前にハイテンションになったタラが立ち上がり、空中浮遊の魔術を使い飛び上がった。

タラが天井にぶつかりそうになる前にカルが捕まえた。

「おい!?何やってんの?」

「ねえ!見て!このネットワークス良いでしょう!私が助け出した色達なのよ!エレンとお

揃いなよ！まあ、気分が良いわ！」

タラは説明することはなかった。エレンはそれを不思議がった。当たり前だ。だって、色達から贈られた模様をあまり喜んでいなかった。そもそも、解毒はまだ終わっていない。なのに元氣いっぱいだからだ。

「… エレン。煉獄で何があつたんだ？」

カルが尋ねる。エレンは首を降る。

「分からない。と言うか、本当は治っていないの」

「はあ!?それはどういうことだよ!」

カルが思わず叫ぶ。

戸惑っているエレンの代わりにシエムが答える。

「うむ。実は…」

「「え———!? 悪魔の支配者に喧嘩を売った?!」」

煉獄に行けなかった一同は事情を知り、驚きのあまり部屋中反響する程叫んだ。病気でどもるモワノーでさえも普通に話せてしまう程だった。

「しかし、まあ…。また突拍子のないことをやるなあ…。タラは」

フアブリスが呆れてため息をつく。

「えっ？前からそうだったの？」

驚いたエレンはフアブリスに質問をする。

「うん、そうだよ。ここに来る前にタラと僕と、後、ベティという女の子がいたんだけど、三人でかくれんぼして遊んだ時。タラが魔術を使って、僕を吹き飛ばしたり、トラクターや納屋は壊しちやったし……」

「ほほう、それでそれでは？」

興味津々となつたカルが話をせがむ。

「他にもデブで乱暴者のパスカル・ゲンタールっていう奴がいたんだけど、あいつがタラの髪の毛を切ろうとしたから、魔術を使って吹き飛ばしたりね」

「へえ〜中々やるね」

「何よ！トラクターはフアブリスが運転してきたから悪いのでしようが!!」

「い、い、今は、そ、そんな話をしている、ば、場合じゃないでしょ！タ、タラも、お、落ち着きなさい！」

感心して話し込んでいるカル、フアブリス、タラ、エレンをモワノーは思わず怒鳴つた。モワノーに叱られた事によって四人の意識は現在起きている問題へと向かう。

「まあ……しかし……。悪魔の支配者にしては、病氣と闘う力よりも、あえて弱らせると思つたのだが……」

子供たちの話をそっちのけに腕を組んで考え込んでいた祈祷師が言う。

「タラが治す力がないって馬鹿にしたからのう。傷付けるよりも、プライドを優先したのではないか？」

シエムが推測で祈祷師の疑問を答える。

「でも… あんなに元氣いっぱいでも、まだ毒液があるのですね？それに、悪魔の支配者の呪いということは… 相当恐ろしいものが…」

祈祷師の助手がタラの様子を見ながら言う。

「そうじゃ。まだタラの体内には、アルピーの毒液が残っておる。今はこの毒をどうにかせんと、タラは死ぬぞ！」

すると何か案が思い付いたカルが言う。

「先生、サングラーフの仮面は何も通すことはできないの？それとも顔を隠す為のただの幻影？」

「ただの幻影じゃ。そうでなければ、あいつらは呼吸することはできないからな。何故急に？」

「思い付いたことがあるんです。でも、それには、先生の助けを借りなくちゃならないんです」

カルはこれから行おうとすることを皆に説明をする。大人たちは大反対したが、これ

しか方法がなかったもので、最終的に納得するしかなかったのであった。

結果は驚く程簡単に成功した。

まず、意識を失ったふりをしたタラは大人しく担架で運ばれる。

そして、次にシルヴィアの森に着いたサングラ―ヴ族はもう一度移動するマジスターが待っている部屋へと。意識を失っていると勘違いしたままのマジスターは、アルピーの解毒剤をタラに飲ませる。

その時にタラの体の下にクレ―プのようにべちやんこになって隠れていたカルが、マジスターの顔に向かって胡椒が入っている瓶をおもいきり投げつける。

相手が痛みへのうち回っている内にカルが薬を奪い取る。薬を奪い取ると直ぐ様タラがポキユス〔金縛り〕の

おまじないを唱えようとしたが、マジスターたちは何故か消えてしまう。

疑問は多少残ったが、どう考えても疑問が解決できないので、一先ず置いとくのであった。

トラヴィアの王宮に戻ったタラは急いで残った分の薬を飲む。

数分後、祈祷師が手をかざして確認する。

「完全に治っています」

宣言した祈祷師は助手と共に荷物をまとめて満足そうに部屋から出ていく。

タラ、ファブリス、エレン、カル、モワノー、子供組は喜びのあまりその場で踊る。少し落ち着くとタラは真面目な表情でお礼を言う。

「カル。私の命を救ってくれてありがとう」

カルの頬にキスをする。カルの顔は熟した林檎のように真っ赤にして、餌を求める金魚のように口をパクパクしている。

そんな時に宮廷人がカルを迎えにやって来る。国王夫妻がタラの奇跡の救出の話を聞きたいために呼ばれたのだ。

急遽話をする事になったのでカル、タラ、シエムは王座の間に行き、エレン、ファブリス、モワノーは他の宮廷人と一緒に話を聞く事になった。

「大変だったわね。とても危険な目に遭ったのですって？」

王妃が優しく体をいたわるように声をかける。

「はい、陛下。シエム先生と仲間達が私の命を救ってくれました。特に、カルは、勇敢で私と一緒にサングラヴのところまで付いてきてくれたのです。それに、カルの聡明な案により、見事サングラヴから薬を奪い取り、逃げ出すことができました」

エレンやシエム以外全員が恐怖で身震いをする。が、直ぐにカルを称える拍手へと変わる。

照れたカルは顔を赤くして頭を掻いた。そんな姿を大人たちは微笑ましく見つめる。

タラは一部始終を語り出す。タラが喉のくぼみの模様を見せた時、部屋中の若い女性達が始末が良かった。エレンのも見せる事になった時また若い女性達が始末が良かった。若い女性達の反応にエレンは誇らしげに笑い、綺麗な姿勢で立ち、その後ろからドヤツという音が聞こえてきそうだと。

しかしー

問題が起きてしまった。

それは悪魔の城の話の時だった。

「私達は、恐怖のあまり氷の様に凍りつきました。何故なら…」

タラが言った瞬間、エレンの髪の毛が静電気パチツと鳴る。

「えっ?」

エレンとその周りにいた人達は思わず驚いてしまう。

エレンの髪の毛が静電気にやられる事は、自分が魔法を使ったか、誰かが使って掛けられたのかだ。しかし、今のはタラが話をしているだけであって、呪文を唱えたのではない。

不安がるエレンをよそに、事態はどんどん進んでいく。

ブオーと冷気を纏った風が部屋の中に吹き荒れる。ピキピキと部屋が凍りつき青くなっていく。

(どうしよう!?! 防御魔法で壁を作っても、この冷風がいつまで続くか分かんないのに、耐えられるかな……。もう、いっそ！火で燃やしてしまう!?)

あまりにの寒さに物騒な事を考えるエレン。残った理性が下手な事をできないと判断した為、モワノー、フアブリス、カルや宮廷人と一緒になって足踏みしながら振るえるのであった。サラタール一人だけは怒り狂っていた。

タラだけは何も被害がなかった。けど、タラ本人はこの事態に恐怖を感じて、石像のように動けなかった。

何かに気づいたシエムは呟くとタラの方を向いて言う。

「親愛なる悪魔めが、タラ、お前にちよつとした贈り物を送ったんだ。『私達は悪魔の支配者様のご好意で、少しずつ暖められます』と大声で言ってみてくれんかね?」

最初は納得していなかったタラだが、渋々納得して叫ぶ。

『私達は悪魔の支配者様のご好意で、少しずつ暖められます』

タラが叫んだ瞬間、エレンの髪の毛がバチツと鳴り、吹雪は止まり、氷は溶けて部屋が暖まる。

エレン達が濡れた髪の毛や体を拭いている最中、サラタールだけは濡れた毛を目の中に入つたまま、クツションから降りて話し出した。

「何が起きたのか、説明してもらおうではないか」

その声は怒っているのにも関わらず、不気味な程落ち着いていた。

その様子にシエムはかなり困惑しながら説明をする。

「煉獄に行った時、タラは、迂闊にも、悪魔の支配者に対して、治せるものなら治してみろと挑発してしまつたのじゃ。悪魔はそれができない腹いせに、タラに新しい力を贈り物をしたようなのじゃ。それは、タラが何かを例えて言うと、その“諭え”が本当の事になつてしまうのじゃ」

「じゃあ、あの時サングラーフの人達が突然消えたのは、タラが『二人とも地獄に落ちればいいのよ!』と言つたから?」

カルがハンカチで頭を拭きながら訊ねる。

「そうじゃ」

「つて事は、タラが例えば、『我慢できなくて燃え尽きそう』とか『炎のように情熱的に』

何て言ったら、皆焼けちゃうって訳？」

「まあ、そうだろうな」

カルはニコニコと親しげにタラに笑みを浮かべて言う。

「タラ、僕たちを串焼きにしたくなかったら」諭えは「絶対に言わないようにしてね」
タラは自分の現状に恐怖を感じて完全に動けなくなる。

そんなタラをフオローするかのように入レンが一步前に入る。

「それなら、別に話さなければ大丈夫だね。何か伝えたいことがあったら、紙とペンで伝えられるし。それに魔法だってあるでしょ。喋ったらじゃなくて、”諭え”を使ったらでしょ？呪いが解けるまでの間、必要最低限だけにすれば大丈夫だよ」

「そうじゃ。エレンの言い通りじゃ。とは言え、何か被害が出る前に治せばならん」

「ならば、高等魔術師達の力を借りよう。でも、ここだけでは数が足りないから、オモワに行かなくてはならん」

「オモワだと？」

サラタールの意見に眉を潜める国王。

「あの帝国に頼み事をしろと言うのか？あの女帝や将軍が、このタラに掛けられた呪いを解くために、オモワの高等魔術師達の力を使って良いなどと言うと思うのか？」

良い方向に流れていたが、王の意見に打ちのめされてしまう。

だが、シエムはお辞儀して応える。

「陛下、ご心配は無用です」

その言葉にここに居る全員が安堵する。

「高等魔術師同士が話し合えば大丈夫です。どんな政治的な問題があろうと、我々のどちらかが危険にさらされたり、傷ついたりすれば、相手を助けたり治したりする為に、力を合わせる事になっているからです」

「宜しい。では、タラを治すのは、お前に全て任せただぞ」

タラの事を前から嫌っていたサラタールは、厄介払いができると思ひ、少し嬉しそうに言う。

「直ぐには参りません」

シエムの言葉にサラタールだけではなく、他の宮廷人もがっかりする。今にも文句を言われそうだが、シエムはそれを無視して話を進める。

「いくら、協定で決められているとは言え、あちらとも事前に話をしなければいけません。ですので、一週間ほどを目処に出発したいと思います。：：タラ、それまでの間、用心を怠らないように」

そう言われたタラは黙ってお辞儀をして下がった。

タラが通る度に怯える宮廷人。エレンはそんな姿を悲しげに見つめながら考える。

(呪い……これだけですめばいいんだけど……)

周りへの被害は酷いのだが、話をしても「諭え」を使わなければ良いのだ。言い方一つ変えればいいだけの問題。

(悪魔と呼ばれる生き物が、こんな簡単に回避出来る方法を残しておくものなの……？
これは表向きの罠で、他にもまだ呪いがあるっていう……パターンじゃないよね……)

エレンは泣きなくなる現実をため息に変えて流す。

仲間達は泣きそうに退出していったタラを気にしているので、エレンの様子に気づいていなかった。

せつかく難を乗り越えたのに、助けを求めた所で、また難をもらう皮肉な結果となっただけになってしまった。

第12話 ペガサス

問題なく朝を迎えられた一行は食堂で仲良く食べるのだが……。

「えっ、タラも私と同じ部屋？」

「そうよ。私もエレンの時みたく、朝になったら部屋が変わったっていたのよ。私が勝手に魔術を使って広げてしまったと思っただわ！」

興奮をして抑えきれないタラは語った。

「凄いじゃん！タラも立派な魔術師の仲間入りじゃん！」

「タ、タラ、お、おめでとう」

嬉しそうに誉めるカルとモワノー。

エレンも何か言おうとするが、後ろから、初級魔術師だと思われる男の子が喜びの歓声が上ががり遮られる。

「やったー！今日の授業は乗馬だー！」

エレン達は思わず後を振り返る。

後を見ると、叫んだ初級魔術師の男の子が友達と一緒に談笑しながら通りすぎていく。

数秒間黙つた後に、カルもまたの歓喜の声を上げる。

「やったー！今日は退屈な授業じゃない！」

「魔術師《ソルスリエ》が乗馬の練習？箒に乗る練習じゃなくて？」

質問をするタラ。訳が分からない地球組にとつては、喜ぶどころか疑問が多すぎて頭が着いていけなかった。そんな様子を見てクスクス笑うカルとモワノー。

「ほ、ほ、箒？ほ、箒には、の、乗らないわよ。そ、それにね、じよ、乗馬の時間はね……」

「モワノー。折角だから、教えない方が良くないか？」

「う、うふふ。そ、そうね」

カルの発言で止まるモワノーはクスクスと笑う。

「へえー。箒は乗らないんだね」

箒に乗らない事に新鮮味を感じるエレン。そんなエレンに指を振って舌打ちをして小馬鹿にするカル。

「チツチツチツ。そんな考え非魔術師《ノンソ》じゃあるまいし、乗らないよ。あんな棒切れ一本で、空飛んでいたら危ないよ。全くエレンは、非魔術師《ノンソ》の考えにつられるんじゃないよ。非魔術師《ノンソ》も僕達に夢を持つのは良いんだけど、もうちょいリリティーが欲しいよ」

「じゃあ、空を飛ぶ時は何に乗るんだ？」

元々非魔術師《ノンソ》だったフアブリスには苛つく言い方だった。あまりの言い方にムツとした態度を隠さなかつた。

「絨毯さ。絨毯は良いぞ！ふかふかで乗り心地が気持ち良いし、魔術で落ちないよう保護してあるしね！」

得意気に語るカル。

「絨毯……。つて、アラビアンナイトかよ」

本の知識により別のを思い出すフアブリス。

「……私達は何の話をしていたの？」

すっかり忘れたエレン。そんなエレンを見てモワノーはクスツと笑ってから説明をする。

「じよ、乗馬の話よ。み、み、見れば、わ、分かるわ。も、もう、じ、時間だから、い、行かないとね」

モワノーの言葉で朝食を終えて、授業に向かうのであつた。

シャンフランという先生がどうやら案内するらしい。エレン達以外の初級魔術師達も、楽しそうにはしやぎながら次々と厩舎に集まる。

ただ待っているだけではつまらないエレンは、遠くから中を覗き込む事にした。中を

覗き込むと普通の白い馬がいた。

エレンは馬に近寄って観察をする。

馬の体には、馬の体と同じ純白の布を保温の為か、巻かれていた。

しかし、それは違った。

バサッ

純白の羽が舞う。布と思われるそれは翼だった。

ただの馬ではなく、神話上の架空の生き物ペガサスであった。

物音に気づいたペガサス達は、頭を馬房の外に出して若い初級魔術師達を観察をする。

どうやらペガサスは、かなりおとなしく何されても物怖じしないのである。

いきなり初級魔術師が触っても、耳元で興奮した声で五月蠅く騒がれていても、反応は全く動じなかった。

エレンは軽く撫でるように優しくペガサスに触ってみた。

「わー…ふわふわ…」

エレンは気持ちよくて思わず声を出す。

高い場所に飛ぶからか、寒さに対応出来るようにペガサスの毛はとても柔らかかつ

た。

そのままふわふわな体に顔を埋めるエレン。

「気持ちいい……」

頬を赤らめうつとりとするエレン。

エレンがうつとりとしていた間、タラとファブリスもまた産まれて初めて見たペガサスに感動していた。

カルはそんな彼等の様子を見て面白がっていた。

エレンがペガサスを堪能している内に、シャンフランがやって来た。

「お待たせ、騎手の卵達よ。それでは、始めよう。確認だが、どんな馬でもいい、馬に乗った事がある人。手をあげて」

この質問は明らかにこの場所に来たばかりのエレン、タラ、ファブリス向けの質問だった。

エレン以外の初級魔術師全員が乗っていた。ユニコーンにも乗れるらしく、アンジェリカの仲間であるモニカとキャロルが乗った事があった。ユニコーンは気難しくて乗るのは難しいらしい。

「よろしい。では、これが鞍です」

エレンに見せつけるように説明を始める。

鞍には、騎手が落馬しないようにベルトが取り付けられている。この安全ベルトは、どんな動きにも合うように出来ていて、必要な場合には直ぐに外せるように簡単なクリップで留めてあった。

更にペガサスの翼全体が自由になるように切り込みが入っていた。帯紐は三本もあり、一本はペガサスの肩の前に通して鞍を固定させる用で、二本は背中を通して固定させる用だった。

鎧も騎手の足を包み込むようにできていた。

「それでは、この子、タングランというこのペガサスに鞍を置いて、乗馬の手本を見せましょう。その後で、貴

殿方も一人ずつ、ペガサスに乗って実際に歩いてみるんですよ」

そう言ったシャンフランは、馬房の戸を開けて一頭のペガサスを外に出す。優雅に歩きながら登場するペガサス。

(…あれ？普通の馬の足ではない…?)

歩いている様子を見て、エレンは何か気がついた。

ペガサスの足は普通の馬にある蹄ではなく、猫の足のような鋭く収縮性のある何本の鉤爪であった。

「シャンフランが鞍を着けようとすると、それを助ける為にペガサスは翼を少し広げた。」

鞍を着けたペガサスは外に出ようとする。その前に初級魔術師達全員が、ペガサスの空へと羽ばたく姿を見る為厩舎から出てきた。

ペガサスは矢のように地面の端まで疾走し、空中でギャロップをして、あつという間に木々の上を力強く飛んでいく。

エレン、タラ、ファブリスはその姿に思わず見とれてしまう。特にタラとファブリスは息をするのも忘れてしまう程だった。

タラとカルが何か話している時に事件が起きた。

突然タラが、森へ向かって歩き出してしまったのだ。

「タラ?!」

エレンが叫んで手を伸ばすが届かない。カル、ファブリス、モワノー、三人がかりで止めるが、タラが驚く程の力で振り払った。

エレンが飛びながらタラの前に立ち塞がるが、避けられたり、物凄い力で振り払えられない。

「どんどん進んでいくタラに焦りを感じるエレン。」

「まさか…!!これも呪いなの!?だとしたら、止めないと!!」

「ごめんね！タラ！」

そんな考えに至ったエレンは、髪の毛と手のひらを電気でバチバチさせながら、スタングンのように痺れさせて動きを止める為にタラに触れようとする。

しかし、触れることはできず、タラが腕で追い払う仕草をするだけで吹き飛ばされてしまう。

「きゃっ…!!」

近くの木に衝突したエレンは痛みで声を出してしまう。

タラはエレンを吹き飛ばした事を気にせず、森の奥へと行ってしまう。

「ま、待って！」

エレンは追い掛ける事しかできなかった。

エレンがやつとのことで追いついた時には、タラは森の中にいたペガサスに、泣きながら抱きついていて。そのペガサスは普通のペガサスと違って、“金色に目が輝いていた”。

何で泣いているのか、急に変な行動をしたのは呪いなのか、何もかも分からなくなつたエレンは、取り敢えず聞くことにする。

「ね、ねえタラ、そのペガサスはどうしたの？何で？今まで話を聞いたり、攻撃をしてき

たの?」

エレンはタラがもし魔術を使っても、ギリギリで対処できる距離で聞く。今まで無視してきたタラだが、エレンの方を振り向いて答えてくれた。

「このペガサスはね、ギヤランっていうの!私を選んでくれたの!」

嬉しそうに答えるタラ。しかし、返ってきた答えは、エレンの疑問を解決できない答えだった。

「……ギヤ、ギヤラン……?選んでくれた?」

思わず呆けてしまうエレン。

嬉し涙を流しながらペガサスの首に抱きつくタラ。

エレンが呆けている間にやっと辿り着いたカル、モワノー、ファブリス、シャンフラン、他の初級魔術師も追い掛けて来ていた。

シャンフランは息切れをしながらも疑問を呟く。

「一体何が起きたんだ?」

「先生、何でもありませんよ。あの子は注目されたいだけです。だいたい余所者ですから、ペガサスを見ただけで……」

息を切らしながらも嫌みを忘れないアンジェリカ。が、これ以上続けて言うことはできなかつた。ペガサスがわざと脅かすような足音で突進してきたのだ。

間一髪避ける事ができたアンジェリカは金切り声を上げ、シャンフランの後ろに隠れた。

「見て！見て！あの子！私を襲わせる為に、あのペガサスを調教をしたんだわ!!」

ペガサスの様子を見ていたシャンフランは、あることに気づいた。そのままタラとペガサスの元へ向かう。

「そのペガサスが、君を選んでくれた”ファミリエ”なんだね?」

「はい！先生！名前はギヤランっていうんです」

シャンフランはこうなる事を予測していたような、不思議な眼差しで、もう一度タラを見つめる。

「それは良い！素晴らしい！ペガサスのファミリエなんて、魔術師史上初めてだ！今日なんて最高の日だ！」

自分の事以上に喜ぶシャンフラン。彼は喜びのあまりに踊り大きくジャンプをする。その様子に若い初級魔術師達は啞然とする。

「その子は秘密の武器で、決定的なジョーカーだ！タラ、おいで。君達に相応しい鞍を探そう」

元に戻ったシャンフランは、タラとギヤランを連れて歩き出した。

他の初級魔術師達は戻る雰囲気を感じて、この事をペチャクチャと話しながら、厩舎

へと歩き出した。

エレンだけは納得できずに、頬をむーっと膨らませて怒っていた。

ファミリエというものが、良いものというのは分かっていたが、迷惑をかけても仕方はないという流れに、腹が立ったエレンはカルに訊ねる。

「ねえ、ファミリエってなに?」

いつもよりも声が低く仏頂面で訊ねるエレンに、ぎよつとするカル。だが、それよりも、エレンの質問の内容の方に驚く。

「え、え、ファ、ファミリエの事!? エレンは君は知らないのか!? ソクラテスの事だよ!」
「?…? ファミリエが、ソクラテス? 何の事?」

本当に分からないエレンは首を傾げる。今まで怒りで黙っていたアンジェリカが、鬱憤を晴らすかのようにエレンに怒鳴った。

「あんた!! 本当に! 何も知らないのね! こんな奴を選んだあの白い猫はお馬鹿さんね。いや、飼い主とそっくりだから選んだのよね。あくあ、何で、こんな馬鹿が、ファミリエがいるのかしら? それに、もう個室を持っているのかしら? ほんと、見る目は無いわ!」

言うだけ言うと反論される前に、さっさと仲間のところに戻るアンジェリカ。

アンジェリカが戻るとお仲間であるモニカとキャロルは、エレンの方へと振り向いて

をクスクスと嗤い合つて、走り去つていった。

エレンはもう怒り狂つて、質問の事などどうでもよくなり、仕返しをしようと空を飛ばす。

カルやモワノー、ファブリスが止めようとするが、上の空で聞いていなかった。

エレンの事を嗤つた彼女達は、エレンが空を飛んで追いつけて来るのが分かると、顔を青ざめて走り出す。

彼女達はシャンフランの元に辿り着く前に、エレンに捕まつてしまう。

髪の毛と手のひらをバチバチさせるエレンに、彼女達は泣いて身を縮こまる事しかできなかつた。他の初級魔術師達は、怖かつたのかひそひそと話すだけで、誰も近寄らなかつた。

騒ぎに気がついたシャンフランとタラが割り込む。

「どうしたのかね?」

「何が合つたの?」

シャンフランは平等に訪ね、タラは彼女達には目もくれずにエレンに聞く。

エレンが先に言う前に、アンジェリカの口が開いた。

「聞いて下さい!この子は私達が何もしていないのに!いきなり、襲い掛かってきたのです!!」

「そうです！私達はただ、お話をしていただけです！」

「それなのに、急に目の前に現れて、手のひらをバチバチさせてきて……怖かった……グ
スグス」

キャロルはアンジェリカと同じくらい叫んで、モニカはわざとらしく泣く。

「それは……本当なのかね？エレン」

確認をとうとうとするシャンフランだが、その顔色は明らかにエレンが悪者だと決めつけていた。

エレンもその様子に腸煮えくり返りそうになる。でも、それ以上に怒っていたのはタラだった。

誰かが何かを言う前にタラが、マシガンガンの如く話し出した。

「シャンフラン先生！まだ、エレンの話を聞いていないのに、決めつけるのは、止めていただきますませんか？それに！彼女達は、私と因縁があるせいで、エレンが少しでも、何か変なことを言うと、わざわざ、あの人達から、群がってきます。ええ！確かに私は！故意ではないとは言え、彼女達に危害を加えてしまいました。たかだか、魔術を失敗してしまつたせいで洗濯物をぶつけると言う、情けない理由で！勿論、謝りましたが、暴言を吐かれました。この事は、先生が知るよしもないことは、知っています。ですが、まだ！エレンの話を聞いていないのに！決めつけしないで、下さい！上の立場に立つ者が！

平等に話を聞かなければ、いけない事でしょうが!!」

タラの剣幕に誰も何も言えなかった。

まだまだタラの怒りが収まる気配がなかった。タラが肩で息をすると、ついには、言つてはいけない言葉を言つてしまう。

「あの様な『悪魔のように小賢しい』彼女達の意見ばかり聞いていたら、良い先生にはなれませんよ」

タラが諭えを使つてしまった。

タラがあつと後悔するのは遅かった。言い終えたのと同時にエレンの髪の毛がバツチと鳴つて異変が起きた。

エレン、アンジエリカ、モニカ、キャロル、先生、他の初級魔術師、止めるためにやって来てしまったカル、ファブリス、モワノー。更に、先程タラとファミリエになつたペガサスのギャラン。

この場に居る全員が被害に遭う。

背中には黒い蝙蝠の羽が服を突き破り、尾てい骨の近くの位置には悪魔のような尻尾が生えた。犬歯は伸びて、頭には羊の角が現れる。

急な体の変化に痛みと戸惑いで、タラ以外全員がその場に立ち竦んでしまう。

特に酷かったのはギャランだった。

体は黒と所々紫色なり、純白の翼は悪魔のような黒い蝙蝠の羽へと変わる。いらぬ犬歯は生えしまった。

どうすればいいのか分からないタラは、おろおろと周りを見て立ち止まる事しかできなかった。

タラは考える時の癖で白い髪の毛をカシカシ噛んで、何とか打開策を打ち出そうとする。

数十間使つてタラは、シエムがまた別の喩えを使つて、呪いを打ち消した事を思い出す。タラは急いで叫んだ。

『貴方達は……王子様の呪いを解くためのお姫様のキスをされて、元の姿に戻る！』
タラが叫んだ瞬間、変化は直ぐに起きた。

異変が起きたもの達の唇に、見えない誰かにチュツとキスをされると、元の姿へと戻った。

突き破られた洋服も、まるで穴なんか空いてなかったように、直っていた。

全員が自分の身を確認すると、エレン、カル、ファブリス、モワノー、ギャラン以外全員がタラから離れた。

初級魔術達は互いに体を寄せ合つて、恐怖のあまり震えていた。
シャンフランは怒りで顔を真っ赤にしていた。

「… もう、今日の乗馬は中止だ…」

静かに語るシャンフランに誰も反対意見を出すことはなかった。

「この事件に関わるエレン、アンジェリカ、モニカ、キャロルは、今日一日中厩舎の掃除、反省文の提出と厨房当番の仕事をしなさい…」 分かったら、返事！」

「… はい」

「はい」

「はい」

「はい」

シャンフランの激怒に洩々返事をするエレン、アンジェリカ、モニカ、キャロル。

今度はタラの方を怒りの眼差しで見つめた。

「タラ。君は、部屋で頭を冷やしなさい。そして、君も反省文の提出してもらおうからね」

「はい」

「後、ギヤランは、厩舎で生活をしてもらおう」

「えっ… それは!!」

ギヤランと離れる事が相当嫌なのか泣き叫ぶタラ。

「君はもう！一言も喋るな！」

泣き叫ぶタラを鬱陶しがるシャンフラン。

タラはシャンフランの叫び声で泣くのを止めた。だが、タラの目つきは、今にも人を殺しそうな恐ろしいものへと変わってしまった。

タラの変化に気がついたギヤランが一生懸命に鳴いて、何かを伝えようとしていた。ギヤランの鳴き声でタラは、元の状態に戻って渋々了承した。

周囲が落ち着いたのを確認をしたシャンフランは、魔術でA4の紙を二十七枚作り出す。エレン、アンジェリカ、モニカ、キャロルには五枚ずつ渡し、タラには七枚の反省文を渡した。

「他の初級魔術師は私に着いてきて。一応、医務室にとて診てもらから」

シャンフランは、特に問題を起こさなかった他の初級魔術師を連れて移動を始めた。その際にもエレン達に声を掛けるのを忘れなかった。

「いいか、君達。ちゃんと、やるべき事をやりなさい。でないと、もつと恐ろしい罰を与えるからね！後、反省文は明日の朝に提出をしなさい。いいね？」

「は、うん」

文句ある気持ちを抑えて返事をするエレン、タラ、アンジェリカ、モニカ、キャロル。返事を聞くと黙ってシャンフランは、他の初級魔術師を連れて歩き出した。その際、カル、モワノー、ファブリスはエレンとタラに同情的な視線を送った。

アンジェリカはモニカとキャロルを連れて、さっさと歩き出す。

タラはギャランと離れたくないのか、ギャランの首に抱きついて泣いていた。

そして、エレンは――

「……私は、何も悪くないのに――――――」

理不尽な現状に少しでもストレスを発散する為に、ありったけの声で叫ぶのであった。

第13話

病氣

厩舎の仕事を終えたエレンは、へとへとになりながらも、週に三回の厨房当番の仕事を始める。

厨房当番の仕事の内容は野菜を切ったり、料理人の代わりに様子を見たり、魔術で料理の数を増やす事だ。

今回の監守はドラゴッシュだった。ドラゴッシュとは先程喧嘩したばかりエレンにとっては、気になってとても居づらかった。

とはいえ、他の当番の中にタラ、カル、モワノー、ファブリスが居てくれた為、エレンの心は大分楽になり、有り難い存在だった。

罰せられたばかりなのにアンジェリカは、当番に入ったタラ達を思い切り睨んだ。特にタラには親の仇のように睨んでいた。

アンジェリカ、モニカ、キャロルは料理人の指示の下、ステーキの火加減を見たり、スープを煮込みすぎないように注意している。

カル、モワノー、ファブリスは、料理人から渡される料理を魔術を使って二倍に増やす仕事だ。

エレンとタラは野菜を切る係りだ。

エレンはじゃが芋などの皮をテキパキと剥いている。タラは色んな事がありすぎて、ぼーっとしてしまっているが、それでも人参の皮を少しづつ剥いている。

「お腹すいたなあ〜」

辺りを漂う美味しそうな匂いに釣られて本音をこぼすエレン。だが、ドラゴツシユから「夕食前につまみ食いをするのは禁止だ。もししたら、分かっているな？」と言われた事を思い出し、つまみ食いをしたい気持ちを抑えた。

エレンは早く終わらせて、食べに行こうと張り切ってじゃが芋の皮を剥こうとするが…

「そっ…何をしている!!」

急にドラゴツシユの怒鳴り声が部屋中に響き渡る。気になったエレンは、作業を一時中断して振り返って見ると、ドラゴツシユがカル的首根つこを掴んでいた。近くに居たモワノーは恐怖で後退りをしていた。

「えっ…なんで…?」

呆然と呟いてからエレンは様子を伺った。

よく見たら、カルの足元近くには食べかけのパイが落ちていたのだ。どうやら、つま

み食いをしようとして、言いつけを守らなかったから怒られてしまったようなのだ。

その時だったー

「あつつい!?!」

髪の毛が静電気でパチツと鳴るのと同時に、エレンの足下には、熱くネバネバしたスープの海がいつの間にかできていた。

エレンはこれ以上被害を遭わないように、直ぐ様飛んで回避する。

スープの海は人だけではなく、大鍋もキャセロールも容器もスープまみれにしてしまい、調理台の火さえも消してしまう。

唯一救いだったのは、厨房のドアがスープの海を塞ぎ止めたお陰で、他の部屋には被害が出なかった事だ。

空腹で頭が上手く働かないうえに、いきなりスープが波となつて襲い掛かってきて軽くパニック状態のエレンだったが、それでも必死に回転させ、周囲の様子を把握しようと、何度も何度も右、左、上、下を目で追える範囲はくまなく見るのであったが……

「……あつは……あははははは! ああはははは! イツイヒヒヒヒヒ!!」

スープまみれのタラが、お腹を抱え込んでヒステリックに啜っていた。

「……タ、タラ……?」

あまりのできごとに呆然を越えてドン引きするエレン。

エレンはタラが何故嗤っているのかを考え込んだ。

すると、ボタン、ボタンと何か重たい物をひっくり返した音が耳に入った。その音は一回だけではなく何度も何度も繰り返して聞こえてくる。

音の正体は、スープのせいで立ち上がれなくなったドラゴツシユだった。

カルを掴んでいた筈だが、スープの海に氣をとられて放してしまつたらしい。カルは解放された隙に逃げ出したみたいだ。

ヒステリックに嗤うタラを見て、ドラゴツシユの堪忍袋の緒はあつという間に千切れってしまった。

「お前は：：!!お前は：：!!わざとやったんだな。そうに違いない。滅茶苦茶になつたこの厨房を掃除しろ!バケツとスコップだけでな!魔術を使うなよ。さもないと：：!」

スープを滴らせながら叫んだドラゴツシユは、カルを追い掛ける為部屋を出ていった。ドラゴツシユの後を追うようにファブリス、モワノーもカルを追い掛ける為部屋を出ていった。

後に残された者もまたスープまみれだった。彼らはタラに対して、激しい非難の視線を浴びせた。

今までヒステリックに嗤っていたタラだが、流石に非難の視線を浴びても嗤っていたら

れる程の神経の持ち主ではなかった。その顔色は恐怖で青ざめ首をすくめた。

これを好機にアンジェリカは怒鳴り声を上げる。

「まったく！あんたつていう人は！本当にあんたは危険な人ね！あゝあ、早くパパに告げて、こんな化け物をどこか遠くに追放してもらわなくちゃ。こんなのが居たら、私達いつか死んでしまうわ！」

「ちよつと！そんな言い方ないじゃない！それに、まだ、タラがやったとは決まつてないよ！」

何も言わないタラの代わりにエレンが反論する。でも、その心は、タラがヒステリックに嗤っていたのを見ていたせいで自信はなかった。

エレンは言い訳として、ただ単純に、嫌いな人が無様な姿をみせた事で笑いたくなくなっただけかも？つて、考えてみたが、それはそれで人として駄目じゃん！と、自分が出したあんまりな案に頭を抱え込んだ。

考え込んでいる内に、これも悪魔の呪いなのでは？つという考えに至つたが、それと言つてしまえば、タラがやったと認めてしまうのと同じ事だつた。

エレンがうーんと頭を捻っているとき……

「じゃあ、エレンあんたが犯人なのね！」

アンジェリカの矛先がエレンに変わった。

「えっ!? 違うよ!」

驚きのあまりに思わず叫んだエレン。タラもこの珍回答に呆れて声も出なかった。

何も言い返さない二人に、アンジェリカは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「だって、あんたならこれくらいのことできるでしょ。それに、自分のファミリエの事も忘れてしまう最低な奴が、こんな事してもおかしくないわ!」

「そうね! 私達に手を出そうとしたしね!」

「たかが世間話に、勝手に勘違いをして魔術を使って痛みつけようとする人は、まともではないわ!」

キャロルとモニカも、アンジェリカの言葉に合わせて掩護射撃をするように、同意し出した。

これには怒りを通り越して、なに言ってるの貴女達は? という呆れが、顔に思い切り出たエレンとタラは、互いに顔を見合わせると、同時に長いため息を馬鹿にするように吐くのであった。

だが、周りの人達はアンジェリカの意見に同意する。

「そうだな。俺もファミリエいるけど、その事を忘れるって、かなり: : : いや、相当最低な人でもありえないぞ」

「悪魔の呪いのせいだとしても、危険な存在にはかわりないものね」

「そうそう、現に二回もやられたし」

「そのうち死人出てもおかしくないわ」

「そういえば、タラお前、シャンフラン先生に凄いい目つきで睨んでなかったか？」

絶句したエレンは声が出ず、口をパクパクする事しかできなかった。タラは怒りで顔を炎のように赤く染め上げ、噴火した火山の如く叫び始めた。

「アンタ達ね！いい加減にしなさいよ!!そもそも！なんでこんな事をしたのか分かってるの!?!アンジェリカが煽るからよ！やった私も悪いけど！煽る方も同じよ！少しは考えなさいよこのアンポンタン！なんの為に頭があるのよ！考える為でしょ!.. . だいたい.. . アンタ達は.. . 少しは自分で考える力がないと.. . ！」

「タラ！駄目！」

このままでは、また諭えを使ってしまいそうなタラを止める為に、エレンは急いで黄色の丸弾を当たらないギリギリの距離でタラの顔に向けて放った。

「まるできやつ!?!」

思わず悲鳴が出たことでタラの諭えを阻止する。

一旦、冷静になれたタラは、自分が何をしようとしたのかを理解したのか、顔を青ざめて両手で口を押さえた。

自分の勝ちを確信したアンジェリカは、エレンとタラを大袈裟に怖がりながら言う。

「ほら！また諭えを使おうとしたわ！私達本当に死んでしまうところだったのよ！それに、みんな、あれ見て！」

アンジェリカはある場所に向けて指を指す。皆が一斉に振り向くとそこは、エレンの放った丸弾の跡だ。丸弾の当たった場所は少し焦げていた。

「今のような事を、私とキャロルとモニカに向けてきたのよ。エレンも危険な人物なのは分かるよね？」

タラの諭えの未遂とエレンの魔法の威力にビビった初級魔術達は、顔を青ざめ、まるで怪獣に襲われた町の住人のように一目散に逃げ出した。

逃げ出した彼らを見ながらアンジェリカは言う。

「キャロル、モニカ、私達もここから離れないと殺されてしまうわ……。では、さようなら。もうあんた達とは会うことはないでしょうね！だって……。牢屋に閉じ込められるからね！」

アンジェリカはオーホホと嗤いながら出ていく。

「私達に手を出した事を後悔させてあげる！」

「アンジェリカの言う通りよ！貴女達みたいな危険人物は牢屋行きよ！」

キャロルとモニカも言うだけ言うと部屋を出ていった。

後に残されたのは、エレンとタラと静寂だけだった。

エレンとタラは暫くの間、ただただ立っている事しかできなかった。ただタラは、怒りを抑える為にずっと深呼吸をしている。

約一分間程の深呼吸を終えたタラは、エレンに話し掛けようとして見上げる。

タラの口からプツと、無意識のうちに空気が漏れた。次第にタラの体は小刻みに震え、段々と震えが大きくなる。

タラの変化にエレンは、？を浮かべる。エレンが大丈夫？と、聞こうとした瞬間――

「あっははははー」

またもやお腹を抱え込んで笑っていた。でもヒステリックな嗤いではなかった。楽しそうに面白そうに笑う。

タラが笑った理由はエレンの頭、正確に言えば髪の毛だった。

エレンの髪の毛は何故か、魔法を使ったり受けたりすると、静電気が走り、髪の毛をアフロのようにボサボサになってしまうのだ。

スープの海に触れ、それなりの間空に浮かび、丸弾を放つ。現に魔法を大分使ったエレンの髪はかなり酷い状態になっていた。

アフロになりつつも、中途半端に元の状態を残しているせいで、アンバランスな状態になっていた。それがまたタラを笑いへと誘う。

「わ、笑わないで！」

恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にして叫ぶエレン。

エレンに注意されても笑いを止められないタラ。

「もう、知らない！」

そんなタラに怒りを感じたエレンは、どこかに飛んでいく。

タラはそんなエレンの後ろ姿を見て、何か悲しそうに呟いていたが、エレンには知る由しもなかった。

自分の部屋に戻ったエレンは、スूपまみれになった足を念入りに洗い、髪の毛を元に戻すまでとかし、靴と靴下を新しいのに取り換えて身支度を整える。

整え終えたエレンは、ソクラテスを抱き抱えて食堂に向かった。

食堂に辿り着くとエレンはソクラテスをおろした。ソクラテスは直ぐ様ファミリエ用の場所まで走り去っていく。

それを見届けるとエレンは、いつも一緒に食べる仲間達の元へと向かう。いつもみた

く楽しそうな笑顔ではなく、仏頂面で向かう。

そこには、カル、モワノー、ファブリスが仲良く喋りながら夕飯を食べていた。

エレンは直ぐ座らずに…

カルの頭を思い切りどついた。

「う、うわ!?!」

驚いたカルは、食器の中に顔を突っ込みそうになったが、なんとか姿勢を崩さずにすみ、顔をベタバタに汚さずにすんだ。

「な、なんだよいきなり!?!… って、エ、エレン!?!」

カルは振り向いて怒ろうとしたが、犯人がエレンだと分かると、困惑して何も言わなかった。

エレンは困惑したカルを無視して睨み付ける。

エレンがカルに怒るのは当たり前前の事だった。

そもそも、カルがつまみ食いをしなければ、エレンが怖がられることなく、タラも問題を起こさないからだ。

エレンは怒鳴る。

「カル! なんであの時つまみ食いをしたの! カルがつまみ食いをしたせいで、私とタラが怖い存在に成っちゃったじゃない!!」

「それは、どういう事なんだい?!」

カルは黙って聞いていたが、エレンの“私とタラが怖い存在に成っちゃったじゃない!!”と言う発言に、気になって質問をする。

エレンはプンスカ怒りながらも説明をする。

「タラが魔法を使っちゃった……かも……。その事を必死に……言い訳を考えていたのだけど……何故か私が犯人扱い。それで怒ったタラが、諭えを使おうとして……。止められた事は、止められたんだけど……。この後の生活はもう、目茶苦茶だよ!!私も! タラも!」

自分が何か仕出かした事に、気がつきはじめたカルは顔を青ざめる。

エレンはカルの変化を露知らずに、怒りに身を任せて語り続ける。

「みんな!みんな!あの意地悪な人の話ばかりを、信じて!誰も私達の話は聞いてくれないの!!」

訴え続けていたが、しまいには泣き出してしまいうエレン。

カル、モワノー、ファブリスだけではなく、周囲の雰囲気も重たくなる。

気まずそうにひそひそと話している人。罪悪感を感じる人。逆ギレをする人。

そんな雰囲気を感じる程の余裕のないエレンは、ヒックヒックと、泣いている。

誰もが動かない中、一番始めに動きを見せたのはカルだった。

「そ、それは！話を聞かないあいづらが悪いんだ!!」

「そうだよ。カルの言う通りだよ。そもそも、喧嘩を吹っ掛けてきたのは、アンジェリカ達だし」

「そ、そうよ。カ、カルは、わ、悪くないわ。つ、つまみ食い、げ、げ、原因だとしても……。エ、エレン、きよ、今日は色んな事が、あ、あ、ありすぎたから、つ、疲れてしまつて、イ、イライラしてしまうのも、し、仕方ないわ。だ、だから、ね……。？」

罪悪感を感じるものもカルは認めなかった。ファブリスはカルをフォローする。モワノーもまたカルをフォローしつつ、エレンを宥める。

そんな気まずい中タラが帰ってきた。

「……あれ……。何があつたのあなた達？」

泣いているエレンとそれをフォローするカル、ファブリス、モワノー。周囲はひそひそ話。

明らかに異常な光景にタラは戸惑つたが、エレンの頭を優しく撫でてあやす。

ファブリスが皆の代わりに話し出す。

「あ、あの、実は……。ほら、カルがつまみ食いをしただろ」

「ええ、したわね……。そのせいで、私は……」

「また！スープを作り直したのよ！それも、三千リットルもよ！」

タラもまた怒っていた。

タラの場合は、カルのつまみ食いや話を聞いてくれない他の初級魔術の話ではなく、罰則の内容だった。

タラはエレンの頭を撫でるのを止めると、乱暴に椅子に座り、食べ始める。

「全く・掃除をちゃんとしたのだから、スープまで作らせる事はないじゃない!..: それに、作らせるのならば、アンジエリカ達の方よ!」

タラは不満を思い切り叫んだ。

この発言に周囲の人達は文句を言おうとしたが、タラがギロリと、一睨みすると、そそくさ目をそらす。アンジエリカだけはぶつくさと文句を言っていた。

アンジエリカの文句を無視して話を続けるタラ。不満が相当溜まっているらしく、段々と饒舌になっていく。

「確かに!私が魔術を使ったわ。けど!たかが、つまみ食い程度で、あそこまでする必要なんて、ないじゃない!!」

「そーだ!そーだ!」

カルは嬉しそうにタラを大声で擁護する。

タラは更に話を続ける。

「あの時のドラゴシュツ先生を見て、怖くなってしまって、つい..: やってしまうのは、

仕方のない事じゃない！カルを止める方法はいくらでもあったのだから！： エレン、
貴女は何も悪いことをしていないのだから、気にしなくて良いわよ」

「：： うん、でも：：：： 分かった」

モワノー、タラの言葉によって、少しずつ納得するエレン。

納得したエレンは今までの空腹を満たすかのように、勢いよく食べ始める。そんなエレンを見て、タラ、カル、ファブリス、モワノーも食事を再開する。

「本当に今日は色んな事がありすぎたね」

「そ、そうね」

「全くだ。僕なんか一千リットル作り直しだ！」

「あつはは。本当に捕まるよりはましだろ？」

「それは：： そうだけど：：」

今日の出来事を思い思い語るエレン以外のメンバー。そんな彼らに誰かが近づいてくる。

「やあ、タラ」

近づいてきたのは背の高い大柄の少年初級魔術師だ。その少年はタラに親しげに声をかける。

「厨房では本当にありがとう。貴方が来てくれなかったら、夜までかかっていたところ

だわ！」

タラは熱っぽく微笑みながら少年に感謝を伝える。どうやらタラの話だと、この少年が掃除を手伝ってくれたようだ。

エレンが何か違和感を感じて、ファブリスの方を振り向くと、ファブリスは何故か少年の事を睨み付けていた。

「ファブリス……？」

エレンが呆然としながらも声をかける。ファブリスは暫くの間少年の事を睨み付けていたが、エレンの視線に気がつく、エレンに取り繕くように元の柔和な笑みへと戻る。

ファブリスに睨み付けられた少年は首をすくめていた。

「あんな事何でもないよ。誰だってあの場に居れば、同じ事をするよ」

「そうだよな」

ファブリスは渋々に少年の意見に同意する。

「何日間か、ドラゴシユツ先生を避けた方が良さそうだ。僕に対して相当怒り狂ってるみたいからね」

カルは場の雰囲気を変えるため別の話題に変えた。

「そう言えば、彼奴、怒りすぎて耳から湯気が出ていたよ」

話題を変えたお陰で、先程まで機嫌が悪かったファブリスが、自分からふざけて言うくらい機嫌が良くなった。

「違うわ。湯気が出ていたのはスープよ!」

タラもふざけ始める。

「そうそう!鼻にはセロリの切れっぱなしが突っ込まれて、耳からは人参の欠片が出てたよ!身体中からスープを滴らせて悲鳴をあげながら、カルの後を追っかけていったなあ」

ファブリスはをドラゴシユツ姿を思い出して笑いながら言う。

「あ、あ、彼奴の、あ、後をつけるのは、か、簡単だったわ。だ、だ、だって王宮じゆうに、ス、スープの跡をつけて、ま、まわっているのですもの」

モワノーも笑いだす。

「そうしたら、彼奴、全身が汚れているからって、いきなり執事から石鹸を渡されたのよね!」

「ちようど、まさにカルを捕まえられそうになった時にね!.: 彼奴の顔ったら真っ赤になっっちゃって..」

「そうそう、奴はまさしく、ミルク入りのスープ”って事さ」

(※フランス語で”ミルク入りのスープ”は怒りっぽい、という意味がある)

カルがそう締め括るとエレン以外の五人は、顔を見合わせて笑いこける。

「いやあ、その場面を見られなくて残念だったなあ」

笑いすぎたせいで、涙が出た少年は涙をぬぐう。

「もう止めて！止めて！笑いすぎてお腹が痛いわ！」

「そうだな。僕達もこれ以上笑うとヤバいから、話を変えようか。．．．とところで、エレン。君はさつきから静かだったけど、どこか具合悪い？」

タラの叫びでドラゴシユツの話題は終わった。

ふと、カルは、エレンがずっと黙っていた事に気がついた。そこでカルは、エレンに話し掛ける。けどエレンは、カルが話し掛けても気づかず、上の空でモグモグと噛み続けている。

数秒経った後に話し掛けられていることに気がついたエレンは、慌てて質問に応える。

「．．． あっ!!ううん、なんでもないよ!今日物凄くお腹空いちやっただから、食べるのに夢中になっていただけだよ」

「それならいいんだけど．．．」

エレンの慌てぶりに少しばかり訝しげになったカルとタラ。けど、数秒も経たないうちに気にしなくなった。

「：： あ、そうだ！ロバンとこれからもっと仲良くなりたいたいから、談話室に行かない？」

「良い案だわカル！：： けど、私、反省文を書かされているんだよね：：」

「大丈夫だよ。反省文を書きながら話せばいいじゃん！」

「それもそうね！」

カルの案に嬉しそうに乗るタラ。ファブリスとモワノーもカルの意見に賛同する。そんな彼らを横目に、エレンは何かを考えるかのように、ゆったりと食べるのであった。

広い空間に、机と椅子のセットが数十個分に置かれた部屋、通称談話室に集まったエレン達。

エレン達はどこか良い席がないかと、探していると、アンジェリカ達も談話室に居ることに気づく。

エレン達は、アンジェリカ達の目の届かない遠い席に座ることにした。

理由は簡単で、もうこれ以上厄介事は嫌だからだ。

席に座ると、早速、エレンとタラは反省文を書き始める。

エレンは黙々にやるつもりだったが、あることを思い出したカルは呟く。

「：：：：： なあ、エレン」

「なあに？」

「ソクラテスは本当にファミリエじゃないのか？」

それは、今日の騒ぎの元凶とも言える、お話しだった。

固唾を飲んで真剣な表情となるタラ、カル、ファブリス、モワノー。ロバンと呼ばれていた少年も、その雰囲気にも吞まれて姿勢を直す。

「えっと……エレン。その白い猫は、君のファミリエじゃないの？」

「違うよ！普通の猫だよ！」

恐る恐る訊ねるロバンに、元気よく自信一杯に、連れてきたソクラテスを、皆が見易いように持ち上げるエレン。

ソクラテスをまじまじと見つめるタラ、モワノー、ファブリス、カル、ロバン。一番始めにある事に気がついたモワノーが、息を飲んでから叫ぶ。

「こ、こ、こ、こ、この子は！ファ、ファミリエじゃないわ！め、目が、き、き、金色ではないですもの！ふ、普通の、ね、猫と同じ、う、薄い黄色だわ」

「本当だわ！ギャランと目の色が違うわ！」

タラは自分の肩の上に乗っている小鳥サイズのギャランの目と、ソクラテスの目を何度も見比べながら叫んだ。

「……ほ、本当だ……」

カルは驚きすぎて茫然自失となる。

「ほら！私の言った通りでしょ！」

「そ、そうだねエレン」

呆然としながらも何とか応えたファブリス。

自分の話をやつと認められて嬉しくなったエレンは、あの時からずっと気になっていたあの事を質問する。

「教えて!!」ファミリエ“ って、なに?」

元の状態に戻ったカルが説明を شدした。

「“ファミリエ” って言うのは、魔術師《ソルスリエ》とつての、魂のパートナーさー!」
「魂のパートナー?」

「そう!魂のパートナーさー!どんな時でも側にいて、喜びは分かち合い、悲しい時は寄り添ってくれるからね!ブロンダンもそうさー!」

カルは自分のファミリエである赤い狐を自慢げにみせる。赤い狐のブロンダンはコ
ンツと、元気よく返事のように鳴いた。

「わ、私の、シ、シーバだって!」

モワノーも負けじに銀色の豹を自慢する。銀の豹のシーバは誉められているにも関

わらず、興味なさそうに欠伸をする。

「魂のパートナーかあ。： そうね、私もギャランと結ばれた時、恐怖や孤独をもう感じる事はないと想ったし、愛されている事を実感したわ」

タラはギャランとの出会いをうっとりと思い出しながら語る。ギャランもヒヒーンと鳴いて同意する。

「：：： へえー：：。 そんなに良いものなんだね。 少し、羨ましいなあ：：」

「僕にもファミリエがいて欲しいなあ」

エレンとファブリスが少し羨ましがった。

そんな二人を見てカルは自慢げになり、少し威張るように語り始めた。

「へへ、良いだろう？ 僕とブロンダンとの出会いはね、去年の高等評議会の最中なんだ。ブロンダンが僕を選んだのと同時に、僕もブロンダンを選んだんだ」

「どうすれば、ファミリエは僕を選んでくれる？」

話を聞いているうちに、ファミリエが欲しくなったファブリスは訊ねる。

「それは：： 自然と勝手に解決するものさ。 ほら、成長すれば、背が伸びたりするし、乳歯が抜けるだろ？ それと同じで、時間の問題さ。 気長に待っていけばいい」

カルは安心させるように語る。カルの話聞いたファブリスはほっと胸を撫で下ろす。

エレンはカルの話聞いて、ある理不尽な事を思い出してしまふ。

「…… そういえば、なんで、みんな、私にファミリエがいる前提だったの？ そのせいで私は、最低な人間扱いだったのだけど!!」

語っているうちに思い出して、怒りで叫び机を叩くエレン。

そんなエレンを見て苦笑いするとカルは、宥めるように話し出す。

「そりゃあ…… エレンなら。もうファミリエいても不思議じゃないからなあ……」

「私はここに来たばかりなのによ?」

「えっ?! エレン、君は! 別世界【オートルモンド】人ではないのか?! …… あ、そうか……」

「ほらね」

他の初級魔術師の考え方が、ロバンの驚きっぷりに表れていた。そんなロバンをカルとモワノーが苦笑いする。

もうファミリエの話はいいだろうと、カルが別の話題に変えようとした、そんな時だったー

「カ、カ、カリブリス女史が、わ、私に言ったのよ。ド、ドラゴシュツ先生とすれ違った時、く、く、首に……」

「アハハハ!! アンジェリカ! 演技とても上手だわ!」

「本当ね。あの能無しにそっくりだわ！」

いくら、アンジェリカ達の班から遠く離れていたとはいえ、大きな声で騒いでいたから聞こえてしまったのであろう。

エレン達が居ることを知ったアンジェリカ達のグループが、わざと大きな声で聞こえるようにモワノーの真似をしてきたのだ。

怒りのあまりに言葉を失うエレン達。

アンジェリカ達はタラやエレンではなく、モワノーを標的として選んだのだ。大人しくて何も反撃できないそうだからだ。

魔力ではエレンとタラに勝てない。体格さでは男性陣に勝てない。

だから、モワノーを選んだ。魔力は人並みで、体格的にはモワノーより大きいアンジェリカの方が有利だ。

そんな卑怯な事しかできないアンジェリカ達は会話を進めていく。

「そ、そ、それから、ど、ど、どうしたのよ！あ、貴女が、あ、あんまり、た、た、た、た、たどたどしく喋るから、わ、わ、私は膨らんじやうわ！」

アンジェリカが言い終わる前に、タラの怒りがコントロールが効かない魔術へと変わる。

アンジェリカの体は、ギリギリまで空気を入れた風船のように膨れ上がり、そしてそ

のまま、風船と同じように、アンジェリカは天井まで上がっていく。

あまりの出来事にアンジェリカは、談話室に居る全員の鼓膜を破るほどの悲鳴を上げ続けた。

「…… もー！うるさい！」

そんなアンジェリカを心底うるさそうに嫌がるエレン。

するとエレンは、右腕をチャックを閉めるようなジェスチャーを横向きにする。

髪の毛がボンツと、電気で鳴るのと同時にアンジェリカの悲鳴を止めた。いや、アン

ジェリカの口を強制的に閉めさせたのだ。

エレンの行動に啞然とするなか、アンジェリカの仲間達はエレンに文句を言おうとするが……。

「…… なに？先に手を出したのはそつちだよ…… まさか、私の大事な友達に手を出して、なにもされないと思ったの？」

目の光が消えたエレンに何も文句を言えなくなった。

彼女達は魔術を唱えて宙に浮かび、アンジェリカを天井から力づくで引き離そうとするが、何故か強力な接着剤を塗られたかのか、剥がす事はできなかった。

呪文を唱えて引き離すという方法はあるが、その方法は逆効果になる可能性がある為、却下される。

「みんな！手伝って！」

モニカが助けを求めた。その呼び掛けに、スキレールや他の男子初級魔術師達、カル、ロバンが手伝う事になった。

彼らは全力で引つ張ったのだが、駄目だった。

降りてきたモニカは嘆く。

「駄目だわ。高等魔術師を呼んで来なくちゃ。アンジェリカを天井から剥がすことはできないわ……」

「なんか平らな、ケーキサーバーみたいな物を使えば？」

カルは笑いながら無邪気に提案をする。

「カル！」

あんまりな提案にキャロルは叫ぶ。

「何よその言い方！アンジェリカはケーキじゃないわよ！酷い……酷すぎるわ！……どうにかしなくちゃ！」

憤ったキャロルは叫ぶ。彼女はもう一度アンジェリカを天井から剥がそうとする前に、エレンとタラを睨んでから宙に浮かんで飛んでいく。

それから、十分程あれこれやってみたが無駄だった。そこで遂に、カリブリス女史に

助けを求めた。

カリブリス女史の魔力により、アンジェリカを天井から剥がす事は成功したが、体は風船のように膨らんだままだった。

このままでは不味いので、医務室に連れていく事になったが、それは、アンジェリカを醜態に晒す事と同じものだった。

アンジェリカはローブの先に繋がれて、カリブリス女史によつて連れていかれる。アンジェリカの仲間達も一緒に後を追いつけていく。

その光景を見たタラとモワノーは嗤っていた。エレンは興味なさそうに、反省文を書きに戻ろうとしたが…

「ところで、貴女がしたんでしょ？全くなんて人なのタラ！よくやったわー！」

なんとモワノーが、普通に話し出したのだ。エレンは驚いて立ち止まる。

「おい、モワノー、どもってないじゃないか！」

カルは自分の事のように嬉しそうに指摘する。

「そう？ちよつと待つてて…！」

指摘されたモワノーは、早口言葉を何度も繰り返して確認をする。

モワノーは自分のどもりが治った事を実感すると、喜びのあまり頬を赤らめた。

「…もうどもらない…！どもらないわ!!凄いい！やったー！」

嬉しくなったモワノーは部屋中響き渡る程叫んだ。先程まで、眠そうにしていたシバでさえも、モワノーと同じくらい嬉しそうにし、踊り跳び跳ねる。

「でも、どうしてかしら？ ママは！ ランゴヴィの中でも一番優秀なお医者さん魔術師《ソルスリエ》の所に私を連れて行って、治らなかつたのに？」

我に戻ったモワノーは首をかしげる。

「…… あんたは一度痛い目に遭う必要があつたのよ。あんたがどもると私は…… 何て言うか…… 殺したくなるのよ」

そのの質問に答えたのはタラだった。残酷的な言い方にエレン達はドン引きをする。けど上機嫌なモワノーは、冗談だと思ひ微笑む。

「じゃあ、私は貴女に感謝しなきゃならないって訳ね。凄いわ！」

モワノーは歌い出す。ゆっくりと、本調子を取り戻す為に。

見事な歌いっぷりにカルが称賛の声を上げた。

「ブラボー!!」

「凄い！」

「とても綺麗な歌声だよ」

「凄じゃないか！」

「ええ、とても素敵よ！」

「…… もっと聞きたい？」

皆の称賛に照れながらも嬉しくなるモワノー。

「…… いや、充分だよ。兎に角良かった」

カルはモワノーの喉を気遣う。歌を止めたモワノーは興奮が抑えきれずに、今度は鼻唄をしだす。

まだまだ色々な問題はある。けど、今は、モワノーのどもりが治った事を、心よりお祝いしようと想うエレンであった。

第14話

日常

モワノーの吃りが治った次の日。

エレンはタラの部屋で、別世界「オートルモンド」の事を勉強をしていた。タラも別世界「オートルモンド」に関する本を読んで勉強している。

実はこの行動自体も昨日からの罰則の内容である。

反省文を読んだシャンフランは、エレンには別世界「オートルモンド」の事を勉強をする事を義務付け、タラには悪魔の呪いが解けるまでの間、大人しく自室で待機する事になった。

本来ならば危険な状態であるタラは、大人の監視が必要なのだが、エレンを近くに置いておけば大丈夫だろう、と放って置かれていた。

でも、その対応の方が良かったのだ。

タラは悪魔の呪いの影響で怒りやすくなってしまっている。だからと言って、独りで過ごしていれば良からぬ事を考え、精神的に疲れてしまい、もつと悪い方向に行ってしまう。

大人の高等魔術師を側に置いたら置いたで、何かの拍子で怒ってしまうと、最悪の場

合殺してしまう可能性が少なからずある。

けど、友達であるエレンと一緒になら、怒らせる可能性はほぼほぼない。

こうして、ゆったりと穏やかに、二人だけの空間を満喫するのであった。

コンコン

部屋の主であるタラが返事する前に、ガチャとドアが開かれる。タラは少しムツとし、エレンはムツとしたタラを警戒する。

「タラ、エレン、遊びに来たわよ!」

二人だけの空間に、吃りが治つてからずっと機嫌の良いモワノーが、ファミリーエのシーバを連れて遊びに来た。

「: : 何だモワノーなのね。: : もう! 入ってくる時は返事するまで待つてよ!」

「えへへ、ごめんね。昨日から気分が良くて: : ずっとテンションが上がりばつなしなの」

部屋に入ってきたのがモワノーだと分かると、タラはホッと一安心をする。けど、友達だからとは言え、勝手に部屋に入ると心臓に悪いので注意する。

注意されてもモワノーは、ニコニコ笑顔を絶さなかった。それ程吃りが治った事が嬉

しいのだ。

ニコニコしているモワノーを見て、タラはこれ以上怒る気は出なかった。タラは溜め息を吐きながら、モワノーの分のお茶を用意し始める。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

モワノーはタラが用意してくれたお茶を嬉しそうに飲み始めた。ある程度飲むとコップをテーブルの上に置く。

「病気が治って良かったね。モワノー」

「ええ。ありがとうエレン」

エレンは、モワノーがコップを置いたのをみはらかってから話し出す。モワノーは先程よりもニコニコしながらお礼を言う。エレンはその姿を見て心底嬉しそうに笑った。

ニコニコしていたモワノーだったが、急に真面目な表情になると、タラとエレンの顔を伺う。不思議に思ったエレンとタラは首をかしげた。そんな二人の様子にモワノーはクスツと笑ってから語り出す。

「昨日は本当にありがとうタラ、エレン。タラはアンジェリカをやっつけてくれたし、エレンも私の為に怒ってくれてもの。ふたりとも本当にありがとう」

「何言ってるんのモワノー！そんなこと当たり前じゃない！私達は友達なのよ！」

「そうだよ！タラの言う通りだよ！友達を助けるのは当たり前だよ!!」

「うふふ。二人ともありがとう。でもこれは、私が言いたかった事なの。気にしないで」

エレンとタラが必死に言い訳する姿に、モワノーは幸せそうに笑いながら見ていた。

「もう、タラもエレンも、気にしすぎだからこの話はお仕舞いにするね。ところで、罰則はどう？・順調？」

「私は勉強するだけだから大丈夫。でも、覚えられないと思う」

「私はこの部屋から出なければ大丈夫よ。けど・・・食事の時間が問題ね。突っ掛かってくる人がいるから、耐えられるかしら・・・」

モワノーの質問に顔をしかめるタラとエレン。

モワノーはそんなふたりに同情をする。特にタラに関しては、他人にも問題があるからだ。いや、タラとその仲間達にとつては、他人の方が問題であると考え、何とかしないといけないのはそっちの方だと思っていた。

「そうね・・・もうここで食事をする許可を貰っておく？」

「貰えるものなら貰いたいわ。でも、許可をくれないでしょうね。ファミリエのギャランでさえも、ドラゴツシユがうるさかったらしいわね。こんな状態で許可をくれるのかしら・・・はあぁ・・・」

タラは今ある幸せが逃げてしまう程の大きなため息を吐いた。そんなタラを見てエ

レンは同情しながら呟く。

「何でタラを苛めるのかな？何がそんなに気に入らないのかな？」

「そんなのこつちが知りたいわ!!」

エレンの言葉に怒鳴るタラ。

エレンはびつくりをして黙り、タラもエレンを驚いた姿を見て、猛反省する。

「ご、ごめんなさいエレン。貴女は何も悪くないのに、当たってしまったて..」

「う、ううん..。仕方ないよタラ。タラは今、追い詰められているだもん。気持ちに余裕が持てないから、仕方のないことなのよ」

「そう言ってくれてありがとうエレン..。悪いけど、これ以上この話を続けるとイライラして気持ちが悪くなるから、違う話に変えるね。カルとファブリスは来なかったけど、何か予定があったの？」

「そうねえ..。廊下でばったり会ったけど、カルは他の友達と遊びに行くって言うていたらたわ。ファブリスは図書館で勉強をするって聞いたわ」

「あの男の人は？」

「あの男の人？あの男の人って誰？..。もしかして、ロバンの事？」

エレンからの曖昧な問いに、首をかしげながらも何とか答えるモワノー。答えても反応しないエレンにモワノーは、更に頭を悩ませるが、エレンが彼の名前をまだ覚えてい

ないだけの事に気がつく。

「やっぱり昨日会った男の人でしょ？その人の名前はロバン・マンジルよ。…彼はまだ私達とあまり仲良くないから、来ないわ。だって、こうしてゆっくり話せる場所は、タラかエレンの部屋だけですもの。異性の部屋に遊びに行くのって、結構難易度が高いものよ」

「そっか…。そうなのね…。わかった。彼はロバンという名前なのね」

「ええ、そうよ。頑張つて覚えてね」

物忘れが激しいエレンを応援するモワノー。

「そっか…。カルは元々この世界の住民だから、他に友達いるもんね。しかし…。いつも私達といたから、何だかいないと寂しいわ」

「うん、私もなんだか寂しく感じる。やっぱりずっと一緒に居たからかな？」

「そうよね…。私と会う前から、一緒に居ていたもんね」

タラが寂しがり始めると、エレンにも伝染して寂しくなり始める。モワノーはタラ達との出会いを沁々と思ひ出して共感をする。

「しかし…。ファブリスはここで勉強をしなくて大丈夫かしら？私のせいで嫌がらせを受けなければいいのだけど…。」

「そうだよね。ここで勉強をすれば良いのに！」

「大丈夫よ。ここで勉強をしないという事は、もう周囲に溶け込めたという事よ。ほら、男の子の方が周囲に溶け込みやすいじゃない!」

「そうだよね。男の子の方が馴染みやすいよね。… 本当に羨ましいわ。私なんか… アンジェリカのせいだ!!」

ファブリスの事を純粹に心配していたタラだったが、アンジェリカの事を思い出してしまい、怒り狂ってしまう。このままだと、また諭えを使ってしまう前にタラは、深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「… ごめんなさい。また暴れそうになってしまつて…」

「大丈夫よタラ! まだ被害は出ていながら!」

「本当に… あの意地悪な人たちをどうかしないと駄目だね…」

モワノーはタラを励まし、エレンはボソツと呟いた。しかもエレンの呟いた言葉が、タラに聞こえてしまった。

「そうなのよ!! 私がこうやってイライラするのも、全部あいつらが悪いのよ!! アンジェリカもそう! 子分達もそう! その教師であるドラゴツシユもそう! 大体、ファミリエなに入れても良いのに! ギャランは入れてはいけないって! 単純に私の事が気に入らないからでしょ!!」

「まあまあ、怒る気持ちは分かるけど落ち着いて。ギャランだって、今ここに居るから良

いじゃない。…… エレン余計な事を言わないで。せつかく落ち着いていたのに……
「ごめんなさい……」

モワノーはタラを宥めながらエレンを小声で叱る。エレンはシュンと首を垂れる。
話を变えようとモワノーが考えていると、ある事に気がついた。

「…… そう言えばタラ、その黒のラブラドルのマニトウーことなのだけど……」
「マニトウーがどうかした？」

モワノーは真剣な表情で訊ねる。

モワノーの雰囲気呑まれたタラは、怒りを忘れて唾を飲み込む。

「マニトウーはファミリエではないのよね？」

「ええ…… そうだけど……。それがどうかしたの？」

「トラヴィアの王宮には、ファミリエ以外の動物は連れて来てはいけないのよ。エレンもソクラテスを連れて来ているけど、皆勘違いしているから一応大丈夫よ。でもタラは言い訳出来ないわ。どうするの？」

「あ…… そうだった……。どうしようかしら……」

エレン、タラ、モワノーは三人一斉に考え込む。

暫くすると良い案を思いついたモワノーが、声高く話し出し始める。

「じゃあさあ！ファブリスにファミリエができるまでの間、預かってもらうのはどう？」

ファブリスは幼馴染みだから、安心して預けられると思うわよ。それに、ファブリスもファミリエを欲しがっていたから、快く引き受けてくれるわよ！」

「それは名案だわ！」

「ファブリスなら安心できるもんね」

タラ、エレンもモワノーの案に賛成する。特にタラは問題になる前に解決できて心底喜ぶ。

「そうと決まれば！ マニトウーを説得よ！ マニトウー！ 悪いんだけど、ファブリスのところで暫くの間預かって貰うわよ。相手はあのファブリスだから、大丈夫でしょ。…… マニトウー聞いている？ ねえ！ マニトウーってば！」

タラは早速、ソファアで眠っているマニトウーの前にしゃがみ込み説得し始める。

その光景にエレンとモワノーは首を傾げた。説得をするならマニトウーではなく、世話をしてくれるファブリスの方が先だと思ったからだ。それに、快く引き受けてくれるのは予想であって、まだ話してはいないから、引き受けてくれるのかは分からないのである。

素っ気なく眠っていたマニトウーがウーウーと唸りだした。タラの話が気に入らないようだ。唸り声から次第に吠える。その様子はまるで何かを伝えたいようであった。

マニトウーは吠え続けていたのだが、諦めたのか吠えるのを止める。しかし、口はま

だ。パクパクと動いていて、どうしても諦めたくないようだ。暫くの間口をパクパクと続けていていると……

「……ウー……ウー……。呪われた犬め！やつと人間の言葉で話せるようになったわい」

何とマニトウーが人間の言葉で喋り出したのだ。

その声は老人のようにしわがれていた。その光景にエレンとモワノーは驚きのあまり、開いた口が塞がらず、一言も発する事ができなかった。逆にタラは全然気にしていなかった。タラはマニトウーがただの犬ではない事を知っていたみたいだ。

「ねえ！タラ！犬が喋っているよ!!」

「ええ、そうよ。だってマニトウーは、私の曾お爺ちゃんですもの」

「マニトウーが貴女の曾お爺さん!?それってどういうこと!」

「人間として話すのは初めましてじゃな。お嬢さん方。タラの代わりにわしが説明しよう」

興奮して早口になりながら質問をするエレンとモワノー。タラは遅かれ早かれこうなる事が分かっていたから冷静だった。マニトウーもタラと同様の考えなのか冷静だった。

「わしの名はマニトウー・ダンガン。タラの曾お爺ちゃんだ。でも曾お爺ちゃんと言わ

れてると、年寄りに感じてしまうから、わしの事はマニトウーと気軽に呼んでくれ」

「でも、何で、マニトウーさんは犬の姿をしておられるのですか？」

モワノーがごもつともな質問をする。

マニトウーはその質問に、尻尾をだらんと下げた。あまり聞かれたくない質問のようだ。

「実は……永遠の命を老い求め、呪文を唱えたばかりに……」

「失敗したんだね」

「そうじゃ。失敗したんじゃ」

ぼつさりと言うエレン。そんなエレンの言い方にモワノーは焦ったが、当の本人は気にしていなかった。いや、気にする余裕がなかっただけだ。モワノーは雰囲気を変えるため、話を進める。

「じゃ、じゃあ、ファブリスのところに預ける事は出来ないわ。だって犬の姿だけでも、家族をそう簡単に預けてはいけないわ。例えば相手が幼馴染みのファブリスでも」

「で、でも！ そんな事！ 許されるの!?!」

タラが凄いい剣幕でモワノーに寄り詰める。

それでもモワノーは一步も引かなかった。

「いや、だって、家族でしょ。そうそう簡単に離れては駄目よ。ここまで一緒に来たのだ

から、また許可を取れば良いのじゃないの」

「そうだよ！家族は一緒の方が良いよ!!」

「タラ！わしがここまで一緒に着いて来た理由を忘れてしまったのか?! わしはタラを守る為に来たのじゃ!」

エレンとマニトウーも必死の形相で、モワノーに意見に賛同する。特にマニトウーは人間の言葉を忘れ、途中途中犬として吠えてしまう程だ。

モワノー、エレン、マニトウーの必死の説得も虚しく、タラは鼻にしわを寄せて納得をしていなかった。

「そんな事を言ったって！ドラゴツシユが絶対に納得をする訳ないじゃない!!」

「この際ドラゴツシユの事は放っておきなさい！他の先生から許可を取れば良いだけの話でしょ!! 先生は他にもたくさん居るからね!」

「そうじゃ！何なら、シエムに許可を取れば良い！シエムはわしの事を知っておるしな!」

「そうよ！シエム先生はランゴヴィ王国一の高等魔術師よ！シエム先生が許可すれば、他の先生は文句を言えないわ！ドラゴツシユの意見何て、道端の石ころと同然よ!」

「そうなの……? なら……良いわ。許可さえ取れば、マニトウーと離れる理由は別ないし……」

モワノーとマニトウー説得の甲斐あってタラは納得した。その様子にモワノーとマニトウーは嬉しく笑う。特に口を出していないエレンでさえも喜んでいた。

「じゃあ折角だし、お菓子があるんだけど、食べない？」

「食べるわ。ありがとうエレン！」

「良いわね！じゃあ私は、部屋の主らしく、お茶を用意するわ！」

「わしも食べても良いかね？」

「犬の体にクツキー……大丈夫なの？」

「大丈夫じゃよ。人間用の食べ物によく食べるからな」

「そうなんだ」

エレンは雰囲気を良くなったところに、自分が焼いてきたクツキーを取り出す。機嫌が良くなったタラは、人数分のお茶を用意する。

その後は、タラが怒るなどの特に問題が起きる事もなく、楽しくお茶会をするのであった。

しかし、平和な日々が今日で最後になってしまう。

翌日、タラが誘拐されてしまったのであった。

第15話

誘拐されたタラ

タラが居なくなつたのは、エレンとモワノーが遊びに来た次の日のことであつた。

いつものように、エレン、カル、ファブリス、モワノーが食堂の前に集まっていたのだが、タラだけが来なかつた。

何かあつたのか？という心配よりも、来なくなつて当然だよねつていう同情だつた。毎日陰口を叩かれれば誰だつて、行きたくなくなるのは当然のことだからだ。

四人で仲良く食べたあと、タラとマニトウとファミリエであるギャランのご飯を持つて、部屋に遊びに行つたのであつたが……

部屋の呼び鈴を押しても何も反応はなかつた。何度も何度も押したのだが、一向に反応は来なかつた。この時から四人は何かあつたのではないか？と胸騒ぎをする。四人は考えながら呼び鈴を押したりしていたのだが、部屋に居ても嫌がらせがあつて、用心しているのじゃないの？あの意地悪な人達ならしそうだしと、エレンがどこか希望的観測で言うど、カル、モワノー、ファブリスは直ぐ様納得をして、自分達の名前とタラの名前を部屋の前で大きな声で叫んでも何も反応はなかつた。

そんな彼等の前に、気象魔術師のデリアがファミリエのカササギを肩に乗せて現れ

た。

「あら、貴方達……確か……タラのお友達だったわよね？」

「うん、そうだけど、今はそんなことよりも！早くタラの部屋の鍵を開けてよ！」

「そんなに慌ててどうしたのかしら？状況を説明してくれない」

「あのですね！実は……」

急かしているカルの代わりにモワノーが説明をする。説明を聞いていくうちにデアアの顔は、青ざめていく。

「わ、分かったわ。急いでシエム先生を呼びに行くから、待っててね」

言い終わる前にデアアは走り去る。

シエムが来るまでの間、残された四人は、タラが寝ているだけでありますようにと、神に縋る様に祈るのであった。

答えは結局、四人の胸騒ぎ通りであった。

部屋中を隈無く探しても、タラ、マニトウー、ギャランはどこにもいなかった。部屋は特に荒らされた様子はなく、突然神隠しに遭ってしまった様に消えてしまった。

「タラも……誘拐されてしまったのか……。すまぬタラ！」

「タラも……？」

悔やむシエムにエレンは訊ねる。かなり気になる言葉を呟いたからだ。呟きを聞かされたシエムは、エレンをぎよつとして見ていたのだが、素直に説明をする。

「ああ……そうじゃな……。ここ、ランゴヴィ王国では、去年から初級魔術師達が誘拐されてしまっていたのじゃ」

「えっ……？ 去年からこんな事件があつたの？」

「うん。あつたよ。四人ほど誘拐されたんだ」

「そうだったんだ」

カルはシエムの話に補足をする。事件を思い出したモワノーは誘拐された子供達に同情をし、ファブリスはそんな凶悪な事件が起きていたことに驚いた。

「ああタラ……!!私……私……」

探していたデリアが、見付からなくて泣き出してしまふ。その泣き声には悲痛な叫びが入っていた。

この場に居る全員が悲しみに暮れる中、シエムが切り出す。

「皆の者、気持ちに分かるが、いつまでもこうしておつたら先に進まん。わしが責任を持つて調査を進めておくから、君達は別室で休んでいなさい」

「でも……!!私は……!!タラのボディガードとして、最後まで探す義務があります!」

「私も友達として探しにいききたい!……」とところで、タラって、良いとこのお嬢様?」

心配をしていたエレンだったが、デアリアの発言に興味を持ってしまいらこの場の雰囲気はそぐわない質問をしてしまう。

「はい。そうですよ」

「エレン……。タラのお婆さんは、別世界【オートルモンド】の世界の有名な人と、謁見の時、言った筈じゃったが……」

エレンの物忘れと空気の読まなさに、シエムは呆れて果てていた。思わずため息をつきたくなったが、ドラゴンなので下手に息を吐くと、一緒に炎を吐いてしまう可能性があったので我慢するのであった。

そんなシエムの苦労を知らないエレンは、タラの搜索の手伝いができない不満に頬を膨らませていた。エレンだけではなく、デアリア、ファブリス、カル、モワノーも納得はしていなかった。

「そうですか!ならば私は、勝手に探しに行きます!イザベラ様に頼まれている身として、何もしないっていう選択はあり得ません!……そちらがそういうお考えでしたら……私はタラが見付かるまで、ここには戻っては来ません!そのつもりで」

「待つんじゃない!デアリア!」

言うだけ言ったデアリアは、シエムの返事を聞かずに部屋を出ていく。シエムは後を追

い掛けようとしたが、かなり哀しそうな表情をしたファブリスによって止められた。

「シエム先生……。デリアはずっと、タラの小さい頃からずっと一緒に過ごしていたんだ。その気持ちを……。無視しないでよ。それに……。大人で、ボディガードを務める程強いものだから……。探しに行かせてあげても良いじゃないのですか?」

「うーむ……。分かった。デリアは認めよう……。しかし!お前さん方は駄目じゃ!」
「えー!?ここは良いよっていう流れでしょ!」

「馬鹿もん!子供にそんな危ないことをさせるか!エレン!御主は、力を持っているかっていい気になっておる!兎に角御主達は部屋で待機じゃ!いいな!」

必死にエレンはせがむが、シエムは聞く耳を持たない。ファブリス、カル、モワノーも高等魔術師相手に何も言えなかったが、目で必死に語っていた。けどシエムは、その想いを無視する。

エレンだけは突っ掛かろうとしたが、カル、ファブリス、モワノーに連れられて部屋の外に出る。

「もう!みんな!何でそんなに言うことを聞けるの!?手伝うくらい何が駄目なの!」
「僕達だって、探しに行きたいよ。けど……。高等魔術師であるシエム先生がああ言っているのだから、従うしかないだろう」

カルは悔しそう言うが、エレンには効かなかった。寧ろ怒りが増えるだけだった。

「こんな時に言うことなんて聞きたくないよ！」

「そうは言っても……」

「僕達はまだ初級魔術師だし……」

カル、ファブリス、モワノーはもう諦め気味だった。カル達が怖じ気づくのは仕方ないことであつたが、今のエレンに気にする余裕が無かつた。

力があるのに何もできないっていうことは、屈辱的なものである。まるで大切な誰かが牢屋に入れられてしまつて、その人が入っている牢屋の鍵を何とか手に入れられたのに、適当な理由で開けてはいけないという焦れつたさが生まれてしまつているのだ。

エレンが一人で行動をしようとした瞬間……

バシツ！

エレンの腕をカルが力強く掴んだ。

「離してー！」

「離さないよー！」

エレンは怒鳴つて嫌がつたが、カルも同じくらい音量で拒否をする。二人は互いに睨み合う。

数分間に及ぶ睨み合いの末、カルから切り出す。

「そりゃあ……力を持っているエレンには、歯痒い気持ちになるのは分かるけど……でも、どうやって探すんだよ！どこを探すんだよ！目星はあるのか！」

「そ、それは……」

カルにもっともな疑問を言われて、しどろもどろなるエレン。そこにカルが畳み掛ける。

「そもそもどうして誘拐されたのか？どうやって誘拐されたのか？そこから理解しないと、意味ないだろ！」

「じゃあ……タラはなんで誘拐されたの？」

話を聞く気になったエレンは質問をする。今度はモワノーが説明を始める。

「タラが誘拐された理由は分からないけど、誘拐された四人には共通する点はあるのよ。誘拐された子供達は皆、強い魔力を持っているのか、何か特別な力を持っているのか。そして、全員の親が高等魔術師であること」

「タラが誘拐されたのは、強い魔力を持っているから？」

「そうね。その通りよ。でも、それだけではないわ。タラの祖母であるイザベラは、高等魔術師よ。イザベラの娘ではないけど、孫娘ではあるわ」

「二人、小人だけは例外だったけど……」

カルが難しい顔でモワノーの話に補足する。

「じゃあ！共通点は無いの!？」

「ううん。誘拐された小人……確か、ファニールっていう少女は、強い魔力を持っていた筈だわ。でも……彼女の親は高等魔術師ではないけど……」

「ということは……強い魔力を持っていれば、誰でもいいってこと？」

「ずつと話を聞いていたファブリスが質問をする。この事件について考えていた為、ファブリスの顔の眉間に皺は、この先も痕が残ってしまうのではないか？と思う程寄っていた。

「そうかもね……」

「だとすると、エレンも大分危なかったのかも……。そう言えば、何でファミリエごと誘拐したんだ？」

「そりゃあ、ファミリエが誘拐の邪魔をするからだろ。逆にファミリエが誘拐されそうになったら、魔術師だって守る為に戦うし」

「なら……何で、争った形跡が無いんだ？それとも、タラの件だけ？」

「ううん。誘拐された子供達全員、争った跡は無いわ」

「そうなんだ……。結構難しいなあこの事件……」

推理小説をたくさん読んでいるファブリスでさえも、お手上げだった。それでも四人はその場で話し合っ、考え続けるのであった。

「タラが誘拐されたの本当のことかい!？」

四人が考えていると、新しく友達になったばかりのロバンが、急いで現場に向かってきてくれたのだ。髪を振り乱して、息を切らすその姿は、相当必死だったのだと感じさせる。

「ええ……… 本当のことよ」

四人を代表してモワノーが悲しそうに答えた。

その姿にロバンは、認めざるを得ないかった。関節が白くなる程拳を握り締めていた。彼もまた、相当悲しくて悔しかったのであろう。

エレン達は自分達以外にも、タラを心配してくれる人が居て嬉しくなったのだが、それ以上にタラ本人が居なくて悲しくなる。

「へえ。あの子やっと思わなくなったの」

今度は呼ばれてもいないのに、アンジェリカがニヤニヤと嗤いながら、現場にやって来たのだ。モニカやキャロルといった、自分を連れて。

タラが誘拐されたことが、もうあつという間に、王宮中に広まっていたのだ。

「アンジェリカ……この大変な時に何しに来たんだよ!!」

カルは思わず殴り掛かろうとしたが、何とか我慢して怒鳴ることだけですんだ。

エレンとロバンは既に襲い掛かろうしていたのだが、エレンにはモワノー、ロバンにはフアブリスが何とか止めていた。でも、その二人もアンジェリカ達が憎くて憎くてしょうがなかった。

アンジェリカは彼等を馬鹿にするように、鼻でフンと息を鳴らす。

「だって、あんな危険な奴、今まで放っていたのがおかしいのよ！ やつと解放されたわ。これで安心して過ごせるわね」

「そうよねアンジェリカ。私達の平和がやつと訪れたのよ！」

「やったわ！ これで平和な日々が過ごせるわ！ 誘拐されたというよりも、元の場所に帰されただけじゃないの」

アンジェリカ達は好き勝手に言う。

そんな彼女達の行為は許される訳もなく、堪忍袋の緒が切れた五人は、一斉に襲い掛かかるのであった。

ガツシヤン

牢屋の鍵が閉まる音が鳴り響く。

エレン、カル、モワノー、フアブリス、ロバンの五人は暴れたことにより、牢屋に入られてしまった。

特にエレンの暴れっぷりは凄かった。

雷を何発も何発も落とし、辺りをしっちゃかめっちゃかにしてしまい、アンジェリカ達を魔術が無ければ、全治半年の大怪我を負わせる。更に駆け付けてきた衛兵にも攻撃してしまった。もう彼等にとって、アンジェリカの味方をする者は、全員敵だと思う程怒り狂っていたのだ。暴れ狂う五人に衛兵の攻撃が過激になっていくが、僅かな隙間があれば、エレンは避けられるのだ。そのせいで捕まえるのに手間が掛かったのだ。

捕まえられてしまったエレン、カル、モワノー、フアブリス、ロバンはフアミリエと共に、反省するまでの間、牢屋に閉じ込められることになった。

でも彼等にとって反省する気は、これっぽっち無かった。例え、これが原因で牢屋にずっと入ることになっても。

謝るように促す衛兵、絶対に謝る気は無い五人。

彼等の攻防は三日間に渡るのであった。

「君達、いい加減にしたらどうだ？」

「友達が居なくなつて、気持ちが普通ではなくなるのは分かる。でも！君達のやったことは犯罪だ」

「そうよ！そうよ！アンジエリカ達に謝りなさい！」

「可哀相なアンジエリカ、キャロル、モニカ。あんた達のせいです！ずっと悪夢にうなされてるのよ！」

「可哀相に、雷の音を聞いただけでも気絶してしまう程なのよ！」

「人殺し！この悪魔！」

「！！謝れ！謝れ！謝れ！謝れ！！！！」

衛兵とアンジエリカ側の女性初級魔術師達が謝るように促す。衛兵は諭すように言うだけなのだが、初級魔術師達は彼等が、魔術を使えないことに調子に乗り、ずっと口汚く叫び続けた。

エレン、カル、ファブリス、モワノー、ロバンは何も言わずに黙っているが、睨むことだけは絶やさなかった。

もう彼等にとって周りには味方がいないからだ。

衛兵達でさえも、口は優しめなだけであつて、結局はアンジエリカの味方であるからだ。

五人は、毎日見たくもない顔を見せられた苛立ちとタラを探しに行けないもどかしさで、どうにかなってしまいそうであった。

そんな彼等に、救いが、突然やって来る。

カツン

カツン

カツン

ヒールを履いた誰かが、ゆっくりとわざと音を立てながら、エレン達の後ろから近付いてくる。

驚いたエレン達は後ろを振り向く。この牢屋には、エレン達五人しか入っていないからだ。

一番驚いたのは衛兵だった。

エレン達が入れられているこの牢屋は、魔術は使えないうえ、周りには他の衛兵が常に監視をしている。だから、逃げようにも、近付こうとしても、誰かしらに見付かってしまうのだ。そもそも、牢屋の中に自ら入るなんて、馬鹿のすることだ。そして、この牢屋に自ら入った人物は、とても印象に残る人であった。

美しく長い金髪。

宝石の様に輝く紫色の瞳。

大人の女性らしく、グラマラスなボディ。

白い帽子をかぶり、長い金髪の毛先を赤いリボンで結わえて、瞳と同じ紫色のドレスを纏い、室内なのに日傘を差している。

まるで絵の中からそのまま飛び出してきた美女。

目を奪われた衛兵は、ただただ女性を見ていることしかできなかつた。急に現れた女性が好みに衛兵は唾を飲み込んでいた。だが、一人の衛兵は仕事を思い出す。

「き、貴様……どこから……入ってきたんだ！ 答えろ！」

勇敢に女性に槍を向けるのだが、女性はわざとらしく悲しい顔をしていた。もうわざとらし過ぎて、誰もが面白がっている様に見えなかつた。

現に向けている槍は恐怖で小刻みに震えていた。

女性は衛兵にも女性初級魔術師達にも興味は無く、エレン達のことしか見ていなかった。

「初めましてと久し振りね」

エレン、カル、モワノー、ファブリス、ロバンは女性の言葉にきよとんとする。初めましては兎も角、会ったことはないのに、久し振りと言いだしたからだ。

「僕、お姉さんと会ったことあるかなあ？ 可笑しいなあ！ こんな美人さんに会ったら、忘

れたくても忘れなれないのに！」

「うふふ。有り難う。貴方とは初めましてよ」

カルのジョークが気に入ってくれたのか、女性は上品に笑う。

「では、誰に対して久し振りなのですか？」

疑問に思ったモワノーが質問をする。初めはいきなり入ってきた女性に、不信任を抱いていたが、カルと普通に話す姿を見て大丈夫そうだと思つたからだ。

「それはエレンよ。エレン・ふわふわ頭・オーレウス。久し振りね。いつだったかしら？
確か……博麗神社で会つたことがあると思うのだけど……」

「私が……貴女と会つたことがあるの？」

当の本人は首を傾げるだけであつた。でも女性には、エレンがそういう反応をすると予想していたからか、特に気にしてはいなかつた。

「ええ。ほら、博麗霊夢は知っているでしょ？」

「博麗………霊夢……… ああ！霊夢は知っているよ！昔遊んだことあるもん！」

思い出したエレンは嬉しそうにはしゃいだ。常に忘れるエレンにとつては、思い出すことは至難の技であるからだ。しかも思い出した内容は楽しいことであり、余計に嬉しく感じるのだ。

「思い出したみたいで良かったわ。なら、一度は会つたことがある筈よ。だって私は、博

麗靈夢の保護者みたいな者だから」

「と言うことは…… お姉さんは…… 幻想郷の人？」

エレンの昔話に靈夢の話が出ていたことを思い出したカルは、恐る恐る女性に訊ねた。

「ええ、そうよ。私の名前は八雲　紫【やぐも　ゆかり】。幻想郷を愛し、幻想郷を守る者よ」

「げ、幻想郷だと!？」

衛兵の緊張が更に高まる。

今の別世界【オートルモンド】にとっては、幻想郷は変わった魔術を使う、特別強い魔力を持ったエレンの故郷。そんなエレンに恐れを抱いてる別世界【オートルモンド】の住民にとつては、エレンの様な魔術師が他にも居ることに、恐怖を感じて、取り調べと監視をするべき場所だと認識している。

「お、お前の目的は何だ!？」

「幻想郷の場所を教えろ!」

「我々には魔術師【ソルスリエ】を保護する義務がある!」

衛兵達が恐怖に負けないように必死に怒鳴るのだが、紫は鬱陶しそうに見るだけであった。

「私の目的は幻想郷が平和に、穏やかに、過ごせる様にすること。だから、貴方達には興味は無いわ。それに……幻想郷は全てを受け入れる場所よ。貴方達のように、自分達が気に食わないものは排除しようとする者はいないから、保護する必要はないわ。そんな貴方達に偉大なる幻想郷を教える訳ないでしょう」

紫は淡々と答えているが本気であった。

紫からは冷たい殺気を流れていた。本能でこの人を怒らしてはいけないと、この場に居る全員が悟った。衛兵達が黙ると、紫は元の笑顔に戻ってエレン達と向き合う。

「では、話を進めましょうか。貴方達は……タラを助けに行きたくはないかしら？」

「行きたい！」

「行きたいです！」

エレンとロバンが風のようなスピードで返事をする。

「それは友達想いで良かったわ。では早速、準備をするから待っていてね」

話がトントン拍子に進んでいくことに紫は喜びながら、準備を始める。しかし……

「待つてください！」

ファブリスが異議を唱えた。

「あら、何故なのかしら？私は貴方達の力になろうとしているのよ」

疑問を訊ねる紫は不思議そうに首を傾げる。しかし、カル、ファブリス、モワノーに

は本当に不思議そうには見えなかった。それもその筈、紫も疑われる前提でここに来て
いるのだ。

「いや……都合が良すぎるでしょ」

フアブリスが当たり前のことを言う。

「僕達を助けても何のメリットは無いからね」

カルももつともなことを言う。

「そうねえ。本当なら嬉しいのだけど……。まだ会ったばかりの貴女を、どうやって信じ
ればいいの？」

疑うモワノーは当たり前だ。

疑う三人を気にせず、紫は語りかける。

「確かに、私のことを信用できないのは当然のことよ。でも……貴方達が大変だった時、
助けてくれなかった大人達は信頼できる値の人物なのかしら？」

「……どういうことだ？」

反応したカルに紫はほくそ笑みをする。

「だって、大人は、子供を守り、教育するのは当然のことなのに、貴方達を苦しめたアン
ジェリカという少女には、お咎めというお咎めが無かったわね。貴方達も暴力で解決し
ようとしたことは、いけないことなのだけれど。そもそも、アンジェリカという少女が、

貴方達に喧嘩を売らなければ、始まらなかつた訳じゃない。それなのに、ろくに教育をしなかつた。貴方達はそんな大人を信頼できるの?」

紫に今までの不満を言われて、カル、ファブリス、モワノーは黙つた。それに紫の言っていることは、正しかつたからだ。特にエレンの領きは半端なかつた。

「私には、とても信頼できる人物には見えないわ。それに、アンジェリカのような人物が生まれるのは、どうしてだと思ふ?」

誰もその質問には答えられなかつた。けど紫にとってはこの状態も想定済みなので、特に気にしてはいなかつた。寧ろ真面目に聞いていることに喜んでいた。

「それは、大人達は全て悪いのよ」

「大人達が、全て悪い?」

「そうよ。大人達が差別をするからよ。例えば、非魔術師「ノンソ」に対しては、馬鹿にする。それは魔術が使えないから。でもおかしくないのかしら? たかだか魔術が使えないだけなのよ。そんな理由で人を馬鹿にしているものかしら? 貴方達魔術師よりも、弱い存在だとしても。何をそんなに気にしているの? 何で放つておくことはできないの?」

更に紫は語り続ける。

「じゃあ、強くなれば尊敬される存在になるのかしら? 違うわよね。エレンとタラは力

が強すぎて、苛められているんじゃない。タラはコントロールできていないから、怖がられやすくて、エレンは問題なんて無かった筈よ。それなのに、怖がられていることはどういうことかしら？」

「結局は大人って、自分達の都合に良い存在と、自分達のストレスを解消させる存在がいて欲しいのよ。現に非魔術師「ノンソ」は弱いから苛められている。エレンは自分達のやり方に従わなくて、未知の魔法だから、怖がられている。未知と恐怖って、結構似たもののよ」

「そんな大人に、差別は駄目って言っても、説得力は無いでしょ。貴方達は、口先だけの人間の言うことを聞けるかしら？少なくとも私は聞かないわね」

「では……もう一度訊ねるわ。信用できない私の言うことを聞いて、すぐタラや誘拐された子供達を助けに行く？それとも……大人達の言うことを聞いて待つ？好きな方を選んでいいわ。最終的に決めるのは私ではない、貴方達。どうするのかしら？私としてはどちらでも構わないわよ」

紫の問いに考えるエレン、カル、ファブリス、モワノー、ロバン。考える五人を見て紫はクスクスと笑う。

五人が考えた末の

決断は……

「私達をタラの元に連れて行つて」

紫を信じることに決めた。

五人を代表をして言つたエレンの瞳に、静かな炎が灯る。エレンだけではない。カルとファブリスは見極めようとしながらも、紫を信じてその身を委ね、人見知りするモノーは、目に涙を浮かべながらも決意する。ロバンは燃える様な意志を宿していた。

そんな魔術師達に、ファミリエ達も最後まで着いて行くことを決める。

「ええ、分かつたわ。でも、少し待っていてね」

そんな彼等に紫は、成長した我が子を見守る母親の様な笑顔を浮かべる。

「行く前に、別の質問があるのだけど良い？」

真面目な顔をしてカルは質問をする。自分の持ち物を漁っていた紫の手が止まる。

「構わないわ。質問っていうのは何かしら？」

「どうして僕達を助けようとするんだ？紫さんに、何かメリットがあるのかい？」

「あら、そのことね。ええ、あるわよ。私だって、忙しいですもの。只では動かないわ」

「紫さんのメリットって……何？」

「それは簡単よ。貴方達に手を貸して、子供達を助け出せば、幻想郷は危なくない存在と

して、証明できるからよ」

「紫さん自身では助けに行かないのですか？紫さんが直接助けに行った方が、幻想郷は味方だと証明できると思うけどなあ！僕だったら、そうするよ！」

「貴方達が、私を信用するのに、どれくらい時間がかかっていたと分かっているのかしら？そもそも、子供達が、私を信用してくれると思っっているの？」

「あ……はい……。そうですね……」

紫の正論に思わずカルは黙ってしまふ。

「分かってくれたらそれで良いわ。さあ……貴方達の助けとなる物を用意しておいたわ」

紫が取り出したのは一枚の地図だ。

「この地図：一見して、普通の地図に見えるけど、何か特別な物なのですか？」

ファブリスが質問をすると、紫はにっこりと笑う。

「ええ。この地図は特別な物よ。ここは魔術が使えないから、おとなしいのだけど、この地図結構喋るのよ」

「喋るのですか!？」

「ええ、そうよ。でもそれだけではないわ。この地図は常に自動更新をしているわ。だから、都市の名前が変わったとしても、地図が教えてくれるから、迷うことは無いわ。」

で、この地図の使い方は、自分が今居る場所と移動したい場所を言うだけよ。目的の場所に、赤い丸が示してくれるわ。徒歩で時間を出すから、馬なら三で割り、ペガサスなら五で割ればいいらしいわ。詳しく知りたいのなら、こう唱えなさい、『デタイユス（細かく示す）の呪いによって、私の居場所を教えておくれ』とね」

一通り説明を終えると紫は、エレンに地図を渡して背を向く。エレンの髪の毛がパチツと鳴り、この地図は魔法の地図だと証明する。

「さあ……行きましうか。準備は宜しくて？」

紫が訊ねると五人は一斉に頷く。

紫は彼等につこりと笑うと、何も無い空間から目蓋が開くように、無数の目がある黒い空間が現れた。空間の切れ端には、ご丁寧に紫と同じリボンが結わえてあった。

「ええ……これは……。子供達を何とか説得しても……入ってくれないと、思うわ……」

無数の目がある黒い空間に恐怖を感じてドン引きするモワノー。タラを助けに行くには、この空間を通らなければならないのだ。モワノーは入る前から涙を流した。

衛兵が最初から紫を怖がっていたのも、女性初級魔術師達がずっと黙っていたのも、この無数の目のある黒い空間を見たからだ。

「ええ、そうでしょ。だから貴方達に頼んでいるのよ」

「あのう…… 帰りは？」

逆に気にしていないカルは、大事なことを質問をする。

「それはごめんなさい。貴方達で頑張ってちょうだい」

「えっ!?これ、片道切符なのかよ！」

「大丈夫！僕に作戦があるから！」

不安がるカルにロバンが励ます。

「作戦って何だよ！」

「僕の身体には、何か合った時の為に、探知の魔術が掛かっているから、それが発動すれば、すぐに僕達が今いる場所を、高等魔術師達に教えてくれるのさ！そうすれば、お父…… 高等魔術師達が助けに来てくれるさ！」

「その魔法が発動するのは、どのタイミング？」

「二日後だ」

「二日間の辛抱ね」

「何だ、余裕じゃん！さっさと行こうよ！」

「行くなら、空間に飛び込んでね」

やる気になった五人だが、改めて目のある空間を見て怖じ気付く。

「だけど……」

「えいー！」

エレンがソクラテスを連れて最初に入る。同じ故郷の者通しとして、信じたのだ。

「僕だって！」

ロバンもエレンの後を追うように、すぐ空間に飛び込んだ。

「なら、僕も！」

カルはロバンに負けないように後を追う。ファミリエであるブロンタンも、カルの勢いに負けないように飛び込んだ。

後に残されたのは、ファブリスとモワノーとシーバだけだった。

「僕も……!!男として……!!負けるもんか！」

怖がる心を無視してファブリスは空間に飛び込んだ。

最後に残されたのはモワノーと、そのファミリエであるシーバだ。

「貴方は……大丈夫かしら？」

紫に心配されても怖くて返事ができないモワノー。

モワノーが何度も深呼吸をしていると、シーバがモワノーを安心させるように、先に空間に飛び込む。

「ま、待って！シーバ!!……私だって……!!私だって……!!行くんだ！」

モワノーは叫ぶと意を決して飛び込む。

後に残されたのは紫だけだ。

もうこの場所には、友達を助けに行つた勇敢な五人も、応援を呼びに行つた衛兵も、ただ怖がついていただけの女性初級魔術師達も居なかつた。

紫は面倒なことが起きる前に帰ろうとしたのだが……

「待てー待つんじやー！」

高等魔術師シエムを筆頭に、紫の前に現れる。その人数はまるで軍隊の様であった。

彼等は全員殺気立っているが、紫にはお構い無しだ。

「待たないわ。さようなら」

紫が黒い空間の中に入ると、目蓋を閉じる様に無くなつてしまった。

「もう……!!遅かつたのか!」

シエム達が悔やんでももう遅い。

エレン、カル、モワノー、ファブリス、ロバンの五人は、勇敢にタラを助けに行つてしまつたのだから。